

カムィヤキ古窯跡群 II

ため池等整備事業（木之又地区）に伴う発掘調査

1985年3月

鹿児島県大島郡伊仙町教育委員会

序 文

カムィヤキ古窯跡は、昭和58年6月土地改良ため池等整備事業現場で、地元研究家により発見されたものです。

古窯跡は「第1支群」と「第2支群」から成りこれまでの調査において、類須恵器の窯跡として貴重な文化財であることが分かりました。

本町では、県農政部の助成と業務委託を受けて記録保存の為、「第1支群」について発掘調査を実施しました。

本報告書は、その概要をまとめたものであります。これが関係者の学術研究の資料として活用されることを念願いたします。

この調査にあたって、県農政部、県文化課直接作業に従った方々をはじめ御協力くださった多くの皆さんに謝意を表します。

昭和60年3月

伊仙町教育委員会

教育長 寛山成男

例　　言

1. 本報告書は、ため池等整備事業（木之又地区）に伴う発掘調査報告書である。
2. 調査の組織は調査の経過の中で記した。
3. 本書で用いたレベル数値は、すべて海拔絶対高である。
4. 本書の執筆は次の通りである。

第Ⅰ章、第Ⅲ章－第1節、第2節－(1)(9)(0)0、第Ⅳ章…新　東	青　崎
第Ⅱ章、第Ⅲ章－第2節－(3)(4)(5)(7)(8)	中　村
第Ⅲ章－第2節－(6)	井ノ上
第Ⅲ章－第2節－(2)	
5. 出土遺物は通し番号としたので、挿図番号、図版番号は一致する。
6. 出土遺物は、本報告書刊行後伊仙町教育委員会が保管し、伊仙町歴史民俗資料館に展示・公開する。

目 次

序 文

例 言

第Ⅰ章 調査の経過	3
第1節 調査に至るまでの経過	
第2節 調査の組織	
第3節 調査の経過	
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	6
第Ⅲ章 調査の概要	12
第1節 第1支群の調査の概要	
第2節 烟跡の調査	
第Ⅳ章 まとめ	94

挿 図 目 次

第1図 カムイヤキ古窯跡と周辺遺跡	7
第2図 カムイヤキ古窯跡周辺地形図	9
第3図 カムイヤキ古窯跡第1支群遺構配置図	11
第4図 1号窯実測図	13
第5図 1号窯焚口出土遺物実測図	15
第6図 1号窯煙道開口部及び構内出土遺物実測図(1)	17
第7図 1号窯煙道開口部及び構内出土遺物実測図(2)	18
第8図 2号窯実測図と出土遺物実測図	19
第9図 3号窯実測図	21
第10図 3号窯灰原実測図	22
第11図 3号窯出土遺物実測図	23
第12図 4号窯・5号窯・6号窯配置図	26
第13図 4号窯・5号窯・6号窯断面図	27
第14図 灰1・2層出土遺物実測図	28
第15図 灰3層出土遺物実測図(1)	30
第16図 灰3層出土遺物実測図(2)	31
第17図 灰3層出土遺物実測図(3)	32
第18図 灰3層出土遺物実測図(4)	33
第19図 4号窯実測図	34
第20図 4号窯焚口及灰原出土遺物実測図(1)	35
第21図 4号窯灰原出土遺物実測図(2)	36
第22図 4号窯出土遺物実測図(3)	37
第23図 5号窯実測図	39
第24図 5号窯出土遺物実測図	40
第25図 6号窯実測図	43
第26図 6号窯出土遺物実測図	44
第27図 楕円形掘り込み遺構	45
第28図 楕円形掘り込み遺構出土遺物実測図	46
第29図 7号窯灰原断面図	48
第30図 7号窯灰原出土遺物実測図(1)	49

第31図	7号窯灰原出土遺物実測図(2).....	50	第66図	焼台実測図(1).....	92
第32図	灰原平面図	51	第67図	焼台実測図(2).....	93
第33図	灰(原)層断面図.....	52	表 目 次		
第34図	灰(原)層出土遺物器種一覧.....	60	表 1	カムイヤキ古窯跡群と周辺遺跡.....	7
第35図	灰(原)層出土遺物実測図(1).....	61	表 2	灰(原)層出土遺物一覧表.....	57
第36図	灰(原)層出土遺物実測図(2).....	62	表 3	灰(原)層出土遺物一覧表.....	58
第37図	灰(原)層出土遺物実測図(3).....	63	表 4	灰(原)層出土遺物一覧表.....	59
第38図	灰(原)層出土遺物実測図(4).....	64	表 5	カムイヤキ窯計測一覧表.....	95
第39図	灰(原)層出土遺物実測図(5).....	65	図 版 目 次		
第40図	灰(原)層出土遺物実測図(6).....	66	図版 1	第1支群遠景(南から)発掘前.....	99
第41図	灰(原)層出土遺物実測図(7).....	67	図版 2	第1支群全景(東から).....	100
第42図	灰(原)層出土遺物実測図(8).....	68	図版 3	1号窯全景・焼成部.....	101
第43図	灰(原)層出土遺物実測図(9).....	69	図版 4	1号窯焼成部・焚口.....	102
第44図	灰(原)層出土遺物実測図(10).....	70	図版 5	1号窯煙道開口部.....	103
第45図	灰(原)層出土遺物実測図(11).....	71	図版 6	1号窯民・煙出し部・煙道開口部	104
第46図	灰(原)層出土遺物実測図(12).....	72	図版 7	1号窯焼成部・煙道開口部.....	105
第47図	灰(原)層出土遺物実測図(13).....	73	図版 8	2号窯全景・3号窯全景.....	106
第48図	灰(原)層出土遺物実測図(14).....	74	図版 9	3号窯全景.....	107
第49図	灰(原)層出土遺物実測図(15).....	75	図版10	3号窯煙道・燃焼部・焚口.....	108
第50図	灰(原)層出土遺物実測図(16).....	76	図版11	4号窯・5号窯・6号窯全景.....	109
第51図	灰(原)層出土遺物実測図(17).....	77	図版12	5号窯焚口・焼成部.....	110
第52図	灰(原)層出土遺物実測図(18).....	78	図版13	4号窯・5号窯・椭円形遺構.....	111
第53図	灰(原)層出土遺物実測図(19).....	79	図版14	6号窯焚口・椭円形掘り込み遺構.....	112
第54図	灰(原)層出土遺物実測図(20).....	80	図版15	3号窯・6号窯・7号窯灰原.....	113
第55図	灰(原)層出土遺物実測図(21).....	81	図版16	B-2区灰原堆積状態.....	114
第56図	灰(原)層出土遺物実測図(22).....	82	図版17	B-2区灰原堆積状態.....	115
第57図	灰(原)層出土遺物実測図(23).....	83	図版18	出土遺物.....	116
第58図	灰(原)層出土遺物実測図(24).....	84	図版19	出土遺物.....	117
第59図	灰(原)層出土遺物実測図(25).....	85	図版20	出土遺物.....	118
第60図	灰(原)層出土遺物実測図(26).....	86	図版21	出土遺物.....	119
第61図	灰(原)層出土遺物実測図(27).....	87	図版22	出土遺物.....	120
第62図	灰(原)層出土遺物実測図(28).....	88	図版23	出土遺物.....	121
第63図	灰(原)層出土遺物実測図(29).....	89	図版24	出土遺物.....	122
第64図	注口実測図.....	90	図版25	出土遺物.....	123
第65図	灰(原)層出土遺物実測図(30).....	91	図版26	出土遺物(焼台).....	124

第Ⅰ章 調査の経過

第1節 調査に至るまでの経過

カムィヤキ古窯跡群は、地元の四本延宏・義恵和氏によって発見された窯跡群である。四本氏は、昭和56年6月、溜池等整備事業（木之又地区）に伴った事業区内の通称亀焼池の掘削断面に遺物片が散乱し、周辺に炭と遺物片が含まれている部分と窯壁の露呈している部分を発見した。伊仙町教育委員会に連絡するとともに、町文化財保護審議委員長義恵和氏と範囲確認のため再度現地を調査した。その結果、亀焼池の西側50mの傾斜面の裾部にも灰原らしき層が露出しているのを発見した。

伊仙町教育委員会は、県文化課と連絡をとり、県文化財保護審議員河口貞徳・同沈寿官氏および文化課職員が来島し、窯跡群を視察され保護対策等について指導・助言がなされた。このような経緯のなかで、町教育委員会は貴重な本古窯跡群の取扱いについて、県教育委員会文化課と協議を重ねた。その結果、南西諸島の先史時代研究のうえで、貴重な本窯跡群の保護対策の資料とするために遺跡の範囲確認等を、埋蔵文化財確認緊急調査業として、国・県の補助を得て実施した。確認調査は、昭和59年10月29日から11月14日まで実施した。調査の結果、第Ⅰ支群の亀焼池の掘削断面には10ヶ所の窯跡・灰原が確認され、第Ⅱ支群には7基の窯跡が確認された。

確認調査の結果をもとに伊仙町教育委員会は、県文化課・県農政部（県徳之島土地改良出張所）と協議の結果、溜池工事によって水没する第Ⅰ支群は本調査を実施することにした。発掘調査は伊仙町教育委員会が主体者となり、発掘調査は県文化課に依頼した。

第2節 調査の組織

事業主体者	鹿児島県農政部徳之島土地改良出張所
調査主体者	伊仙町教育委員会
〃責任者	伊仙町教育委員会 教育長 寛山成男 社会教育課長 関 昌弘（昭和59年8月まで） 〃 米田博重（昭和59年9月から） 社会教育主事 尾辻輝男 稻村忠彦（昭和59年8月まで） 中山忠良（〃） 寿元一美 国沢健祐（昭和60年1月まで） 重田吉明（昭和60年2月から）
伊仙町立歴史民俗資料館	館長 義山正市 郷 久志（昭和59年8月まで） 永久圭司（昭和59年8月から）

調査員 鹿児島県教育委員会文化課 主査 新 東 晃一
主事 青崎 和憲
" 中村耕治
" 井ノ上秀文

発掘調査及び報告書の作成において北九州市立考古博物館小田富士雄館長、県文化財保護審議会河口貞徳委員、鹿児島大学上村俊雄教授、文化庁佐久間豊調査官に指導・助言を得た。

なお、調査・企画において、県教育委員会文化課長桑原一廣、同課長補佐坂口暉、同主任幹中村文夫、同主任文化財研究員諏訪昭千代（昭和59年9月まで）、同主任文化財研究員向山勝貞（昭和59年9月から）の各氏のほか、同管理系の指導・助言を得た。

第3節 調査の経過

発掘調査は昭和59年12月3日から12月26日まで実施し、出土遺物の整理作業を昭和60年1月から3月の間で実施した。発掘調査の経過は、以下日誌抄で略述する。

12月3日（月）第1支群の発掘調査開始。盛土部分の排土作業。3号窯の検出作業。床面の清掃。1号窯の焼成部分の掘り下げ。文化庁佐久間豊調査官、面縄貝塚の調査指導、向山主任文化財研究員同行。

12月4日（火）1号窯、焼成部掘り下げ続行。煙道、煙出し部分確認する。4号窯、新しく山手に窯跡確認。出土遺物には、厚手の甕・鉢類がめだつ。1号窯と4号窯の掘り下げ以外は、全体の確認調査。

12月5日（水）1号窯の調査。窯中央部分の掘り下げ。断面用畔の修正。窯の焼成部床面より、須恵器片出土。焼台も多数検出。4号窯の調査、4号窯の窯尻部分の検出作業。4号窯の燃焼部の検出作業。灰層が残存している。燃焼部と窯尻部を残して、中間の窯焼成部は、破壊されている。

12月6日（木）1号窯の調査、焚口付近の掘り下げ。清掃作業。焚口から燃焼部にかけては、天井も残存し、保存状況が良好。側面、断面の写真、実測の準備。4号窯の調査、4号窯内の検出作業。

12月7日（金）1号窯の調査。煙道部の掘り込み部分の掘り下げ。掘り込み部分は、垂直に下がり、70cmで平坦になる。煙道部に閉塞石検出。その壁側に須恵器（完形に近い）片が出土する。煙道掘り込みの周囲には、排水溝が設けられている。4号窯の検出作業、4号窯の窯体部分から、5号窯が作られている。4号窯の窯尻部分を燃焼部の天井部に位置させている。5号窯の調査、断面を残して、5号窯の検出作業。

12月8日（土）1号窯の調査。煙道部の掘り下げ作業。排水口の延長部分の検出作業。排水溝内の埋土は、焼土層と須恵器片が若干混入する。4号窯の調査、床面の検出作業。

12月10日（月）午前中、雨の為作業中止。雨の為、排土作業。Ⅱ区に盛った土の運搬。面縄遺跡から用具運搬。テント張り替え。

12月11日（火）1号窯の調査、煙道部の末端確認作業、煙道部No.2畔の断面実測、写真撮影、

焚口部断面実測。3号窯の調査。3号窯縦断面実測。畔取りはずし作業。煙道部断面実測。3号窯内、清掃。Ⅱ区の表土剥ぎ作業し近世のチコ出土。

12月12日（水）1号窯の調査、焼成部の中央断面実測。3号窯の調査、焚口付近の清掃、後、全体写真。窯体の断面実測。4号窯の断面清掃。6号窯の灰原確認。Ⅱ区の耕土作業。

12月13日（木）1号窯の調査。煙道部分の床面検出終了。写真撮影。焼成部断面取りはずし作業、窯内の清掃。4号窯、断面実測、取りはずし、後、灰原の検出作業。2号窯、2号窯の清掃、後、掘り下げ作業。写真撮影。徳之島内、三町文化財審議会現地見学。

12月14日（金）1号窯、焚口の側面実測、写真撮影。焚口付近の検出作業。2号窯、平面実測（窯尻部分の残存）4号窯、灰原の検出作業。Ⅱ区、西側トレンチ掘り下げ開始。灰層の確認。

12月16日（日）4号窯、窯内の検出作業。窯内の灰層の検討。窯横にピット検出。Ⅱ区、Ⅰ区の盛土排除作業。

12月17日（月）1号窯、煙道部、平面実測終了。4号窯、焚口の右側のピット検出作業。焼台の廐棄場？焼台がピット内から多数検出される。灰層が2枚確認される。5号窯、窯内断面用の半分掘り下げ作業。

12月18日（火）1号窯、窯内割り付け、平面実測。4号窯、窯内遺構検出。5号窯、燃焼部（天井残存部分）の断面実測。焚口付近の平面実測。この部分に、焼台が集中している。Ⅱ区東側トレンチ内、灰原検出作業。

12月19日（水）4号窯、窯内検出作業。5号窯、窯内平面実測継続。Ⅱ区のトレンチ掘り下げ作業。灰層2～3層の検出。

12月20日（木）4号窯、検出作業続行。5号窯、平面実測続行。6号窯（4号窯、5号窯の北側に検出）焚口部分の検出（断面実測）。どびんの口（注口）が出土。Ⅱ区灰原掘り下げ続行。第2トレンチ（西側）掘り下げ終了…断面実測。4号窯の灰原掘り下げ開始。

12月21日（金）4号窯の右側のピット状遺構の検出作業。6号窯の平面実測。Ⅱ区掘り下げ、灰3層の掘り下げ。灰2、3層泥層の掘り下げ。第2トレンチの断面実測。

12月22日（土）4号窯…平面実測、断面実測の追加。6号窯…平面実測追加。Ⅱ区、灰原掘り下げ作業続行。灰層毎に掘り下げる。

12月23日（日）4号窯の灰原の掘り下げ。Ⅱ区の灰原の掘り下げ作業。Ⅲ区（Ⅱ区の北側）の灰原掘り下げに一部とりかかる。Ⅱ区北側、断面写真撮影及び実測。Ⅱ区西側、写真撮影。

12月24日（月）4号窯の右側のピット掘り下げ、実測完了。Ⅱ区-2、北側部分掘り下げ。灰3層をとりあげ、最下層灰原に移る。北側で灰層は、薄くなる。Ⅲ区…灰原残存部掘り下げ。灰2層下部と灰3層が区分可能。Ⅱ区の北側断面実測終了。

12月25日（火）Ⅱ区およびⅢ区の灰原の掘り下げ作業。Ⅱ-2区、残部掘り下げ。完掘状態の地形測量。

12月26日（水）1号窯、2号窯、3号窯、4号窯、5号窯、6号窯の窯跡の残存部分には、川砂を窯内に入れて、土のう袋で補強して、保存処理を行う。遺物の運搬。調査用具の片づけ。発掘調査終了。

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

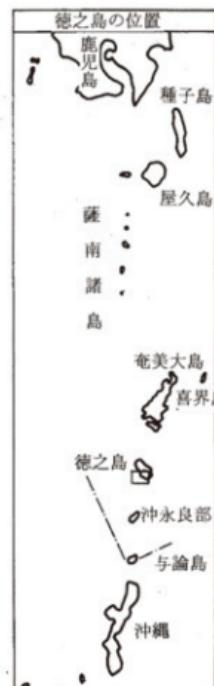
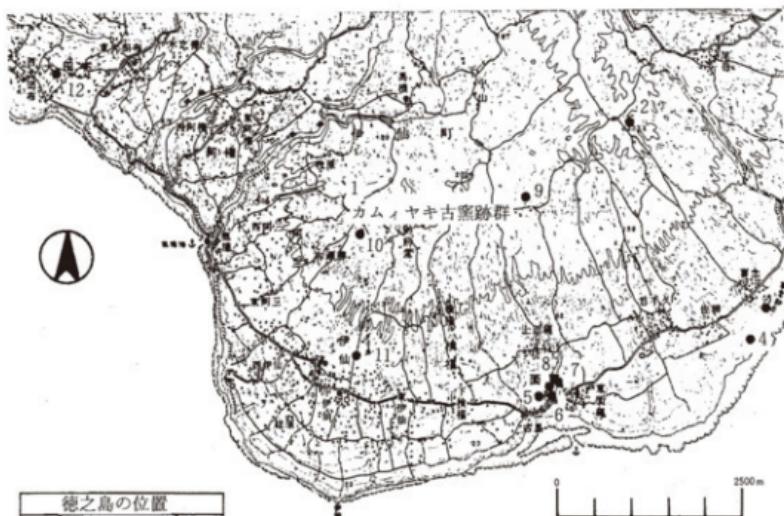
徳之島は、薩摩半島より南へ約500km経てた奄美諸島の一つで、奄美大島と沖永良部島の間に位置する。島は東北部から南北方向に延び、中央部には標高645mの井之川岳を主峰とする花崗岩の山地が南北に連なる。又、標高約200m付近を境に、山地と隆起珊瑚礁に分かれ、海岸に向かって緩かに傾斜した段丘が広がり、特に島の東南部から南部にかけて隆起珊瑚礁が発達して広大な海岸段丘が形成されている。

伊仙町は、徳之島の南西部に位置し、北に天城町、東に徳之島町が隣接する。町の北東部にあたる標高417.4m犬田布岳からは、南へ延びた山地やその裾野が緩かに傾斜し、平坦地となり、集落やサトウキビ畑が連なり、砂丘や珊瑚礁が発達した海岸線となる。

カムイヤキ古窯跡群（第Ⅰ支群・第Ⅱ支群）は、町の中心地より北へ約3km経てた県道31号線の阿三から馬根ダムへ向かう町道脇の伊仙町阿三カムイヤキの山中にあり、周辺は狭小な谷が形成されている。第Ⅰ支群は、標高約170mでため池（巾45m）の南に面した傾斜地に、第Ⅱ支群は、第Ⅰ支群の奥約50m経てた南に面した傾斜地に、各々位置している。

奄美の中で徳之島は大島について先史遺跡の多い島であり、その中でも伊仙町での遺跡は特筆すべき数（26遺跡）を示し、しかも南部の海岸沿いに集中している。今日まで、地元の研究者をはじめ、県内外の研究者や行政関係者によって学術調査や重要確認調査が実施され、貴重な資料や報告がなされている。

貝塚としては、喜念式土器を標準とし貝札の表札がある喜念貝塚、本川貝塚、佐弁貝塚や面縄西洞式、荻堂式、喜念式、字宿上層式土器や貝製品、鹿の角が出土した大田布貝塚、兼久式土器を主体とし、瓜形文、弥生前～中期、完全な人骨を埋葬する箱式石棺墓を検出した面縄第Ⅰ、嘉徳Ⅰ式・Ⅱ式が間層を隔てて出土した面縄第Ⅲ、昭和59年度調査の面縄第Ⅲ・第Ⅳの貝塚等があり、貝輪や人骨が検出された洞穴遺跡喜念原始墓、また近年、岩陰や砂丘地以外でも遺跡の発見がみられ、標高235mの喜念上泉袋には、土器や石器が採集された喜念上原遺跡、類須恵器や磁器が分布するミンツキ集落跡、完形の青磁碗12点が工事中に発見された面縄按城（通称ウガンウスジ）などが知られ、南西諸島における土器形式編年の問題などの究明や鹿児島本島・沖縄・中国大陆との係り合い等、考古学研究の重要なフィールドとして注目されている。この中にあって、南西諸島でナゾとされてきた類須恵器を伴出する古窯跡群が地元の研究者等によって発見されたことは、センセーショナルな話題として供せられ、学史的にも意義のあることは言うまでもない。



第1図 カムイヤキ古窯跡と周辺遺跡

表1 カムイヤキ古窯跡群と周辺遺跡

番号	遺跡名	所在地	備考	文献
1.	カムイヤキ古窯群	伊仙町阿三カムイヤキ	第1支群、第2支群(類須恵器)	
2	喜念上原	〃 喜念上原袋	土器・石斧、磨石	①
3	喜念貝塚	〃 〃 兼久	宇宙上層式	②
4	佐弁貝塚	〃 佐弁東ミヤド	土器・石器	③④
5	面繩第1貝塚	〃 面繩	洞穴遺跡、箱式右棺・人骨	⑤
6	第2	〃 "	住居址(サンゴ敷)・嘉德1・2式土器	⑥
7	第3	〃 " 東旅久原	兼久式土器	⑦⑧
8	第3	〃 " 兼久661	面繩東洞式・西洞式・前庭式土器	⑨⑩
9	面繩按司城	〃 上面繩	青磁窯完形品12点	⑪
10	ロタキ洞穴	〃 門三	洞穴遺跡・曾烟式・兼久式土器	⑫
11	ミンヅキ集落跡	〃 伊仙	陶器・磁器	⑬
12	田市貝塚	〃 犬田市蓮木竿	貝塚・面繩西洞式・瓦石	⑭

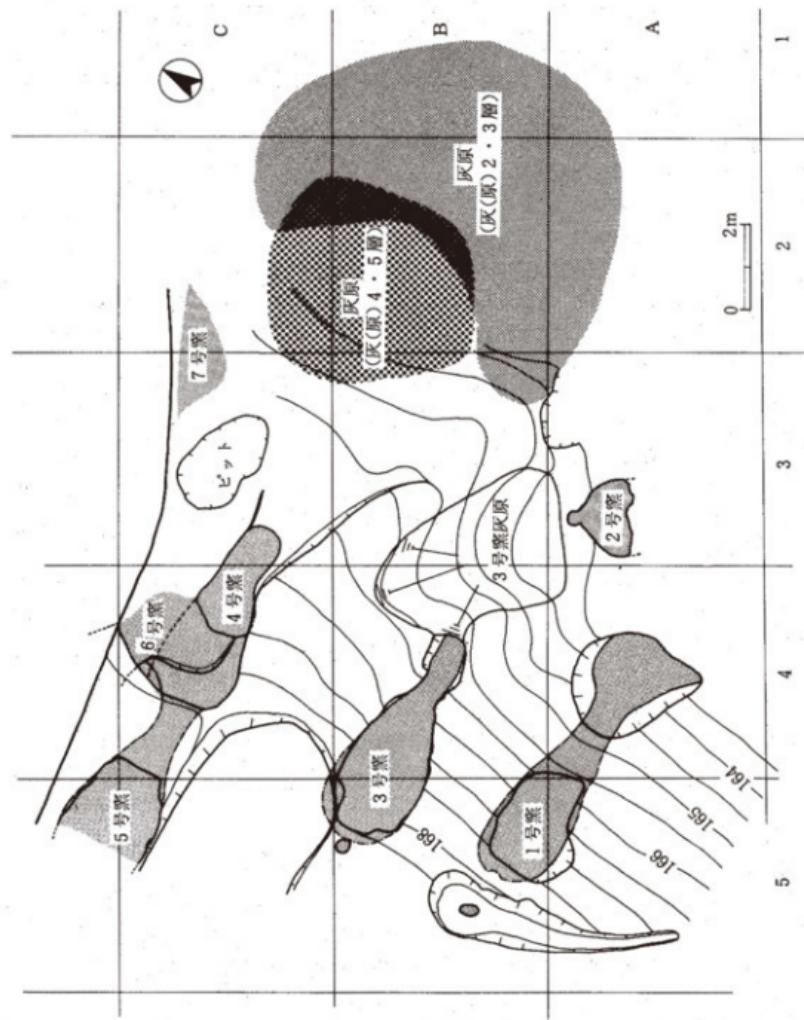
文 献

- ①義憲和「伊仙町の歴史」「伊仙町誌」1978年
- ②三宅宗悦・藤岡謙二郎「徳之島出土の貝塚土器に就いて」考古学雑誌11-5 1940年
- ③白木宗和美・義憲和「大島郡伊仙町の先史学的所見」南日本文化第9号 1976年
- ④牛ノ浜修・堂込秀人「面繩第1・第2貝塚」伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(1) 1983年
- ⑤河口貞徳「南島先史時代」鹿児島大学南方産業科学研究所報告第1-2号 1956年
- ⑥九会会合「徳之島面繩第4貝塚調査報告」「奄美その自然と文化」1959年
- ⑦伊仙町立歴史民俗資料館展示
- ⑧義憲和氏教示
- ⑨吉永正史・宮田栄二「犬田市貝塚」伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(2) 1984年
- ⑩調査報告書は、1985年3月刊行予定



第2図 カムイヤキ古窯跡周辺地形図

第3図 カムイヤキ古窯跡第1支群遺構配置図



第Ⅲ章 調査の概要

第1節 第1支群の調査の概要

第1支群は、伊仙～馬根の農道右側の傾斜面に位置する。農道は、古くから左右の丘陵をつなぐ溜池の堤防としても利用されていた。溜池等整備事業の老朽溜池改修工事に伴い、農道の位置する堤防と左右の側壁の改修工事がおこなわれ、左側（北西）の側壁の基礎工事掘削断面に窯跡・灰原等が発見されたものである。

発掘調査は、確認調査で確認された溜池改修基礎工事の掘削断面から約10m奥にかけての堤防盛土予定部分の範囲を行った。

掘削断面を観察すると、地山の灰白色の花崗岩はほぼ中央で最も深くなり両端は高くなる凹面を呈しており、掘削断面は、小谷部を直角に切断したことが看取された。

確認調査の結果、掘削断面には窯跡が3基と灰原が6ヶ所程度が確認されたが、本調査の結果では、窯跡が7基発見され、灰原（灰層）は5ヶ所発見され調査を行った（なお、窯跡に付随した灰原は各窯跡に含めて調査を行った）。

第2節 窯跡の調査

窯跡は、7基発見され、そのうち1号窯から5号窯の5基については調査を行ない、6号窯と7号窯については焚口部分と窯に付随する灰原の調査を行なった。6号窯と7号窯の本体は、用地外に位置していることになる。なお、発掘調査終了後は、発掘した窯体内に砂を埋納して窯を保護し、その上を盛土で被って堤防工事はおこなわれている。

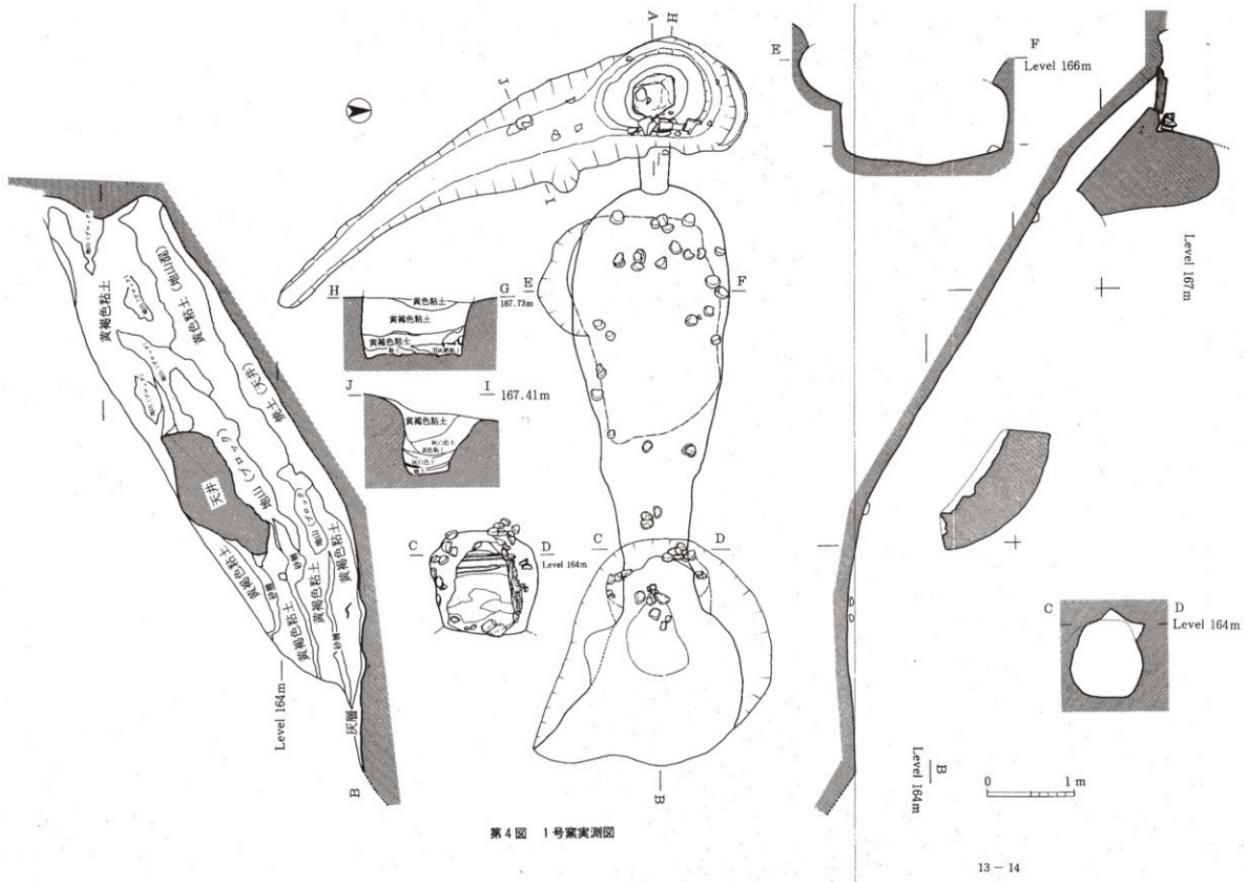
(1) 1号窯（第4図）

1号窯は、溜池の側壁最西端のA～B-4～5区に位置し、焚口の一部と灰原にかけては掘削工事によって削平されている。

1号窯は、窯体主軸はN-86°Wを向き、傾斜面の等高線にはば直交する。現存する焚口付近から煙道開口部までの窯体の全長は、8.4mを測り、灰白色の花崗岩の地山を刺り抜いてつくられた無段の登り窯である。

窯の断面を観察すると、削平部分から2.2mは水平な床面を呈し（若干凹面状）、3.0mで傾斜角度が変る。この水平部分の2.2m付近までを焚口とし、ここから傾斜角度が変る3.0m付近までを燃焼部とした。3.0mから窯尻までが焼成部にあたる。窯尻には煙出しが穿たれ、煙道が設けられている。

焚口 灰原と焚口の一部は削平を受けているが、焚口の現存部分は約2.2mを測る。焚口の平面形は、灰原へ向かって90cmから75cmと扇状に広がっている。床面は、若干凹面気味であるがほぼ水平である。床面は、火を受け若干焼けており、さらに、床面直上には5～10cm程度の木炭を含んだ厚い灰の堆積層がみられる。この灰層の中には、少量の遺物片や焼台片が混在している。

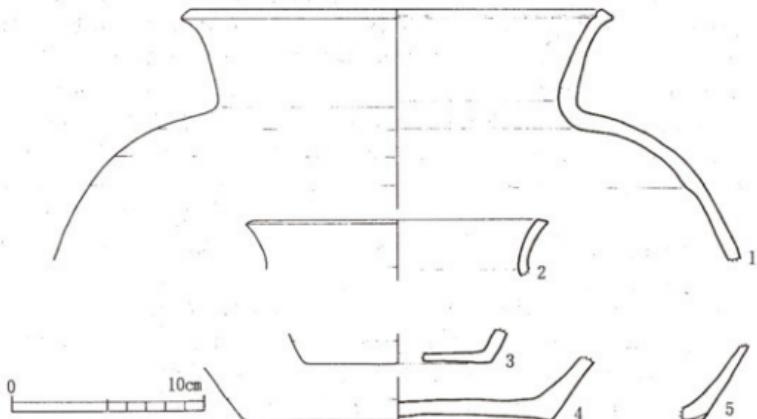


燃焼部 焚口端（2.2m付近）から傾斜各度の変る3.0mの間が燃焼部にあたる。この間の窓幅は狭く、90cm, 73cm, 100cmを測る。燃焼部の天井部分は残存している。燃焼部の窓口付近は、珊瑚の柱状石が側壁として粘土によって埋め込まれ、その周囲の粘土内には焼台として使用された粘土塊がレンガ状に埋め込まれており、窓口の閉鎖状態が看取される。天井は、約80cmの高さで残存するが、天井面は剥離が激しく凹凸がみられる。床面は、わずかに緩傾斜がみられ、焼成部から転落した焼台が集中して堆積している。

燃成部 燃焼部の緩傾斜面の終りから窓までの急傾斜面の部分にあたる。燃焼部の長さは約3.7mを測り、傾斜角度は31°を測る。窓横断面は、床面は比較的平坦で水平を呈し、側壁はカマボコ状に外張りに立ち上がり天井へ続く。焼成部の平面は、燃焼部の境いの1.0mから開広し、中央付近で幅1.8mと最大に広がるが、焼成部の長径が3.7mと長いため著しく拡張している状態には感じない。焼成部床面には、20数個の焼台が原位置に確認された。焼台は、粘土塊であり床接着面で直径15cm程度を測り、頂部で直径7cm程度の大きさのものである。そして、焼台の頂部は水平に作られており、床面の傾斜角度を修正している。さらに、頂部の平坦面の端に受け部をもつものもある。

煙出し部と煙道部 煙出し部は、窓の床面から同じ角度で約30cm進み、その先は46.5°の急傾斜角で進み開口する。煙道は、窓付近では高さ25cm・幅30cmの半円形を呈し、開口部付近では高さ22cm・幅40cmの扁平形となる。

煙道の開口部付近は、ほぼ完全な形で検出された。開口部の床面より高さ約65cmの所で掘り形が検出され、掘り形は、そこから南側へ溝状に続いている。開口部周辺の掘り形の壁面は、煙火を受けて赤く変色している。主軸に沿った開口部付近の掘り形の幅は125cmを測り、床面で100cmを測る。開口部から西南へ1.5m付近（AB断面）の溝状の掘り形は、検出幅100cm深さ70cm、床面幅45cmを測る。溝状部分は、その先は窓を囲むようにカーブして進み、開口部から



第5図 1号窓焚口出土遺物実測図

約5mのところで床面幅約20cmを最後に消滅している。

開口部は、厚さ10cmで50cm×50cmの砂岩質の扁平な平石で閉鎖された状態で検出された。そして、平石の南側の壁に沿って一個体分の壺の破片が出土した。壺は、破碎されていたが、ほぼ完全に復元されるものであった。高さ34cmの把手付の壺であり、焼成の段階で胴部に大きな亀裂が生じているものである。

掘り形床面は、煙道開口部を中心に掘り形の壁に沿って幅10cm～15cm・深さ7cm程度の周溝が巡り、南側の溝状部分へ続いている。煙道開口部を巡る周溝は排水溝であり、それに続く溝状部分も排水溝と考えられるが、煙道開口部への登り道も兼ね備えていたことも想定される。溝状部分の床面直上には、煙道開口部より出た焼土が混入して堆積している。

1号窯の出土遺物（第5図～第7図）

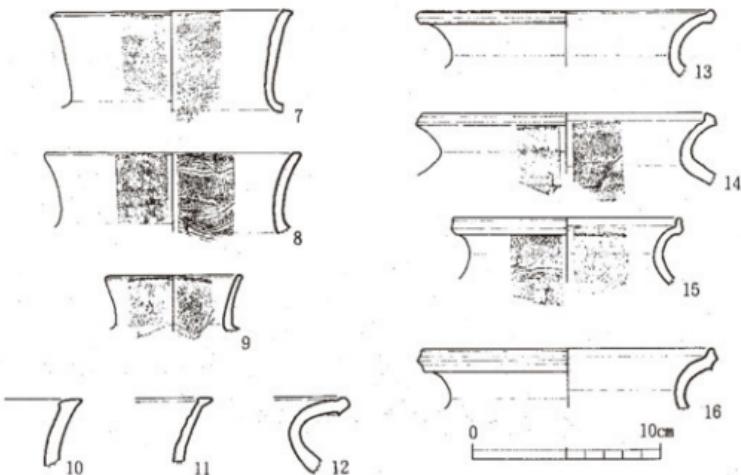
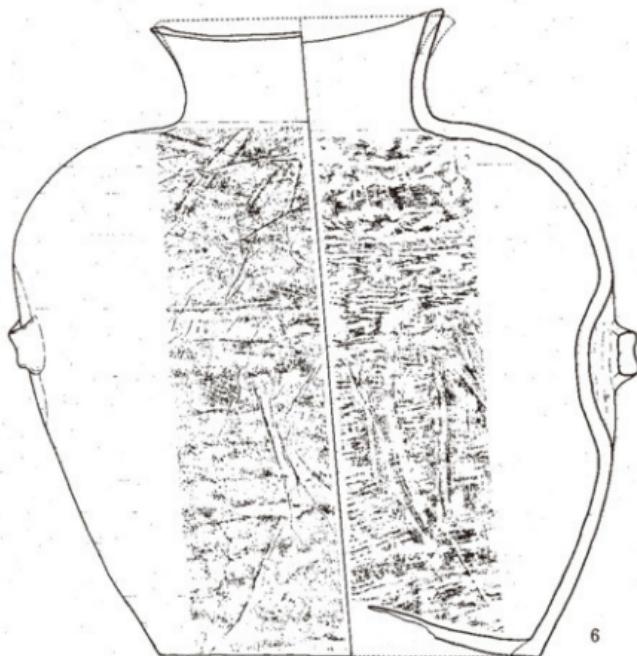
1号窯の出土遺物は、窯内に数片の胴部片がみられるほかは焚口の床面直上の灰層中に器種の判明するものが数点出土している。そのほかは、煙道開口部付近や排水溝（登り道）の流入堆積層中より多量の遺物が出土している。

焚口出土遺物 1は、口径22.5cmを測る生焼けの大壺である。口縁部は直口し、口唇部にかけてわずかに外反する。口唇部は、わずかに肥厚しながら平坦に終る。肩部は、丸味をもって張り胴部へ続く。口縁部外面の整形は、ナデ状の整形でわずかに条線が残る。肩部から胴部にかけては、ヘラ状整形であり、2cm程度の稜線が残る。口縁部内面は、ていねいなナデ整形である。頸部下から胴部の内面には、幅の狭い平行タタキ目の後、ナデ整形で仕上げている。焼成は生焼けのため悪く、色調は外面が黄灰色、内面は黄褐色を呈する。胎土には、長石風の白い微砂粒を含む。2も同様な壺の口縁部である。3～4は、壺の底部破片である。底は、上げ底状になるが、高温のための焼成時のヒズミである。

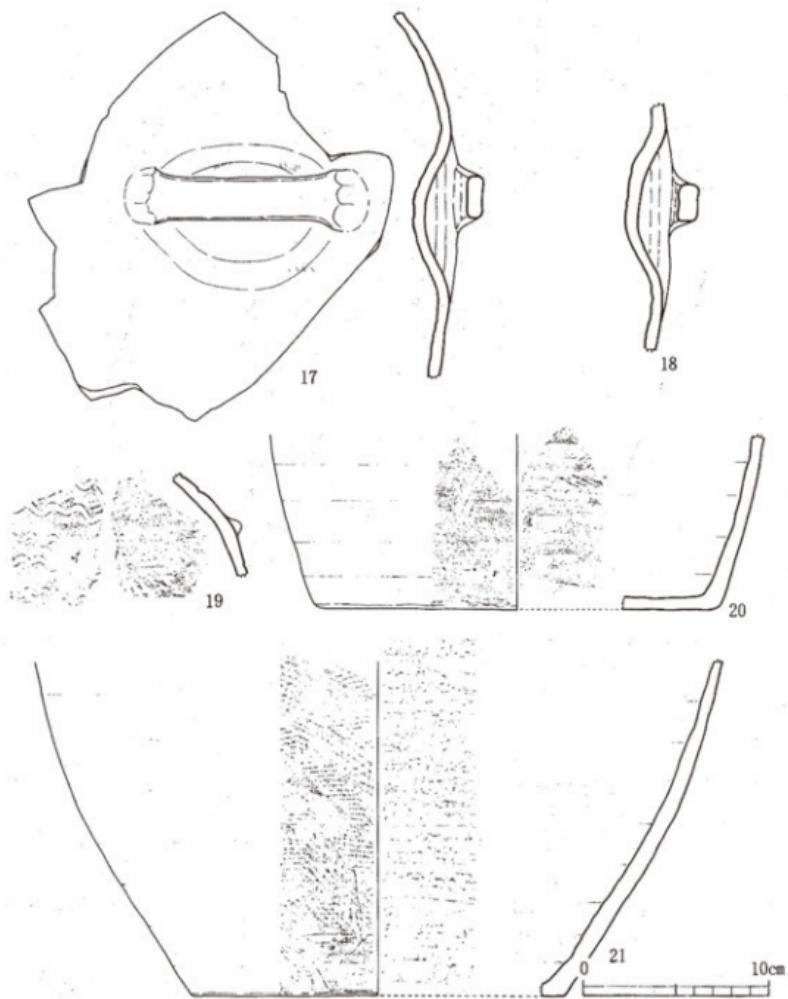
煙道開口部及び溝状部分出土遺物 6は、煙道開口部の閉鎖平石と南側壁の間に置かれていた壺である。高さ34cm、口径16cm、底径20cmを測り、最大胴部径は32cmである。胴部中位の左右に把手をもつ。口縁部は、頸部からほぼ直口気味に立ち上り、口唇部にかけて外反する。口唇部は平坦におさめる。肩部は、丸味をもって張り胴部へ続くが、胴部は底部径が広いためあまり張らない。把手は、胴部の中位に横位に付けられている。把手は、幅2.2cm、長さ8cm程度のものである。把手の着けられた胴部壁は、内側に球形に凹められている。焼成時の亀裂や破損が激しく、胴部の一部は欠損している。口縁部は、内外ともナデ状のていねいな仕上げがみられる。胴部外面は、ヘラ状整形で1.5～2cmの稜線が残る。胴部内面は、平行タタキ目の後、棒状の工具で荒いナデ状の整形がおこなわれている。平行タタキ目は、粘土紐巻き上げの粘土紐接合部分を中心に施されている。色調は、器面は青灰色で断面は茶褐色を呈す。胎土には、白色の微砂粒を混入する。

7～11は、同様の壺の口縁部である。10、11のように、口縁部を拡張するものもある。

12～16は、壺の口縁部片である。口縁部は、大きく外反し、口縁端部から口唇部に特徴がみられる。口縁端部を直上させ、その外面を2段の押えによって変化をつけている。12、16のように下段を強く押して下端に稜を作るものや、13のように2段の押えが一つになって丸味をもつものなどがある。



第6図 1号窯煙道開口部及び溝内出土遺物実測図(1)



第7図 1号窯煙道開口部及び溝内出土遺物実測図(2)

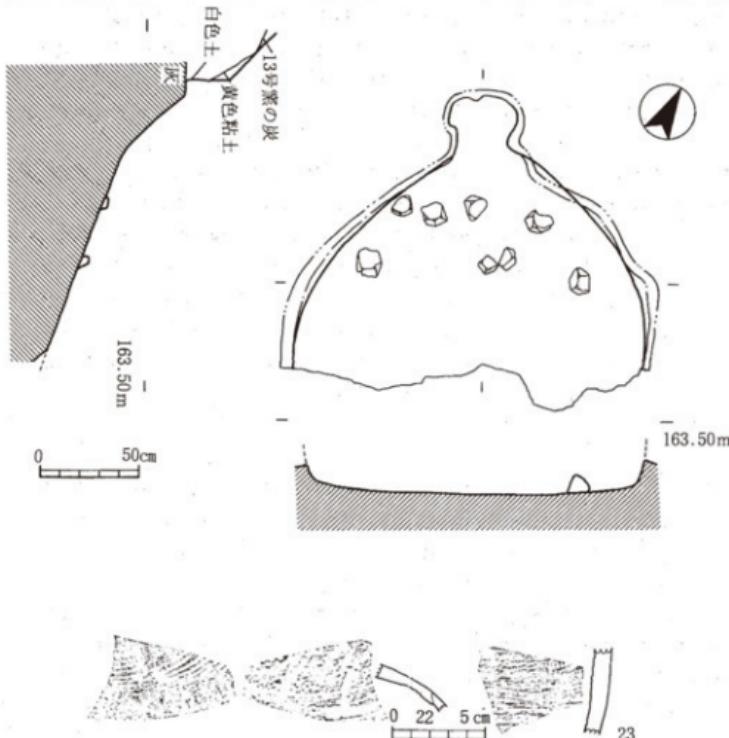
17・18は、把手の部分である。把手は、いざれも器檻の部分を球型に凹めて空間を作っている。把手部分を中心に、凹みの最も深いところは把手より若干下にあり、把手を合理的に握れるようにつくられている。

19は、波状ヘラ書き文をもつ胴部片である。縦位の貼付文が肩部付近に貼付けられている。

20・21は、底部片である。20は、底径21.5cmと広く胴部は寸胴状になることが想定される。21は、底径20cmであるが胴部は大きく拡がる。

(2) 2号窯 (第8図)

1号窯の南西約4mのところに位置する。焚口、燃焼部、天井部は削平されており、わずかに窯尻部を残すものである。傾斜面の等高線にはば直交する形で窯が形成されている。現存長は約140cmを測る。現存する壁面までの高さは約17cmを測る。焼成部の最大幅になるとを考えられる部分から窯尻、煙道の一部分が残存しているが、この最大幅の部分で176cmを測る。床面の表面は、硬質に焼けて青灰色あるいは暗赤褐色を呈している。壁面の断面ではこの硬質に焼け



第8図 2号窯実測図と出土遺物実測図

た部分が厚いところは7cm、薄いところで4cmを測る。

焼成部 焼成部最大幅になると考えられる部分から窯尻まで110cmを測る。傾斜角度は20°を測る。横断面は両壁面から中央部にかけてわずかに凹んでいるがほぼ水平となっている。焼成部に8個の焼台が原位置で確認された。焼台はその頂部がほぼ水平に作られており、床面の傾斜角度を修正している。

煙出し部と煙道部 窯尻から約45°の角度をもつ煙道が設けられている。削平されているためその形、大きさは明らかでないが、推定径約30cmの略円形と考えられる。

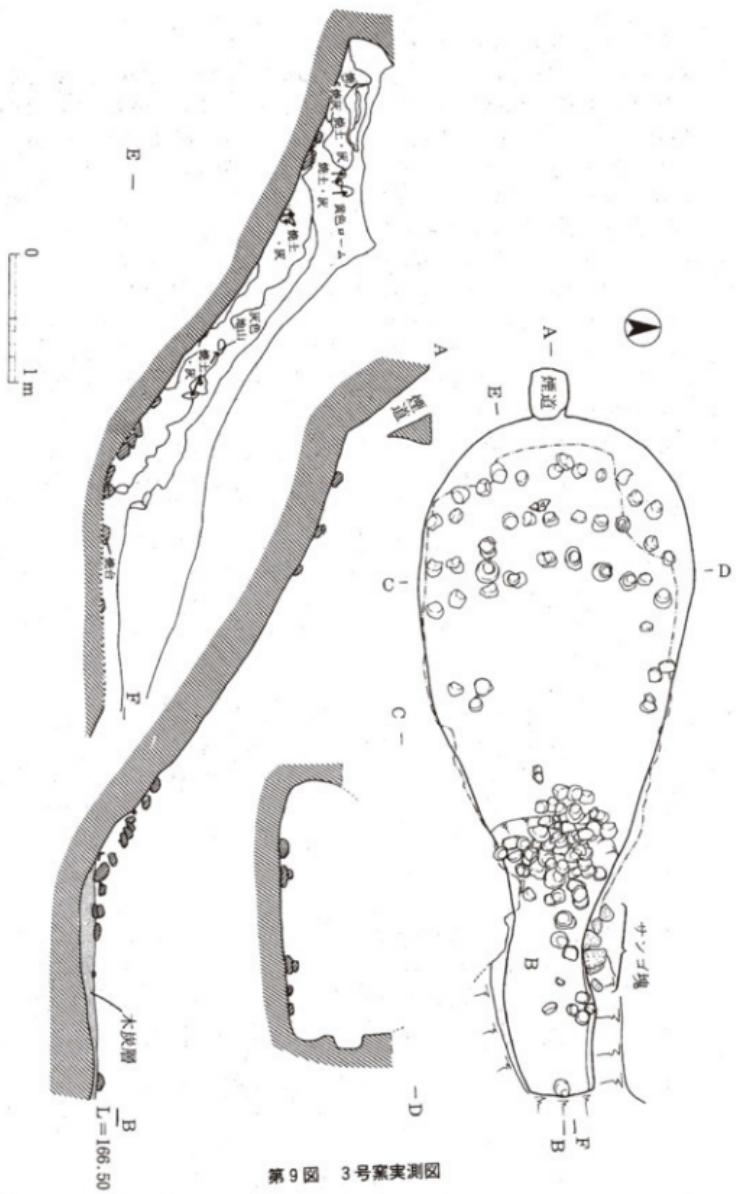
遺物は焼成部の埋土から甕の破片が2点出土した。22は甕の肩部の破片である。外面は斜行平行タタキの後、ナデ調整、内面は格子目文タタキの後、凹線状の条痕を残す施文具で調整している。内面に輪積の痕跡を残す。23は甕の胸部破片である。外側はていねいなナデ調整、内面は斜行平行タタキの後、凹線状のわずかな条痕を残す施文具で調整している。

(3) 3号窯 (第9図)

地下式無段剝抜形式の登窯で、灰原を含めて窯構造を知るための保存状態は良好といえる窯であった。窯体主軸の方向はN91°Wで、丘陵の等高線にはほぼ直行する。床幅は焚口で縮小させ燃焼部から焼成部にかけて大きく広がり、焼成部中ほどで最も幅が広くなり、弧状を呈した窯尻を呈す。窯体の全長は約4.7mで全体的にすんぐりとし、いわゆるイチヂク形の平面プランとなる。なお、窯尻付近から煙出し部にかけて天井の一部が残存していた。

焚口 焚口の床面の幅は約60cmを測り、側壁はわずかに膨らむ。東側の焚口側壁には、縦長に加工した珊瑚塊を2列に、あるいは珊瑚塊を積みあげていた。すき間に粘土をつめ込み、目づめとしている。床面は焚口付近が最も深く、前庭部にかけてゆるやかに上降の傾斜し、燃焼部にかけては比較的急な上降の傾斜がみられ、舟底状の窪地となる。燃焼部端から焚口・前庭部にかけて炭灰の堆積層が検出され、焚口で13cmを測り、前庭部から灰原へ向かって徐々に薄くなる。焚口での天井部の高さは崩壊のため不明であるが、焚口の幅から推測して低くした入口であったことがうかがわれる。前庭部は、焚口からわずかに左右に広がり幅は約76cm、長さ約1mを測る。側壁はゆるやかに傾斜をなす。床面は焚口に向かってゆるやかに傾斜して下降する。また、焚口や前庭部には、窯出しや灰かき出し時の焼台や陶器片が炭灰層の上位に発見された。

燃焼部 焚口から窯内のどの位置までを燃焼部として区別するのか識別は困難であるが、焚口から約80cm程で窯内の床面に、弧状を呈した一段低い窪地がみられ、この部位が燃焼部に相当するものとした。壁面は焚口から外側に拡がり、側壁断面は崩張り気味となる。又、壁面は高温のためか荒れて凹凸がみられ、さらに、ひび割れが生じ、かなり固く焼けガラス状塊化し、剥落しやすい状態であった。なお、東壁には15個の焼台を用いて高さ約70cm、幅約25cmの範囲に積み重ねられていた。燃焼部の幅は約84cmを測り、床面の傾斜角度は約 度を保ち、一部炭灰の堆積がみられた。焼成部の一部や燃焼部には、窯出しや灰かき出し時の数10個の焼台や少量の陶器片が2重・3重に重なって出土した。天井はすでに崩壊しているため、その高さ

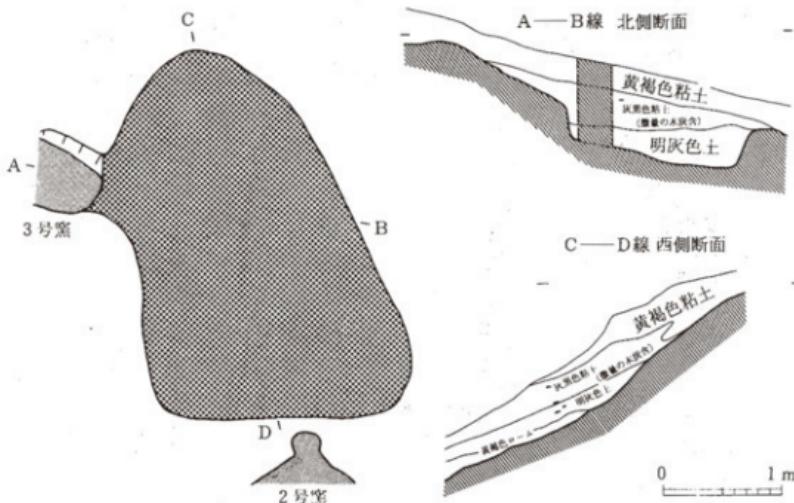


第9図 3号窯実測図

は不明であるが、高いものではないだろう。

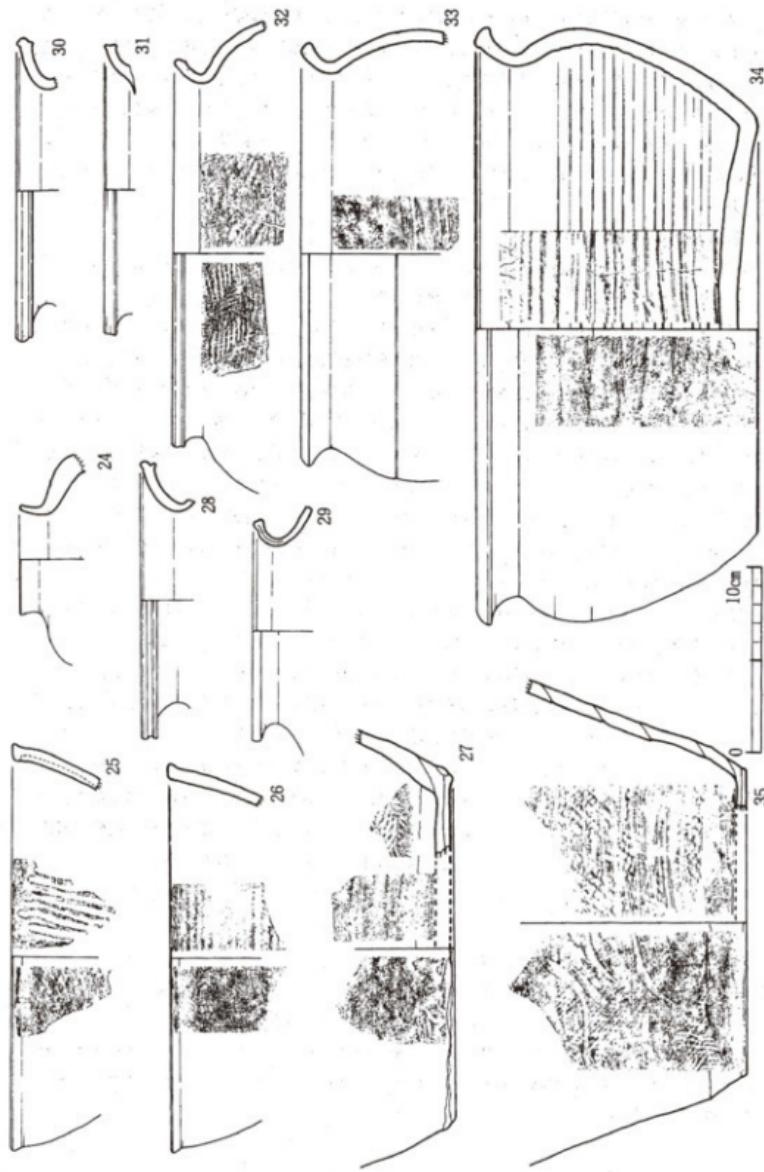
焼成部 長さは、焼成部の境とした窯地から約3.1mを測る。焼成部から拡がった側壁は、焼成部の中ほどで約2.12mと最も幅が広くなる。この部位から徐々に内側しながら弧状を呈す奥壁へと続く。床面の傾斜角度は約36度であるが、奥壁から手前へ約1mの位置で約20度の傾斜へといくぶんゆるやかになる。床面の断面は、U字形を呈し、側壁は胴ぶくらみを呈す。この部分の壁面は良く焼けて固く締っている。奥壁から約1.1m手前の東壁には床面からの高さ約35cm、長さ約1mにわたって、壁の崩壊部分がみられ、階段状を呈し補修も行わずに崩壊したままで再度の窯焼きを行っている状態での痕跡がみられた。天井は奥壁部周辺で幅25cm～50cmが残存していた。床面の傾斜角度が比較的ゆるやかな奥壁に近い約1.4mの範囲内には、馬蹄形の焼台が横列3列のしかも弧状に整然と配置され、床面に密着した状態で発見された。奥壁に近い1列目には13個2列目は11個、3列目は10個、又、2列目と3列目の間に1個、奥壁から約2mの側壁に近い床面の西側に3個、東側に4個があった。なお、さらにこれらの馬蹄形の焼台の上には円板状の焼台が重ねられているものもあった。

煙出し部 煙出しが位置する奥壁は、窯体主軸に対してほぼ直角で、丸味を帯びた形状を示す。そのほぼ中央部から幅約25cmの煙出しとして、床面に接するように傾斜角度約55度で削抜き、現存長約85cmで外部に延びる。横断面は蒲鉾形を呈す。先端付近で傾斜角度は52度と、ややゆるやかになり、先端部で煙道の幅は約30cmといくぶん広くなる。構築時の煙道の長さは上部削平の為定かではないが現存長より、長いものであったことはいうまでもない。煙道周辺の土質は高熱のため、赤色に変色していた。



第10図 3号窯灰原実測図

第11圖 3號墓出土遺物測圖



灰原 灰原は前庭部端から左右に拡がり、地形に添って急傾斜に掘り込んだ窪地となる。上端と下端の比高差は約2mである。上端は狭まり扇形を呈しながら下端へ続く。下端の幅は約3mを測る。長軸は窯主軸に大体ほぼ直交するが、地形によるものと思われる。灰原である窪地内への覆土は4層からなり、いずれにも木炭や灰が観察され、陶器の残片が多数出土した。なお、灰原の末端部は、下方に位置する2号窯煙り出し部の一部を破壊し、重複しており、レベル的にも灰原が2号窯を覆うような状況であった。したがって、3号窯は2号窯より新しい窯であることが判明した。

3号窯出土土器 (第11図25~36)

25~28は窯内の焚口及び燃焼部から出土したもので、その他は前庭部及び灰原からのものである。器種には鉢(摺鉢・こね鉢)・壺・甕がある。

鉢 (25・26・34) 25は復元口径25cmのスリ鉢である。体部から直口する口縁部で、口縁端部の外側でわずかに外反し内側で内彎し、口唇部は平坦となる。内面には単線による太く深い数本の条線を單位としたキザミが施されている。外面は斜行タタキの後、ナデ調整が施される。色調は灰色を呈し、焼成はやや軟質で、胎土には細かい石英を含む。26は復元口径4cmで、器形は25と類似する。内外面ともに弱い斜行のタタキの後、ナデ整形を施す。色調は青灰色、焼成は硬く断面の色調は、外面の青灰色にはさまれた内部は赤色化する、いわゆるサンドイッヂ状の様相を呈す。胎土には小礫粒を含む。内面にはキザミ状の条痕の有無は破片の差、定かでないが器形から、摺鉢と思われる。34は、口径30cm、底部径25.3cm、高さ15.2cmで大型のこね鉢の完形品である。底部から胴部にかけて丸味を帯びながら外開し、胴部上位に最大径をもち、頸部はしまり、外する短かい口縁部となる。口縁端の外側は外反し、内側には弱い段を有し、肥厚する。口唇部は丸味を帯びる。底部は上げ底となる。主体的に器壁は厚味を帯びるが均一である。外面は、部分的に斜行タタキがみられ、後、ナデ調整を施し、内面の頸部から口縁部はナデ、体部は大型の凹線調整が顯著にみられる。見込みには綾杉文のタタキが丁寧に施されている。色調は灰色。焼成はやや軟質、胎土には大つぶの礫が混入している。

壺 (24・28・31) 24は小型壺である。口径は4cmを測る。胴部から頸部にかけて内彎し、短く垂直する口縁部となる。体部の器壁は厚く、頸部から口縁部・口唇部にかけて薄くなり、口唇部は丸く治める。外面はナデ調整。内面の頸部は弱い斜行のタタキ痕がみられ、内側口縁部はナデ調整である。色調は灰色を呈す。焼成はやや軟弱。胎土には小礫粒を含む。

28~31は頸部がしまり、外反する口縁部となる。28・29は口唇直下に粘土の引き出しによる垂れ下りがみられ、口唇部に凹線を有す28と、丸味を有す29、平坦に支上げる30、31がある。内側の口唇部直下にはいずれも段が施されている。

甕 (32・33) 頸部はしまり、短く外反する口縁部である。32は復元口径14.8cm、33は復元口径15.5cmである。32は口唇部直下に凹線が廻り、その直下には粘土引き出しによる垂れ下りがみられる。外面は綾杉文のタタキの後、ナデ調整。内面は斜行タタキの後、ナデ調整が施されている。33の胴部には細い沈線が廻る。外面は斜行タタキの後、ナデ調整。内面は斜行タタキの後、弱い凹線調整がみられる。

35平底の底部である。粘土の縫目痕が顯著にみられる。外面は底付近には斜行タタキの後、窓調整した痕跡がみられ、内面は格子目文のタタキの後、ナデ調整が施されている。胎土には石灰石を含む。焼成は固い。色調は青灰色を呈す。

(4) 4号窯・5号窯・6号窯の覆土と切り合い関係 (第12図・第13図)

4号窯・5号窯・6号窯は重複関係にあり、覆土状況は地山の造成や窓崩壊時における窓壁の残片、地山の上層に堆積している粘土層など、あるいはそれらが混在して層をなしている。さらに、それらの層の中には、木炭や灰を含む3枚からなる灰1、灰2、灰3層が堆積している。灰1層は、6号窯前部の上位約1.3mから弧状をなしながらゆるやかに下降する層となり、少量の陶器片が出土した。4号・5号・6号窯とは無関係で、調査区外に位置するであろうと想定される別の窯に属する灰層と思われる。灰2層は5号窯・6号窯の前部ではさらに2つの層に区分され、上位が5号窯、下位が6号窯にそれぞれ属するが、4号窯と6号窯が切り合う接点より約70cm離れたA地点で合流し、ゆるやかに上昇しながら灰原末端へと続く。なお、B点で灰2層は切れた状態となるが、B点からは北側に幅約 cmの灰原が設けられているためである。灰2層中に陶器片が出土し、5号窯・6号窯に属する灰層といえる。灰3層は4号窯に属する灰層で床面に密着あるいは、その上位にも薄い灰層を伴って堆積していた。

出土土器

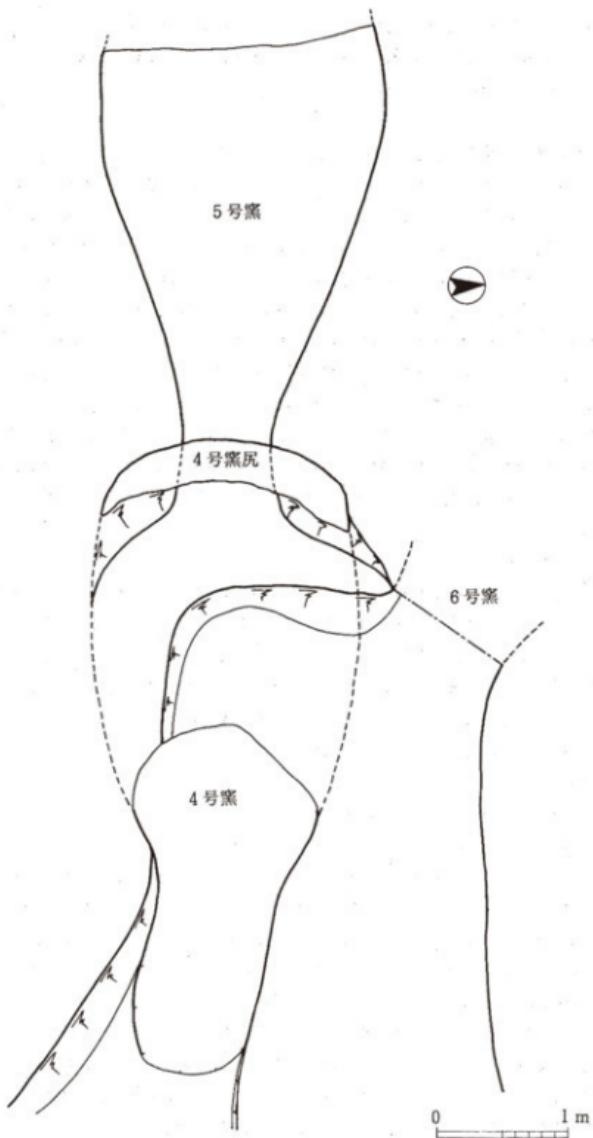
灰1層 (第14図36~39)

壺(36~39) いずれも口唇部内側直下に段を有す。36・38の外側口唇部直下には段を有し凹線と化している。37は口唇部直下に粘土の引き出しによる垂れ下りが施されている。3者とも外面は平行タタキの後、ナデ調整を施す。色調は赤褐色の36・38、青灰色を呈す38がみられる。39は玉線口縁となる口径15.7cmの壺である。口縁部はわずかに内彎する。口唇部は断面が三角形を呈す。胎土には石英や石灰色を含む。焼成は硬質緻。色調は灰色を呈す。外面は水引き調整で、内面には粘土の縫目痕がみられ、ナデ調整を施す。

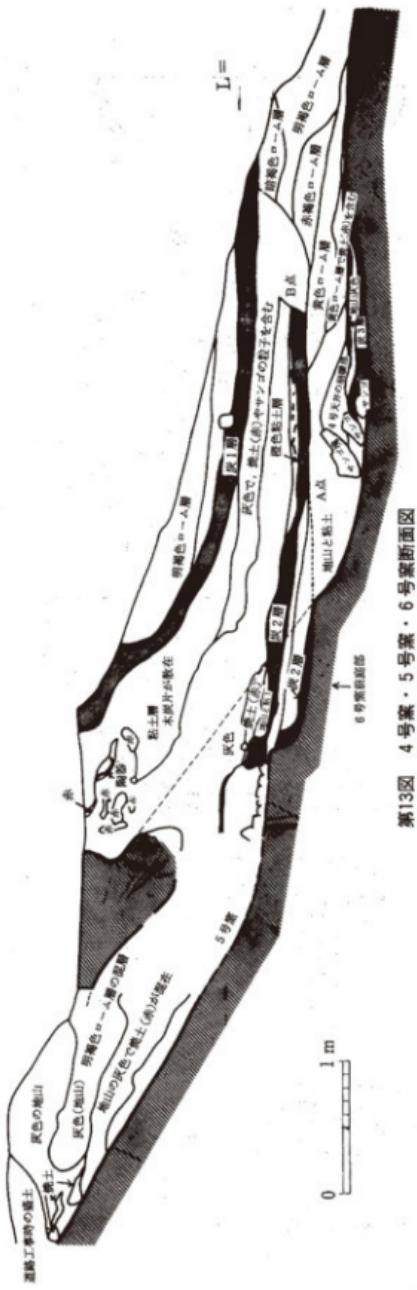
灰2層 (第14図40~49)

壺(40~44) 40・42・43は口唇部直下に粘土の引き出しにより垂れ下りが施され、口唇部内面には段が施されている。41は復元口径18.5cmの外反して直口する口縁部で、さらに口縁端で急に反子形状となる。口唇部は平坦に治める。内面に弱いタタキの後、水引き調整。外面はナデ仕上げである。胎土には石灰石を含む。焼成は硬い。色調は灰色を呈す。44はしまった頸部から彎曲して短く垂直な口縁部となる。口唇部は丸味を帯びる。外側頸部には弱い斜行のタタキがみられ、後、ナデ調整。内側の胴部上位には、弧状に縁のある小形の斜行施文具のあて具痕がみられ、口縁部はナデ調整を施す。全体的に器壁は薄い。胎土には石英石を含む。焼成は硬い。色調は青灰色を呈し、断面はサンドイッチ状の色彩を示す。

壺(45) 口径15.5cmを測る玉縁口縁の壺である。外開きの口縁部であるが、わずかに内彎する。口唇部の断面は三角形を呈す。内面は凹凸が著しく大型の凹線状を呈した調整が施される。外面はナデ調整。胎土は粒子が細かい。焼成は硬い。色調は青灰色を呈す。



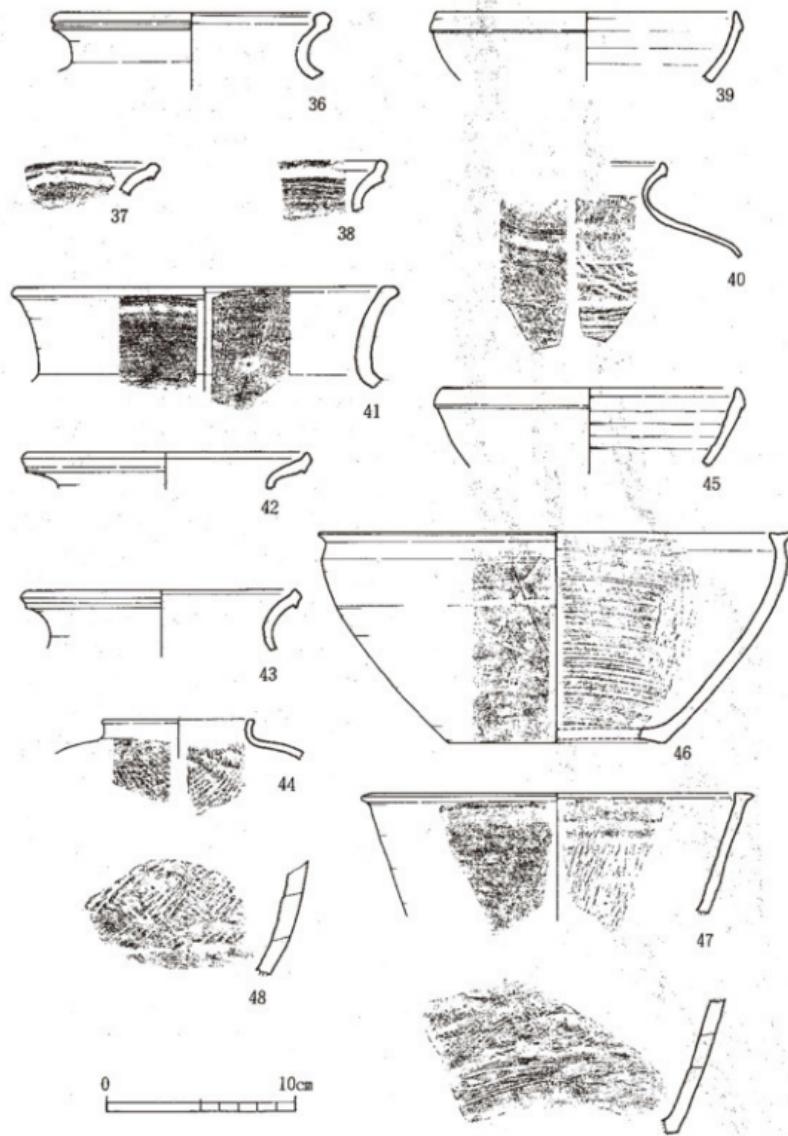
第12図 4号窓・5号窓・6号窓配置図



標鉢（46・47） 46は口径23cm、高さ11.2cm、底部径11.5cmを測る。外開きで丸味を帯びた胴部で、肩部が造られ最張部で内彎してしまる。口縁部の外側はさらに短く外反し、内側はそのまま内彎し、結果として口唇部の幅は広く治まる。口唇部は水平を保ち凹みが生じている。外面はナデ調整。内面の口唇部直下と、胴部下位に斜行タタキを施し、ナデ調整を行っている。48は胴部から口縁にかけて直口する口縁部となる。口縁端の外側で、短く外反させ、内面は内傾させ水平で平坦な口唇部となる。

两者ともに部分的に數本を単位とする荒く雑な縱列線の籠書きが施されている。胎土には石灰石を含み、焼成は硬く、色調は灰色を呈す。

（48・49）胴部・底部付近の破片である。49は器壁は比較的厚みを帯びる。内面には綾杉文のタタキが重複して施され、外面はナデ調整である。粘土の継目が顕著にみられる。胎土には石英や石灰石粒を含む。焼成は軟弱。色調は灰褐色を呈す。49の外側は斜行タタキの後、ナデ調整、内面は斜行タタキの後、ナデ調整が施されている。48と同様に内面に粘土の継目痕が観察される。



第14図 灰1・2層出土遺物実測図

灰3層 (第15~18図, 50~98)

壺 (50~85) 口縁の形状に違いがみられ、しまった頸部から外開きで直口する口縁部を呈す。50・51・62・77と外反する口縁部を呈す52~61・66~68・73がある。なお両者ともに、67・77を除いて口唇直下に段が施されている。前者の51は広口壺で口径22.8cmを測る。62は口径11cmの壺で、外面には綾杉状のタタキが丁寧に施され、その後ナデ調整となる。内面には格子目文のタタキを有す。後者については、口縁直下に粘土の引き出しによる舌が設けられているものが大半を占め、上位に沈線文が廻り口唇部を丸く仕上げている。なお、56の口縁部は平坦となる。65は把手付きの壺面部である。長さ約7cmの小型の把手で胴部直下に横位に貼付けている。66~76は頸部から肩部にかけて範描き波状線文を施すものである。波状文には68の小さい単位のものから74の大きい単位のものまで様々である。又、68は横線文と波状沈線文の組合せとなる文様を施す。80~85は平底の底部である。84の見込みに2つの単位による範描き文を有す。これら壺の胎土は石炭石や礫粒を含み、やや軟弱な58・69を除いて、他は硬緻である。色調は青灰色から紫色をおびたもの、褐色を呈すもの等がある。内部はサンドイッチ状に赤色化している。器面の調整は、外面には斜行平行タタキ目文や、62・63の綾杉文のタタキ目文が施され、後ナデ調整を行い、内面は格子目のタタキやナデ調整が施されている。78・79の肩部には格子目や×印の範描き文が施されている。

鉢 (86・92) 頸部がしまり短く外反する口縁部となる。88・90の口縁直下には粘土の引き出しによる舌が設けられている。91・92は小型の鉢である。91は口径12.2cm、高さ8.5cm、底部径9cmを測る。胴部は割合い張った形状を示し、口縁部径は胴部径より小さい。頸部はしまり短く外傾した口縁部となる。内外面に格子目文のタタキを有す。92は口径11.7cm、高さ5.8cm、底部径7.5cmの完形である。全体的に焼けひずを生じている。

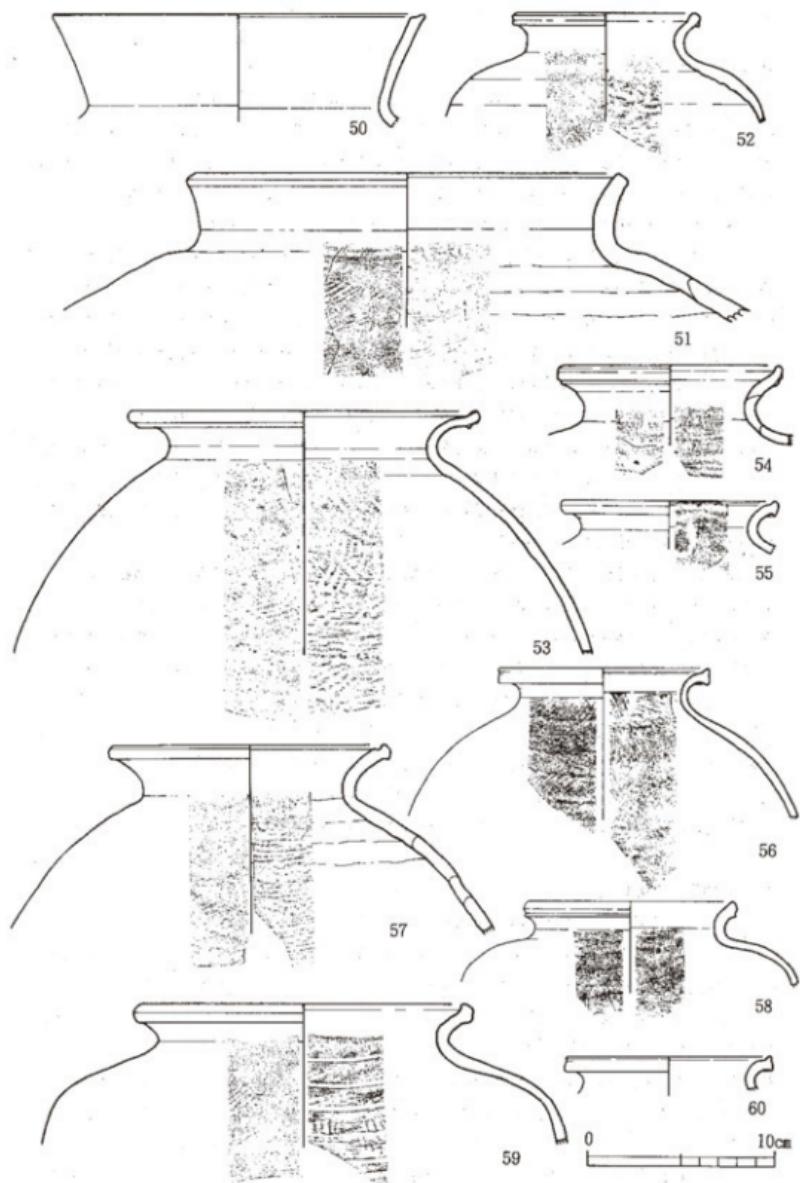
塊 (93~98) 口縁部はわずかに内彎する。口唇部の断面が三角形を呈す93・94と、玉縁口縁の95~98がある。95・97・98の内面には格子目文のタタキがみられる。色調は灰褐色を呈し、焼成も硬い93・94・97・98や、赤褐色をおび焼成も軟弱な95・96がある。

灰3層の出土遺物は、その出土状況から4号窯に属するものと考えられる。

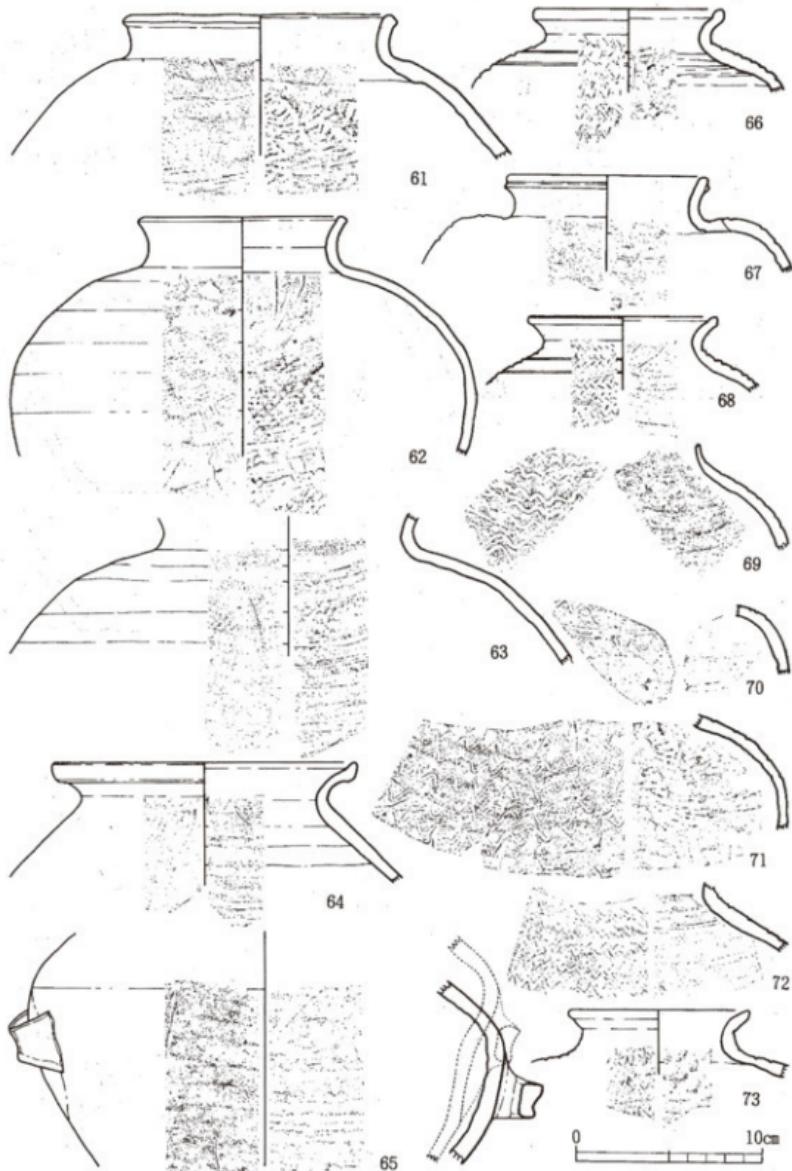
(5) 4号窯 (第19図)

4号は、5号窯・6号窯と重複関係にある。5号窯とは窯の主軸をほぼ同じくし、直線上に列んでいる。焼成部は5号窯構築時に削除され残存していないが、前庭部や焚口・焼成部・奥壁部は確認出来る状態であった。窯体主軸の方向はN85°Wに配し、窯体の全長は約4.7mである。焚口は縮させ、焚口から燃焼部へかけて広がりをもち、奥壁は弧状を呈し、イチヂク型の形態となる地下式無段例抜形式の登窯である。

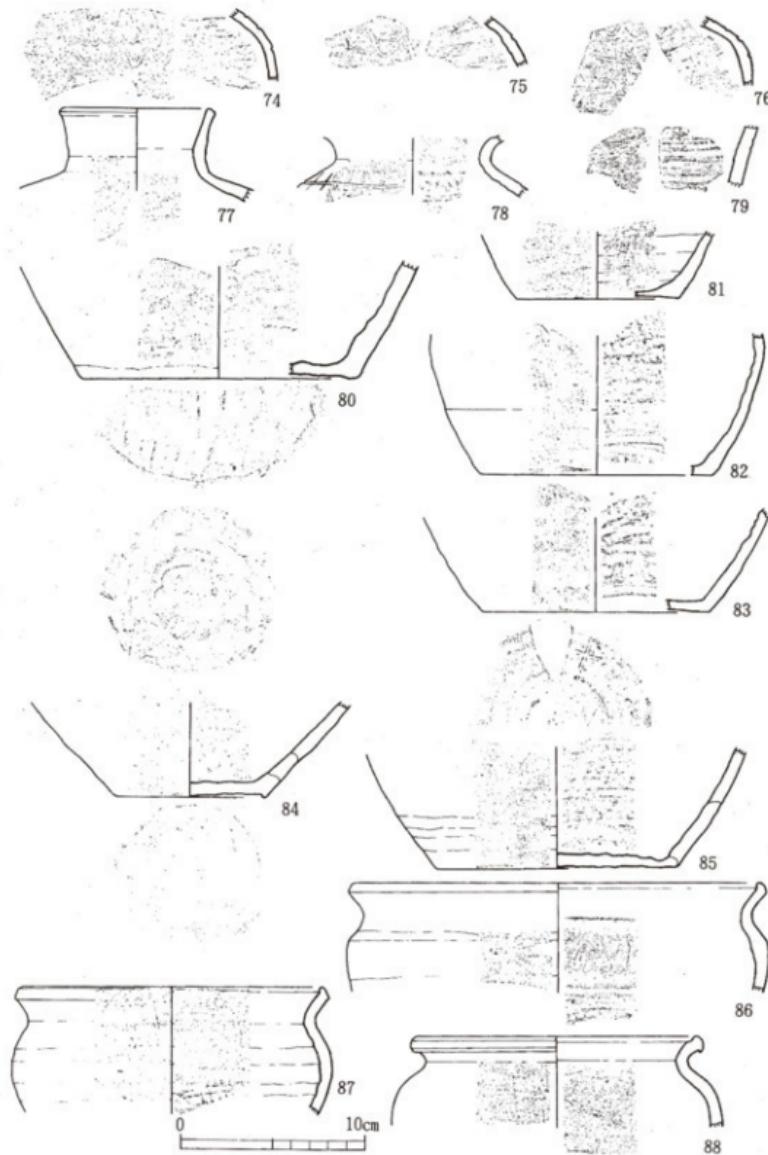
焚口 焚口の幅は約85cmを測り、側壁は垂直気味の内彎する形状を呈し、なお南側壁面は高さ約60cmが残存している。北側には頭大の珊瑚塊が3個置かれていた。さらに北側は5号窯と6号窯の灰かき出し部がび重複している。床面はゆるやかなU字形を呈し、焚口付近が最も深く、前庭部にかけてゆるやかに上降する傾斜となる。床面には約20cmの炭灰が堆積し最も厚



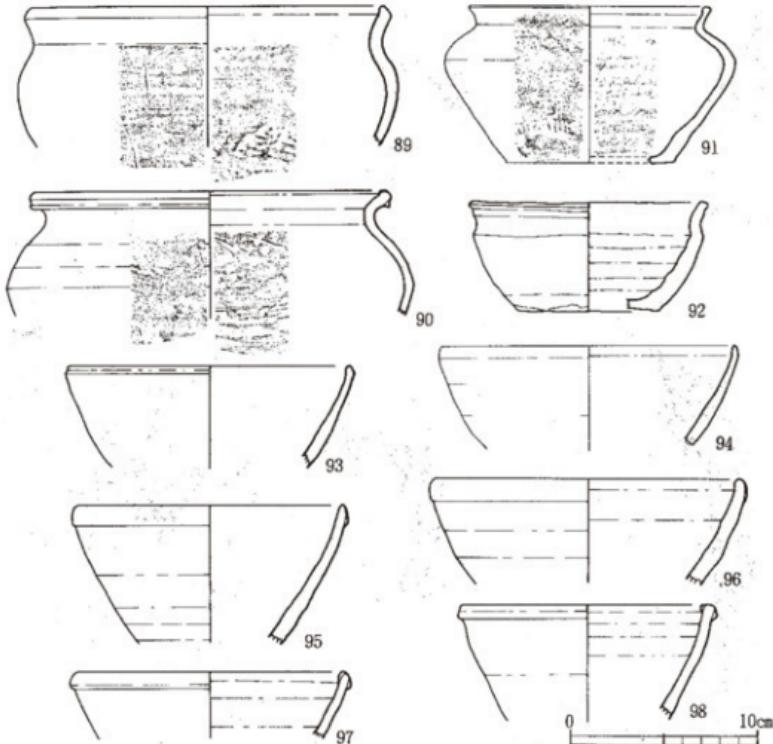
第15図 反3層出土遺物実測図(1)



第16図 灰3層出土遺物実測図(2)



第17図 灰3層出土遺物実測図(3)

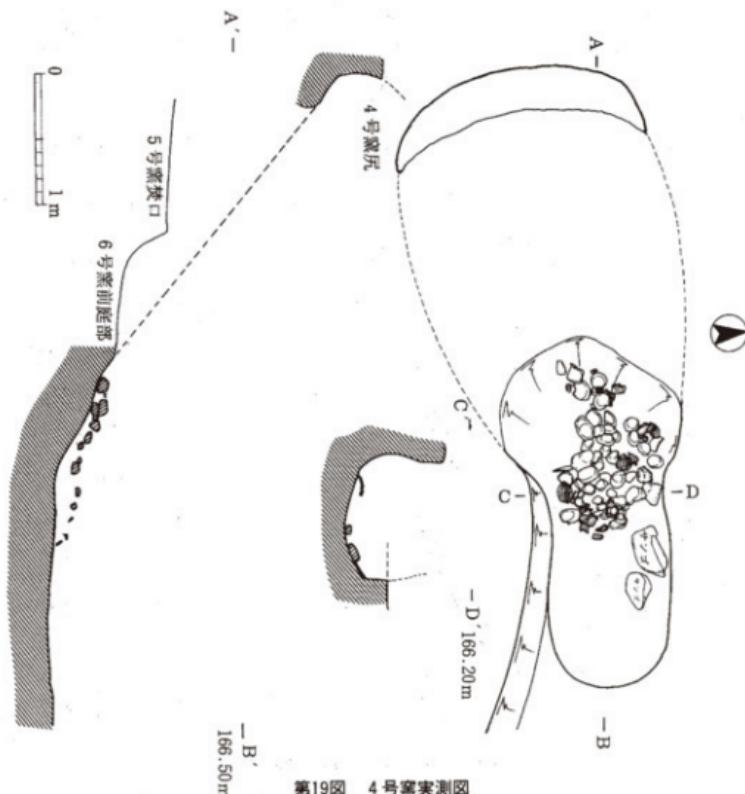


第18図 灰3層出土遺物実測図(4)

く、前底部から灰原へかけて薄くなる。さらに前底部の床面より約20cm上位には約4cmの薄い炭灰層が検出された。

燃焼部 4号窯の北東部に位置する6号窯の前底部構築時に一部破壊されており、長さについては、確かな計測値は求められないが⁴、残存する範囲から約1.4m以上あったものと推定される。燃焼部の形状は、焚口から両側へ開き、現存する最大幅は約1.45mを測る。床面の横断面は、中央部付近で平坦となり、側壁に向かって緩かに上降しながら、胴ぶくらみの側壁となる。床面は焚口床面上りわずかに上降の傾斜となり、中ほどで、度の傾斜をなし、さらに、度の急傾斜の床面となる。床面には厚さ5cm前後の炭灰層が床面に添って堆積している。燃焼部から焚口付近にかけて、重なり合った数10個の焼台や、比較的大きな破片でまとまって陶器片が多く出土した。

焼成部 焼成部本体は、6号窯構築時に破壊され残存していないが、奥壁から長さ約30cm、幅約1.8cmで焼成部の一部が残存していた。なお、本来の燃焼部の幅はさらに幅広いものであったことが推定される。床面は割合い平坦で、傾斜角度は36度の急傾斜となる。



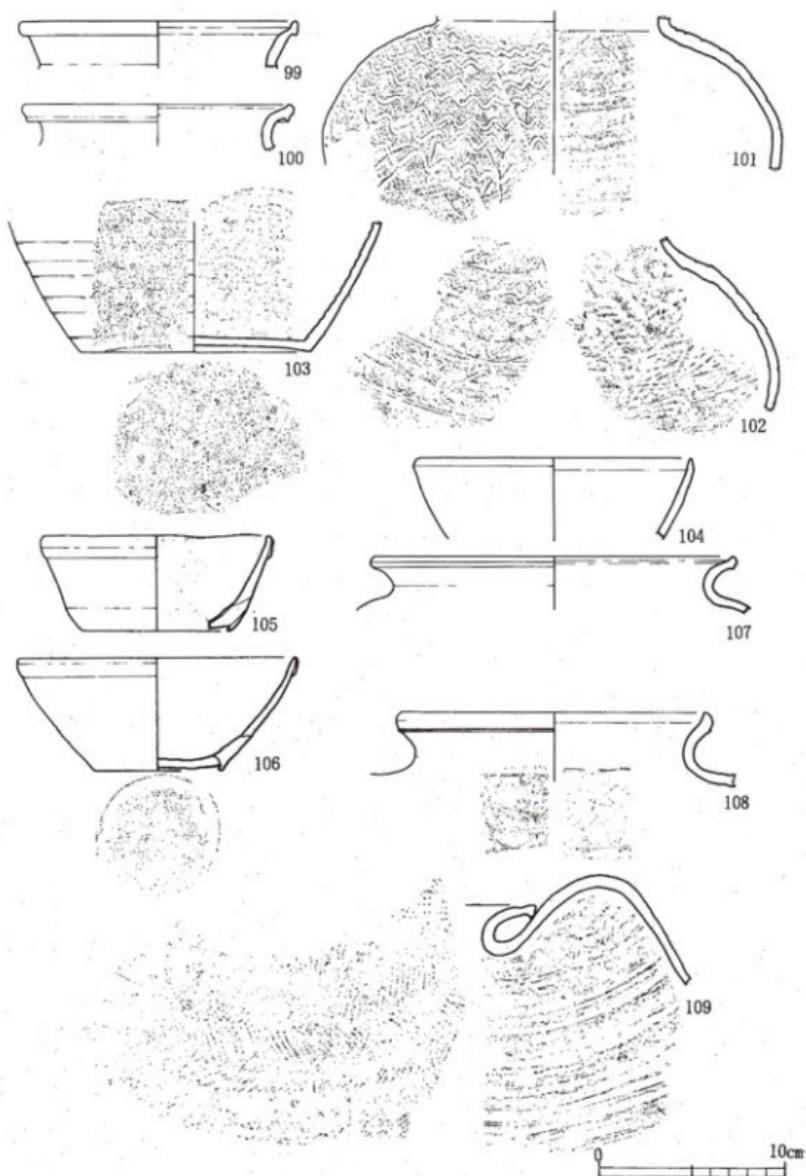
第19図 4号窯実測図

煙道については、検出されなかった。前述した1号・2号・3号窯では奥壁の床面から直ちに煙道が削抜かれる共通の要素がみられるが、本窯ではその痕跡が無く、奥壁から天井にかけて内側へ彎曲した天井寄りの場所に位置するものと推定され、他の窯との煙道の位置関係に相違点がみられ本窯の特徴的な事象といえる。

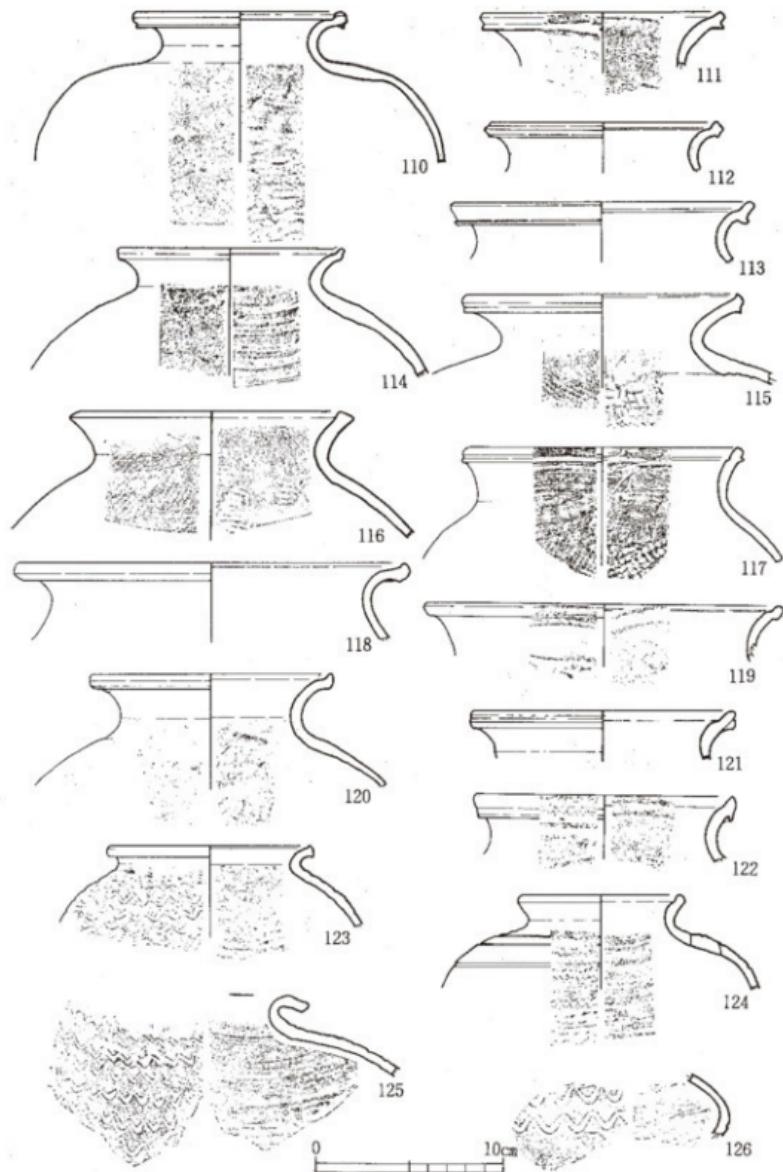
なお、破壊された本窯の硬く焼かれた極めて頑固な状態の奥壁（窯尻）を利用して、奥壁約1.2mの直下に5号窯の焚口が位置し、新たに構築する窯の位置関係や古い窯部位の再利用（5号窯焚口の補強の役目となる）など興味ある状況での発見であった。

灰原

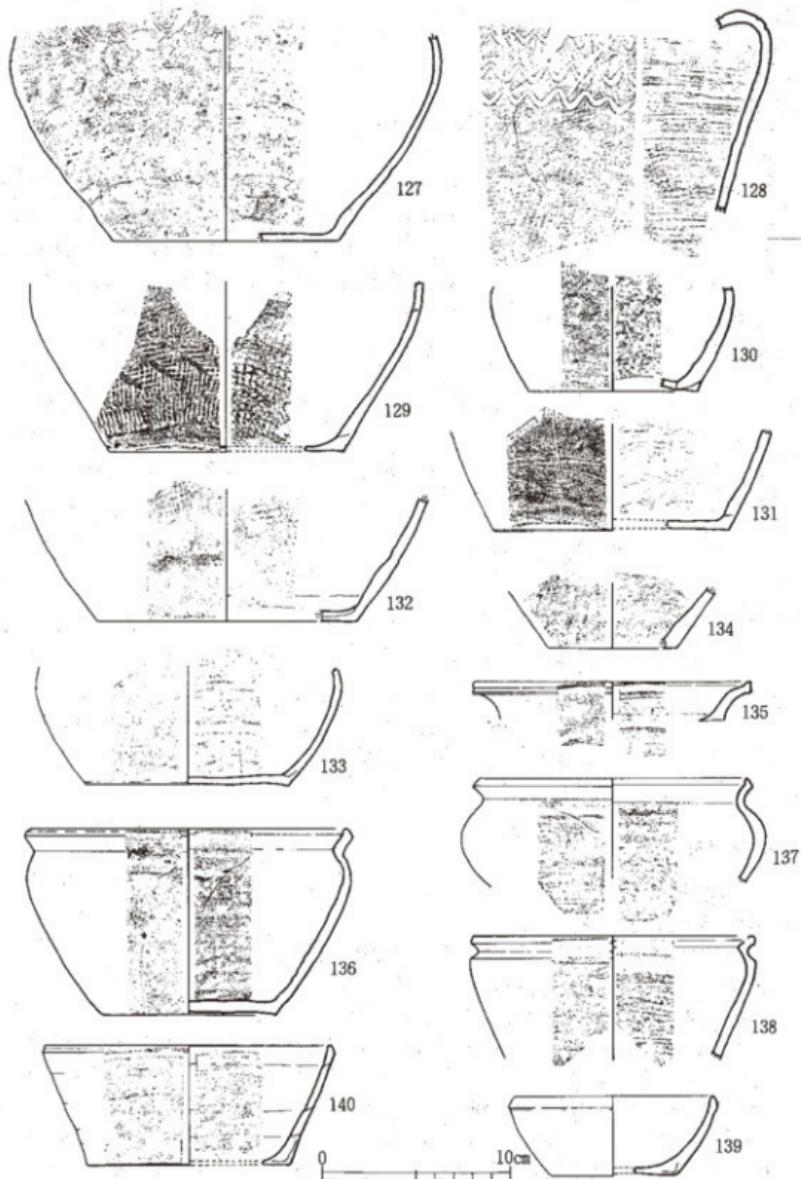
前庭部から両サイドへ扇形に拡張され、東あるいは南東方向へ下降する地形の傾斜に添って灰原が形成され、大量の陶器片が出土した。なお、灰原末端においては、他の窯の灰原と重複していた。



第20圖 4号窯焚口及灰原出土遺物実測図(1)



第21図 4号窯灰原出土遺物実測図(2)



第22図 4号窯出土遺物実測図(3)

出土土器

99～109は燃焼部あるいは焚口から出土し、110～140は前庭部及び灰原から出土したものである。焼成部や焚口のものは馬蹄形の焼台の重なり合って出土した。器種には壺・塊・鉢が発見された。

壺 (99～103・107～134) 口縁部が大きく外反する99・100・107～115・117～124があり、123・124は小型の壺で口縁部が短く口唇部は丸味を帯びた仕上げとなる。116は口縁部は外傾して直口する口縁部で口唇部は平坦に仕上げる。123・124・116を除いた口縁直下に粘土の引き出しによる垂れ下りが施され、全ての口唇部直下の内側に段が施されている。101・102・123～128の頸部から肩部にかけて籠描き波状文が付されて、丁寧な124から大がらな128がみられ、102や124のように横線文を組合わした文様構成を示すものある。109・125は焼け歪みを生じ変形している。外面の調整は綾杉文のタタキを有す109・128や平行タタキの101・116・117・120・129がみられる。なお、波状文を有す部は丁寧なナデ調整が施される。胎土には石炭石粒や小礫粒を含み、焼成は116のようにやや軟弱のものや大半が硬緻である。色調は青灰色や紫を帯びるもの灰褐色のものなど様々である。103の外底部には略三角形の籠描文が施されている。

鉢 (136～138) 小型の鉢である。136は口径16.5cm、高さ9.8cm、底部径9.3cmの完形品である。底部は若干上げ底風となる。136138の内面には格子目文のタタキが施され、外面はナデ調整となる。器壁の断面内部は赤色化しサンドイッチ状となる。

塊 (104～106・139・140) 105・106・139の口縁部は内彎気味で、玉縁口縁を呈す。105・106は低い脚台風となるが、底部の貼付け時に偶然にこの様な形状となつたものと思われる。105は口径12cm、高さ5.1cm、底部径8cm、106は口径14.6cm、高さ6cm、底部径5.7cm、140は口径10.5cm、高さ4.2cm、底部径6.6cmで小型の塊である。139は、外開きで直口する口縁部となり口唇部は小さくまとめている。口径15cm、高さ6.3cm、底部径11cmである。105の内面には格子目文のタタキがみられ、その他は内外ともにナデ調整が施される。106の外底部には2本を単位とする籠描きによる「×」印の文様を施す。

(6) 5号窯 (第23図)

5号窯は調査区域の北西部、C-4・5区、D-4・5区に位置し、窯尻部、煙道部は農道工事により削除されている。

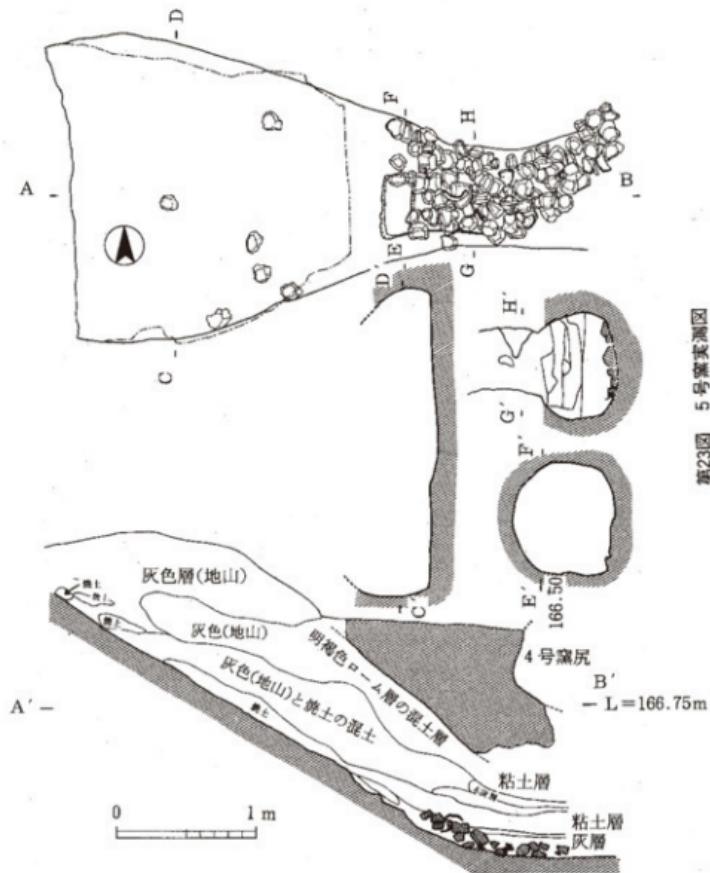
5号窯は、窯体主軸はN-87°-Eのはば東西方向で、傾斜面の等高線にはば直交する。現地表面から窯の床面までの深さは、焚口部付近で約170cm、焼成部付近で約110cmを測る。

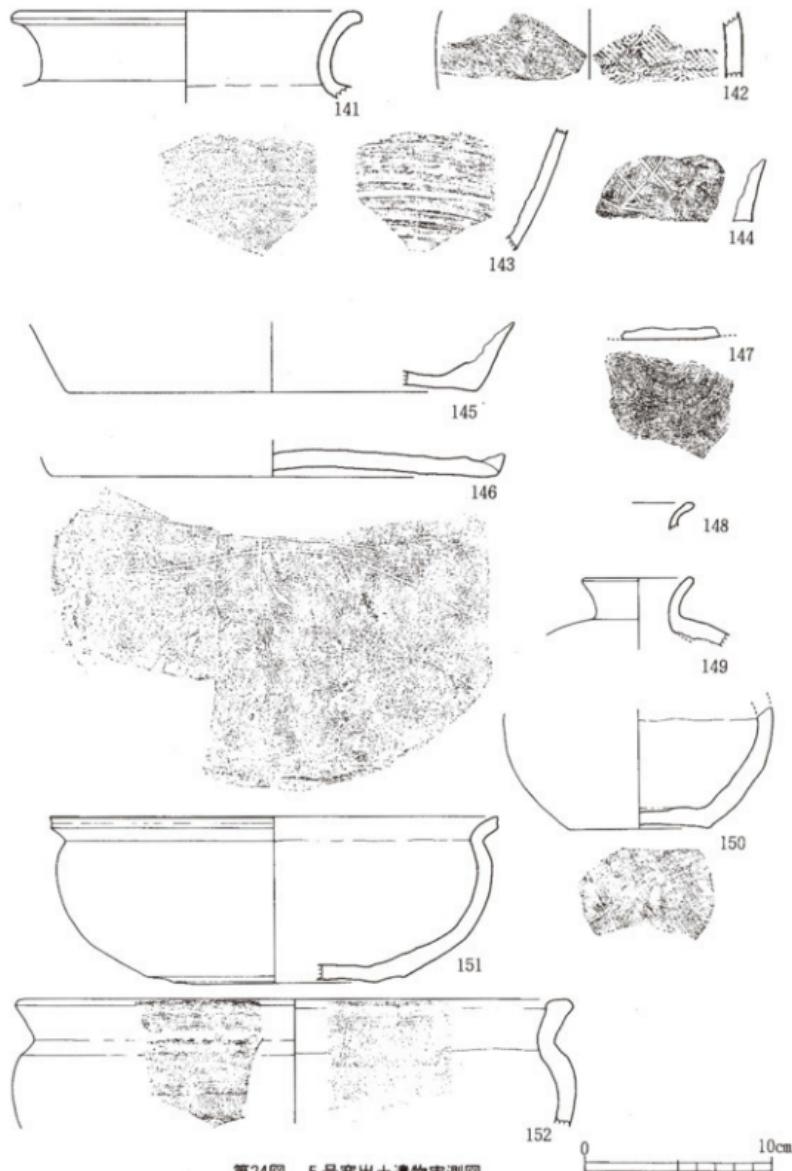
灰白色の花崗岩の地山を切り抜いてつくられた無段の登り窯である。

窯の焚口は4号窯の焼成部(地山)を掘り抜いてつくられており、ほぼ水平である。燃焼部は焚口の端から90cmほどがゆるやかな傾斜で焼成部寄りには段を有する。焼成室は燃焼部端の段の所より傾斜が強くなる部分を想定した。

窯の全長は窯尻、煙道部が削除されているために不明であるが、現存長400cmを測り、推定復原をすると煙道部を除き450cmくらいと思われる。床面の幅についてみると、燃焼部では焚口

第23図 5号窯箕窓図





第24図 5号窯出土遺物実測図

寄りが70cm、焼成部寄りが110cmと奥の方が広くなる。焼成部では中央部が210cm、最大幅は中央部よりやや窯尻寄りになり220cmを測る。窯尻部分は削除されているが、他の窯に照らしてみると、丸味を帯びていたものと考えられ、平面形はいわゆるイチヂク形を呈しているものと思われる。

窯壁は燃焼部付近で約100cm、焼成部中央付近で50cmの高さまで残存している。天井部は燃焼部だけしか残存しておらず、床面から天井までの高さは70~90cmを測る。

床面の表面は、硬質に焼けて青灰色を呈している。窯壁も表面は、硬質の青灰色を呈しているが、その外側は赤く変色している部分がある。壁面には補修等を行った痕跡は認められない。焚口 4号窯の灰原と思われる凹みの近くより約90cmの水平な部分が焚口と想定される。床面は硬く焼けている。床面での窯壁の幅は70~90cmを測り、やや広がるものである。床面には木炭、灰を含んだ黄褐色粘質土が堆積し、その上に灰混じりの赤褐色土、灰、赤褐色土のまじった地山の土、地山と粘土、明褐色土の混ざった土等が堆積している。又床面の北側窯壁寄りには焼台、須恵器片等が堆積している。

燃焼部 焚口の端から約90cmほどの緩傾斜の部分にあたり、床面の傾斜角度は25°を測る。窯壁の幅は70cm~110cmと焼成部に向かって広くなる。縦断面を見ると焼成部寄りに2ヶ所の段落ちがある。横断面を見ると、天井部は丸味を帯び、側面はほぼ垂直である。床面は中央部がわずかに凹むものである。この燃焼部には、焼成部より転落した焼台及び土器片が集中している。

焼成部 燃焼部の緩傾斜面の終わりの段落ちの部分から窯尻までであるが、窯尻部分は削除されているため長さは不明である。現存長は220cmを測る。焼成部は急傾斜で傾斜角度は33°を測る。床面はほぼ平坦で凹凸がさほどない状態である。又床面に密着した状態で6個の焼台が原位置と思われる位置で確認された。焼台は粘土鬼で床接着面で12cm~15cm、頂部で7cm~10cmの大きさである。焼台は頂部が水平に作られており、床面の傾斜角度を修正している。

遺物 5号窯に関する土器は破片のみである。出土状況は燃焼部および焚口部に焼台と混在していたもので、甕、壺、鉢等があり、固化出来たものは12点である。

141~143は甕である。141は復元口縁径18.8cmを測る。頸部はしまり、口縁部は反り気味に外反する。端部は丸くおさめる。内外面共にナデ整形である。142は復原胴部径16.5cmを測る小形のものである。外面は平行タタキの後ナデによる整形を行い、タタキはほとんど削されている。さらにヘラ状施文具による沈線が施される。内面は綾杉文タタキが施され、一部にナデ整形がみられる。143は底部に近いものである。外面は箆ケゼリ整形、内面は格子目タタキの後にナデ整形が施され、タタキは一部残っているだけである。144~147は底部近くおよび底部で器種の判別が困難なものであるが、壺の底部の可能性が強い。144は外面は横方向のナデ整形であるが一部に縱方向のナデも見られる。さらにヘラ状施文具による沈線を格子目様に施す。内面は剥脱している。145は復原底部径22cmを測る。わずかにあげ底状を呈する。内外面共にナデ整形であるが、内面は剥脱が著しい。146は復原底部径24cmを測る。あげ底状を呈する。底部は円板貼り付けによるものと思われる。外部底面、内部底面にヘラ状施文具による沈線を施す。外部

底面は放射状、内部底面は『×』状である。147は外部底面だけ残存しているものである。外底面に回転による調整痕が認められる。148～150は壺と思われる。148は口縁部、内外面共にナデ整形である。149は復原口縁径6cmを測る小形のものである。しまった頸部より短い口縁部は外反するもので、端部は丸くおさめる。内外面共にナデ整形である。内面は剥脱が著しい。150は底部径7.5cmを測り、わずかにあげ底状を呈し、胴部は膨むものである。底部は円板貼り付けによるものである。外面はナデ整形であるが、底部近くはヘラ削りを施す。内面はナデ整形。底部外面は板状のものによる切り離しが施されたものと思われる痕跡が認められる。外面は剥脱が著しい。151、152は鉢、151は復原口縁径23.9cm、底部径14cm、器高9cmを測るが、焼けひずみが著しく原形を留めていない。あげ底状の底部より大きく外に開いて立ちあがり、肩部に最大径がある。頸部はしまり、口縁部は「く」字状に短く外反する。口縁端部はわずかに凹みを有する。外面は一部にタタキの痕跡が認められるがほとんどナデ整形により削される。底部近くはヘラ削りが認められ。底部外側にはヘラ切りの痕跡も認められる。内面はナデ整形であるが一部にタタキが残る。152は復原口縁径29.8cmを測る。胴部最大径は肩部にあり、頸部はしまる。口縁部は「く」の字状に短く外反し、端部はわずかに肥厚く平坦におさめる。外面は口縁部に平行タタキの痕跡が認められるが、胴部はナデ整形により削されたものと思われる。内面は平行タタキの後ナデ整形を施すもので、タタキの痕跡が認められる。

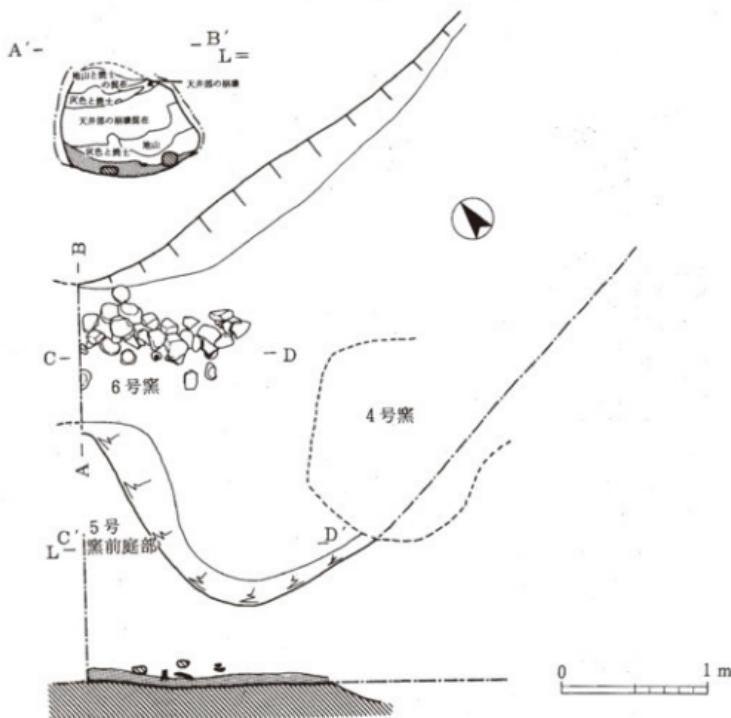
(7) 6号窯 (第25図)

4号窯の北西部、5号窯の北東部に位置する。調査対象区外にあたり、焚口及び前庭部の確認に留めた。天井の中央部は若干崩壊しているが、高さは約80cmと推定される。焚口断面は、床面の中心部で最も低く、側壁付近でゆるやかに上降したU字形に傾斜し、幅は約92cmを測る。側壁は胴ぶくらみとなり、最大幅は約95cmとなる。焚口から灰かき出しの前庭部へ向かって両サイドに拡張され屈折して東方向の灰原へと続き、5号窯の灰原と重複する。前庭部の床面は平坦で約8cmの炭灰の堆積が検出され、その上位には21個の焼台と比較的大きな破片の陶器片がまとまって出土した。なお、6号窯の前庭部床面のレベルは5号窯の前庭部床面のレベルと比較して約20cm以上の比高差があり、5号窯が高いレベルの位置にある。又、5号窯と6号窯の前庭部が重複する場所には、上下2枚の炭灰層が堆積し、上層が5号窯、下層が6号窯の炭灰層にあたることから、6号窯は5号窯より古い窯であることが判明し、4号窯との比較は6号窯が後から構築されたものと思われ、4号窯→6号窯→5号窯の順に窯構築されたことがうかがわれる。

出土土器 (第26図98～104)

いずれも焚口あるいは前庭部から出土したものである。

壺 (153～159) 153・154の一般的な壺と、154、155の小型の壺がある。153は頸部と口縁部の接合部で屈折し、直口気味でわずかに外反する口縁部となり、156は外反の度合が比較著しい。155は口径10.3cmを測る。胎土には小礫を含み、焼成はやや軟質、色調は茶褐色をおびる。内外面ともに器面はザラザラ下感触を受け、ナデ調整である。155は胎土に小礫粒を含み、焼成は硬

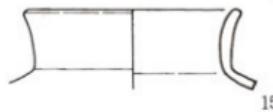


第25図 6号窯実測図

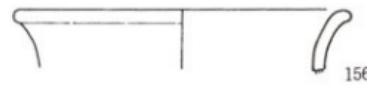
く、色調は灰色を呈す。内外面ともに水引きが施されている。

154・155は小型壺である。154は口径3.5cm、高さ9.5cm、底部径8.2cmの完形品である。胴部は丸く治まり、頸部がしまり、頸部と口縁部の接合部から垂直に立つ短い口縁部で、口唇部は平坦となる。器壁は全体的に厚く、口縁部は薄く仕上げている。器面全体がザラザラした感触を受ける。内外面に粘土の継目痕を残す。外面は部分的に斜行のタタキが残り、内面は斜行タタキが重複して施されている。胎土は粒子が細かく、焼成は軟質で、色調は茶褐色を呈す。154は復元口径8.1cmを測り、胴部の最も張った部分が、ゆるやかに「くの字」形に屈折し、やや外傾で直口する口縁部となり、口縁端部がわずかに外反し、口唇部は平坦に仕上げる。器面全体がザラザラし、内外面ともにナデ調整が施されている。胎土は粒子が細かく小礫を含み、焼成は軟質で、色調は黄褐色を帯びる。

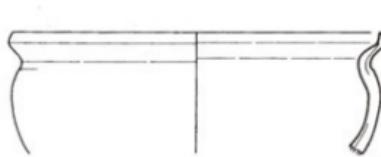
鉢(157) 丸味を帯びた胴部で頸部がしまり、外反する短い口縁部となり、さらに口縁端部で



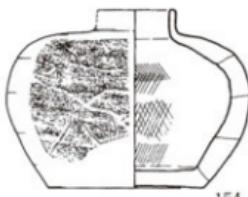
153



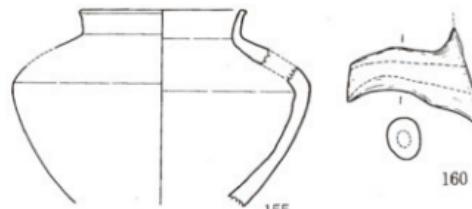
156



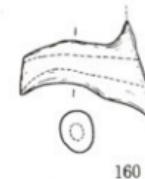
157



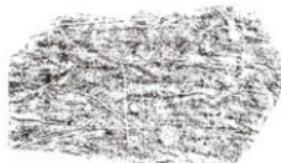
154



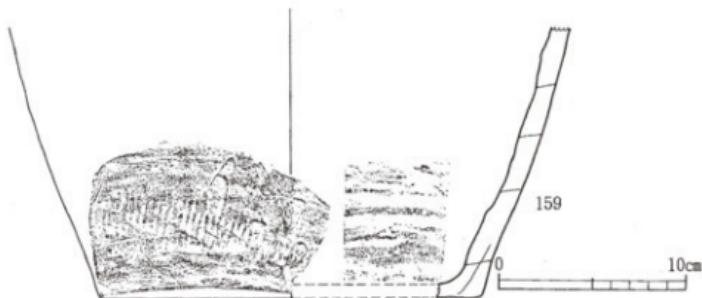
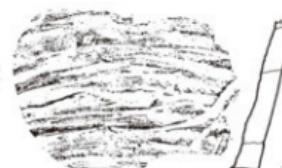
155



160



158



159

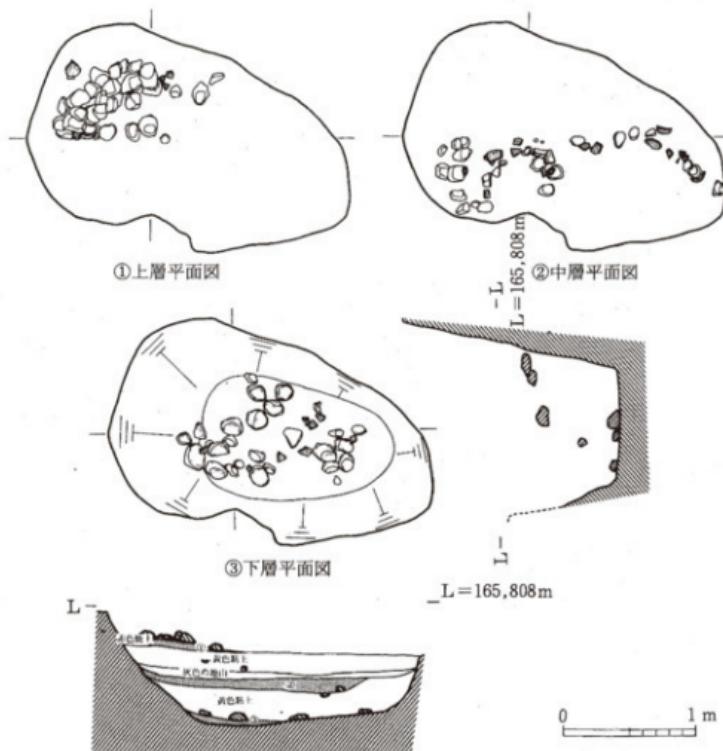
10cm

第26図 6号窯出土遺物実測図

屈折する口縁部となる。口唇部は三角形に尖がる。器壁の断面はサンドイッチ状の色調を呈す。胎土は小礫粒を含み、焼成は硬く、色調は青灰色を呈す。

注 口(160) 注口部片で長さは約6.6cm、中心部で直径約2.3cmを測る。本体との接合部は丁寧に粘土の引き出しを行い、中心部で下向気味に彎曲する。器面は箆調整が施されているが、全体的に風化し、ザラザラとした感触を受ける。胎土は粒子が細かく、焼成は軟質で、色調は茶褐色を帯びる。

158・159は底部片で全体的に器壁が厚い。両者ともに粘土の繊目痕がみられ、内面は凸凹を呈し、大型の横走凹線文化した調整が施されている。103は直線文の箆描きがみられる。胎土に小礫粒を含み、焼成は硬く、色調は紫を帯びた青灰色を呈す。104の外面は、施文具の端が残るタタキがみられ、胎土に礫粒を含み、焼成は軟質で、色調は灰色を呈す。



第27図 構円形掘り込み遺構

(8) 楕円形掘り込み遺構

4号窯の前庭部と灰原の接合点にある北側に位置し、5号窯、6号窯の灰原の直下にあたる。平面プランは長径2.5m、短径70mの略楕円形を呈し、深さは約50cmを測る。馬蹄形の焼台や土器片は上層・中層・下層の3枚にわたって出土し、中位、下位の下面には炭灰層と粘土層が堆積していた。特に遺物は北側の壁面に集中して発見された。

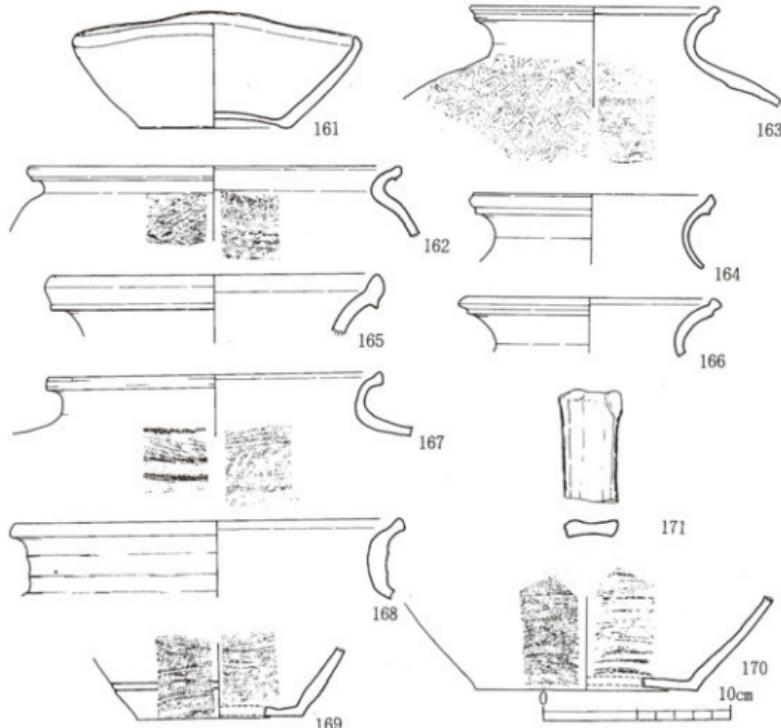
5号窯・6号窯の灰原下にあることから、少なくとも5号・6号窯よりは古いものと想定されるが、4号窯との比較は出来なかった。

出土土器 (第28図161～171)

掘り込み遺構内からは、上位・中位・下位の3枚からなる遺物（土器・焼台）の堆積が発見され、量的には多めであったが、大半が小破片で、口縁部や底部片を記述した。

上位の土器 (161・162)

塊 (161) 口径14.6cm、高さ約5.8cm、底部径8cmを測るが、かなり焼けひずみを受けている。底部から胴部・口縁部にかけて外開きで直口する形状を呈し、口縁端部で内側に屈折する。口



第28図 楕円形掘り込み遺構出土遺物実測図

唇部の断面は略三角形を呈す。内外面ともにナデ調整である。胎土には石灰石粒を含み、焼成は硬緻で、色調は暗灰色を呈し、断面はサンドイッチ状となり内面は赤色化している。

壺(162) 口径20cmで、口縁部は外反し、外側口縁直下に粘土の引き出しを設け、内面には段を有す。口唇部は丸く仕上げる。外面は弱い斜行のタタキの後、ナデ調整、内面は格子目タタキの後、ナデ調整で仕上げている。胎土には石灰石を含み、焼成は硬緻で、色調は青灰色を呈すが、内部はサンドイッチ状に赤色化している。

中位の土器 (163)

壺(163) 口径は19.2cmを測り、外側口縁直下に凹線文が廻らされている。内面の口縁直下には段がみられる。肩部には大型の篦描波状沈線文が施される。外面はナデ調整、内面は大型の格子目タタキとナデ調整を施す。胎土には石灰石を含み、焼成は硬緻で、色調は青灰色を呈し、内部はサンドイッチ状に赤色化している。

下位の土器 (164~170)

壺(108~112) 口縁直下に粘土の引き出しを設け、沈線を廻らす108・109と丸味を帯びた口唇部となる110・111、頸部から口縁部にかけて直口し、口縁端部で大きく外反する112がある。112の口縁部は大型の凹線状に調整が施されている。

113・114は平底の底部片であるが、わずかに上底風となる。113は2本の平行沈線文が廻らされている。両者ともに外面はナデ調整。内面は格子目のタタキの後、ナデ調整が施され、特に114は凸凹が生じ、凹線状の調整がみられる。胎土に石灰石を含み、焼成は硬く、色調は青灰色を呈し、内部はサンドイッチ状に赤色化している。

把手(171) 壺の胴部に設けられている把手の残片である。胎土に石灰石を含み、焼成はやや軟弱で、色調は暗灰色を呈す。

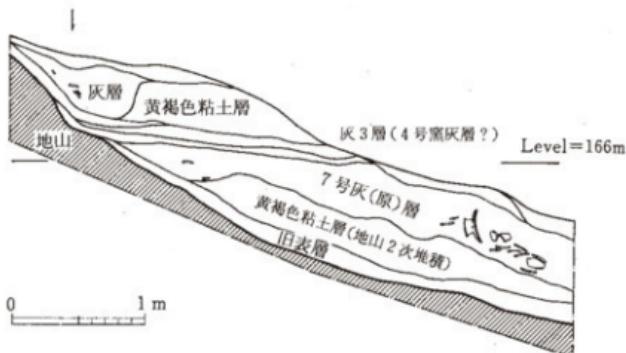
(9) 7号窯 (第29図)

7号窯は、2C区と3C区の北側に灰原のみが検出されたものである。窯体は検出されていないが、北東方向から灰層が流れしており、用地外に窯の存在が想定されるところから単独の窯として取り扱った。灰原は、傾斜面のため比較的厚い層が堆積しているが、拡がりの範囲は狭い。推積状況は、灰3層より下層に確認され古いくことになる。

7号窯灰原の出土遺物(第30図、第31図-172~195) 7号窯の灰原からは、壺と鉢と塊が出土地している。

172~185は窯の口縁部片で、186~188は肩部から胴部片である。これらは、172~174のように器外面が無文のものと186・187のようにヘラ描きの波状沈線文を施すものとにわけられる。口縁部は無文部だけであるが、頸部で屈曲して大きく外反し短く、口唇部は丸味をもって平坦におさめるが、端部はわずかに凹みをもち下方へ拡張させる。172~174の肩部はゆるやかにカーブして胴部へ続くが、壺の器壁の特に胴部は0.4cm~0.6cm程度の薄手のため焼けひずみが大きい。

172~179の器面の整形は、口縁部周辺はていねいなナデ仕上げがみられるが、頸部以下胴部



第29図 7号窯灰原断面図

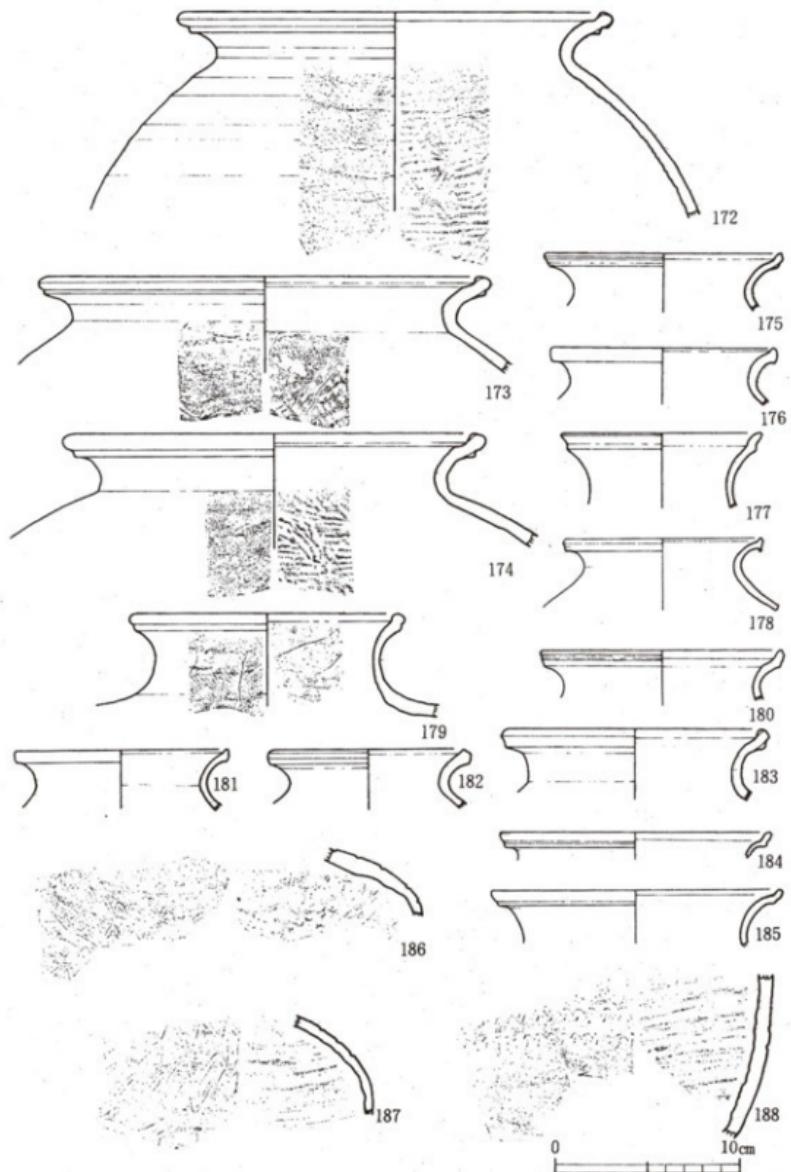
にかけての外面は平行タタキのちヘラ削りで仕上げられている。内面は、172・174は平行タタキで173は格子目タタキのちロクロによるナデ整形で仕上げられている。

186・187は、ヘラ描きの波状沈線文壺の肩部片である。186は、タタキのちナデ仕上げをおこないその上から比較的小さな（波頂間が1cm程度）ヘラ描き波状沈線文を施するものである。187は、ナデ仕上げのち比較的大きな（波頂間が2cm程度）ヘラ描き波状沈線文を施している。188は、大形の壺の胴部片であるが中央に2条のヘラ描き波状沈線文が施されている。波状沈線文は、比較的薄手の壺の肩部に施文されるのが一般的であるが特殊な例である。

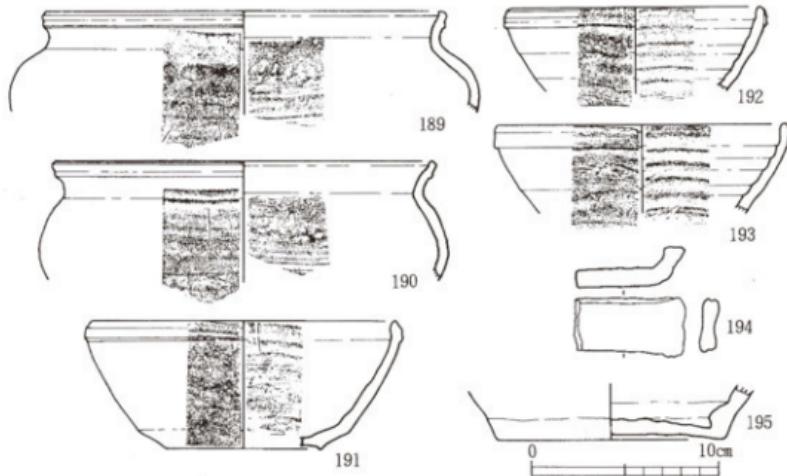
189・190は、口径21.5cmと20.5cmの鉢である。胴部はわずかに張り、頸部で締り、口縁部はわずかに外反して短い。口縁端部は、2段に押え下端は下方に拡張してシャープな稜をつくる。器形の整形は、口縁部は内外面ともナデ状のいねいな仕上げである。頸部から胴部にかけての器外面は、ヘラ削りでいねいな仕上げがみられる。器内面は、格子目タタキのちロクロによるナデ仕上げである。

191～193は、壺である。191は、口径16cm、高さ6.8cmを測る。口縁端部は玉縁をなし、底部は、基筒底状の上げ底を呈す。192は口径16cm、193は口径15.5cmを測る。器外面はいずれもヘラ削りのちナデ整形で仕上げられ、器内面はロクロによるナデ仕上げがみられる。

194は、コの字に整形された把手である。縦2.8cm、幅0.9cmの断面の粘土板でつくられている。195は、底部片である。



第30図 7号窯灰原出土遺物実測図(1)



第31図 7号窯灰原出土遺物実測図(2)

10 灰原 (第32図・第33図)

3号窯と7号窯の灰原については記述したが、2B区を中心に灰層および灰原が層を形成している。これらの灰層および灰原の所属する窯は、4号窯・5号窯・6号窯が想定されるが、灰層および灰原の途中が切断されているため各々の帰属する窯は不明であった。

この灰層および灰原は、層位的には灰（原）1から灰（原）5の5層に区分されるが、末端では混層となっている。平面的な拡りは、灰（原）1～3層の拡りと原（原）4～5層の拡りの2つのブロックに区分される。この2つのブロックは、堆積状況にも違いがみられる。

灰（原）1層は、2A区と2B区の境付近に灰層がわずかに残存するだけであり、遺物はほとんど含まれていない。灰（原）1層と下層の灰（原）2層とは、2A区・2B区付近では間層はみられない。

灰（原）2層は、2B区の途中から残存し、2B区の南端では下層の灰（原）3層と混層となる。灰（原）2層は、途中は灰層であるが2B区の南端の灰（原）3層と混在するところでは灰層の中で遺物を大量に含んでいる。この灰（原）2層と次の灰（原）3層の間は、地山の掘削土で整地されている。

灰（原）3層は、3B～3C区付近でわずかに層を残し、途中で削平されて2B区の中央付近から層を形成して2B区の南端では灰（原）2層と混層となる。

この灰（原）1～灰（原）3層は、いずれも黒灰色の灰層であり、遺物が集中するところも灰層の中である。この灰（原）3層と次の灰（原）4層との間は、地山の掘削土で整地されて

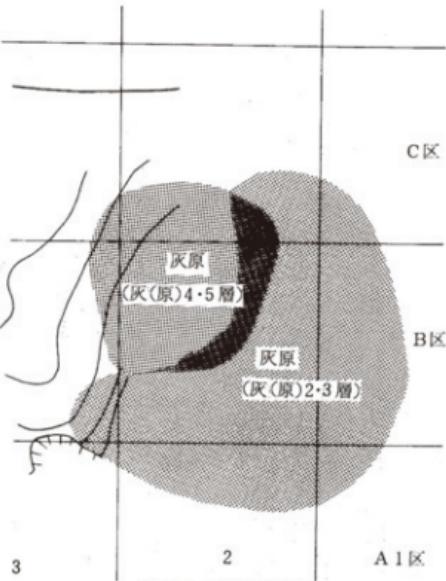
いる。

次の灰(原)4層と5層は、B2区の北端の狭い範囲に分布するが、大量の遺物で層が形成されている。この層には、炭や灰はほとんど含まれない。

灰(原)4層は、3C区南端から始まり、2B区の中央付近で下層の灰(原)5層と混層となり厚い。次の灰(原)5層との間は、地山の掘削土で整地されている。

灰(原)5層は、灰(原)4層とはほぼ同様の堆積であり、2B区の中央付近で灰(原)4層と混層となっている。

灰(原)5層は、最下層であり、旧表層の黒褐色腐植土層の直上に灰(原)層が形成されている。



灰原の出土遺物

灰原の出土遺物は、各灰(原)層ごとに灰(原)2層、3層、2・3混層、4層、5層、4・5混層の6つに区分して取り上げた(出土層位は一覧表を参照)。

出土遺物の説明は、灰(原)2層、3層、2・3混層のグループと灰(原)4層、5層、4・5混層のグループが、それぞれ近い層形成をしているところから2つに分けておこなう。

遺物の器種は、甕・壺・鉢・塊の大きく4種に区分されるが、それらはさらに細分される。第34図のように器種を規定し説明する。

灰(原)2層～2・3混層の出土遺物 (第35図～第52図)

甕 甕は、口径24.5cm～35.5cmの広口の大甕がある。

大甕 (196～204) 脊部はほとんど張らず、肩部で屈曲し、頸部で縮り口縁部は短く立ち上がる広口の口縁部をもつ。口縁端部は、若干ふくらむが口唇部の仕上げが異なる。口唇部の両端を押え中央に稜をつくり端部は両端に拡張するもの(196～200)や口唇部を平坦につくり端部を内側に拡張するもの(145～148)がある。器外面は、ヘラ削りで2cm程度の稜が残る。器内面は、あらい平行タタキのあとロクロによるあらいナデ仕上げである。

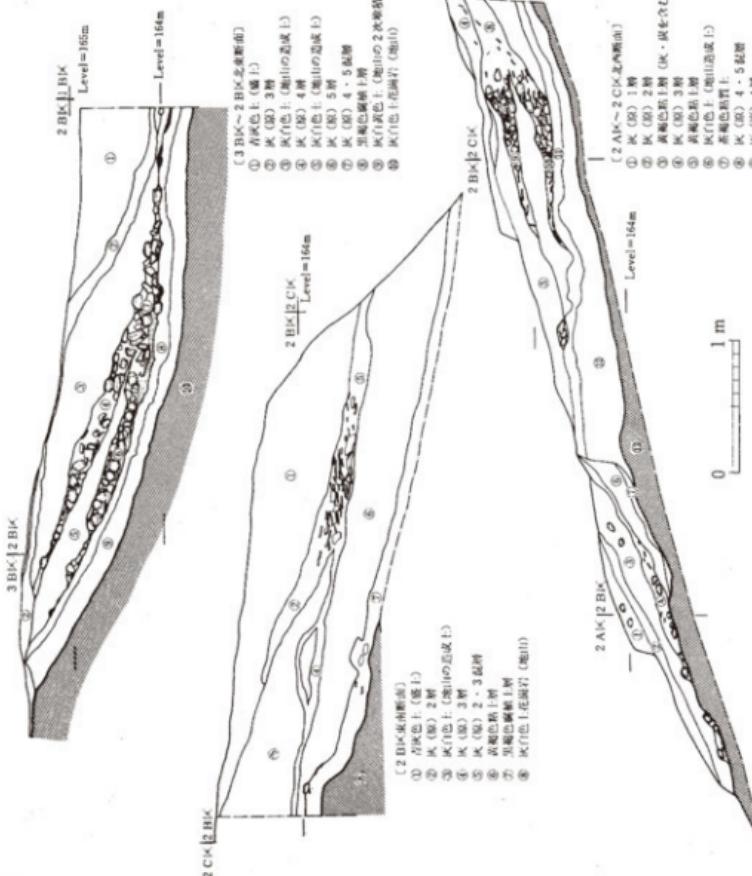
壺 壺は、大壺と長頸壺(瓶)と短頸壺と普通の壺がみられ、さらに特徴によって細分した。

大壺A (205～251) 口径12.5cm～21.0cmの比較的大形のものである。

口縁部はわずかに外反気味に直立するもので、口唇部は平坦におさめる。口唇部を平坦につくるため端部は内外方に若干拡張するものもある。脛部は、肩部で急に湾曲して脣部は直線的に底部に続く。器外面は、ヘラ削りで2cm程度の稜を残す。器内面は、頸部近くまで綾杉状の

第33図 灰原層断面図

第33図 灰原層断面図



タタキがみられる。そのうえからロクロによるあらいナデ整形をおこなっている。248の底部内面は、ロクロ回転に沿ったナデ整形が渦巻状に残る。

大壺B (252・253) 口径は、24.5cmと22cmの大形のものである。

口縁部は短く大きく外傾させ、口縁端部内側を凹線状に凹める。口唇部は、平坦におさめるが若干丸味をもつ。口縁部は、内外面ともていねいなナデ仕上げである。器外面は綾杉状の平行タタキが全体に施され、内面は格子状のタタキのあとでナデ整形をおこなっている。

長頸壺（瓶）(283, 284) 口縁部は直口し、口唇部近くでわずかに外反する。口唇部を平坦におさめ外側に拡張するもの（283）と口縁端部を外反させ口唇部を細くおさめ口縁端部に縫帶をつくるもの（284）がある。283の器外面は、ヘラ削りののちナデ仕上げである。肩部から胴部にかけてはヘラ削りである。内面は、口縁部付近はナデ仕上げで頸部以下はロクロによるあらいナデ仕上げがみられる。284は、口縁部内外ともナデ仕上げである。

短頸壺 (285~288) 口径 8cm~9cm の小形のものである。口縁部は短く外反気味に直立するもので口唇部は細くおさめる。肩部は球形に湾曲し、胴部にいくにつれて器壁は厚くなる。器外面は、口縁部はナデ整形で頸部以下はヘラ削りである。器内面は、口縁部はていねいなナデ整形で頸部以下はロクロによるあらいナデ整形である。

壺C (254~282) 口径 9cm~18cm 程度の普通の大きさである。

口縁部は短く、大きく外反する。口縁端部のつくりに違いがみられる。口唇部を平坦におさめるもの（254, 258）、平坦におさめ下端へ拡張するもの（256, 259）、口唇部を2段に押えるもの（255, 261）、口唇部を細くおさめるもの（274, 278）などがある。器外面は、平行タタキののちナデ仕上げをおこなっている。279のように口縁外面までタタキを施すものもある。器内面は、格子目タタキと平行タタキがみられる。いずれもタタキのうえからナデ仕上げがみられる。

281, 282は胴部から底部の器形が判明するもので、胴部最大径は肩部に近い上部にあり、底部径は、9.5cm, 11cm と大きい。

壺D (289~356) 壺C とはほぼ同器形を呈するものである。頸部下位から最大胴部の上半にかけて波状沈線文を施す一群である。短い口縁部は、大きく外反し、口唇部のつくりに違いがみられる。外反した口縁部を上方へ延ばし丸くおさめるもの（289）、口唇部を平坦につくり外側へ拡張するもの（290）、口唇部を平坦におさめ内側に段をつくるもの（293）などがある。器外面は、ていねいなナデ調整ののち波状沈線文を施す。最大胴部下半から底部にかけての無文部もていねいなナデ仕上げがみられる。器内面は、平行タタキや格子目タタキののち、ナデ仕上げがみられるが、圧倒的に格子目タタキが多い。

波状沈線文は、波状沈線文だけを巡らすものと平行沈線文間に2条~4条の波状沈線文を巡らすものもある。この場合、先に平行沈線を割付けるもの（289, 290）が多いが、波状沈線ののちに平行沈線を施すもの（293）もみられる。沈状沈線文は、小さい波（波頂間が0.7cm程度）のていねいに描かれたもの（291）から、大きい波（波頂間が3cm程度）の比較的荒い波状沈線文（334）もみられる。

鉢 鉢形土器は、口径30cm前後の大鉢、口径20cm前後の中鉢、口径10cm前後的小鉢がみられる。その他に、鉢の内面に摺目を施した摺鉢が出土している。

大鉢（357～369） 肩部が張り、頸部で締り、口縁部が短く外反するものや、361のように、口縁部が内湾気味にそのまま終るものがある。口唇部は平坦におさめるが、若干外側へ拡張する傾向にある。364のように口唇部の両端を押え中央に稜をつくるものや366のように外反した口縁端部を直立させて終るものもある。さらに、368や369のように、口縁端部の外面や内面に1条の凹線をつくるものもある。器外面は、口縁部から頸部はていねいなナデ仕上げがみられ、頸部以下はヘラ削りである。器内面は、綾杉状のタタキや平行タタキや格子目タタキのうちロクロによる荒いナデ整形がおこなわれているが、360や361のようにていねいなナデ仕上げのものもある。

中鉢（314～376、379～382） 中鉢は、口径20cm前後、高さ10cm前後のものである。口縁部の器形に変化が多い。370は、肩部で屈曲して内傾し、頸部で屈曲して口縁部は直立し、口唇部は細く丸くおさめる。373は、外傾した体部から頸部で屈曲して口縁部は外反する。374の口縁部は、体部から内湾気味にそのまま終る。口唇部は平坦におさめ内外に若干拡張する。器外面は、頸部から口縁部にかけてはていねいなナデ仕上げで、胴部はヘラ削りで仕上げる。器内面は、平行タタキおよび格子目タタキのうえからロクロによる荒いナデ整形がみられる。

摺鉢（377、378） 中鉢の器形を呈し、体部内側に摺目を施すものである。377は、口縁部が体部からそのままわずかに外反気味に終り口唇部を平坦におさめるもので、378は、頸部で若干締り口縁部は拡張して口唇部は丸味をもっておさめるものである。377は、器内外面ともヘラ削りでていねいに仕上げ内面には荒い摺目が施されている。378は、器外面は平行タタキのうえからヘラ削りで仕上げ内面はナデ整形のうち荒い摺目が施されている。378の底部外面には、梯子状のヘラ描きがみられる。

小鉢（383～393） 口径が10cm～15cm程度の小形のものである。胴部がゆるやかに張り、頸部でわずかに締り口縁部は短く外反するもの（383～388）と肩部で強く屈曲し頸部で締り口縁部は短く外反するもの（389～393）がある。器外面は、ナデ状のていねいな仕上げを行うものとヘラ削り仕上げがみられる。器内面は、格子目タタキのうちナデ仕上げをおこなっている。特に、387は、器外面の肩部に波状沈線文を描くもので、それ以外にこの波状沈線文が施される例は珍しい。

塊（394～408） 焼けひずみのみられるものもあるが、口径9.8cm～16.0cm、器高6cm前後を測る。底部は、平底でヘラ切りのあとナデ仕上げがみられる。若干上げ底状であるが焼けひずみの場合が多いが、396や401は基筒底状に仕上げてある。口縁部先端は、わずかに内湾し丸くおさめるもの（394～396）と玉縁をなすもの（397～408）とがあり、後者は粘土紐貼付によるものである。体部外面はヘラ削りの仕上げがみられ、内面は格子目タタキのうえからロクロによるナデ仕上げをおこなっている。

灰(原) 4層～4・5混層の出土遺物 (第53図～第88図)

灰(原) 4層、5層、4・5混層からは、ここで規定した壺はみられず、壺・鉢・塊の大きく3種類の器がみられる。

壺A (409～417) 壺Aは大形の壺であるが、口縁部の器形は2種類みられる。410は、直線的に外傾する口縁で口唇部は平坦におさめ外方に若干拡張する。411は、外傾斜気味に直立する短い口縁部で口唇部は平坦におさめる。411は、器外面は平行タタキで仕上げられ、器内面はXを重ねた草花文のようなタタキを残す。器高は0.6cmと薄く、精巧な焼がみられる。底部は、1.0cm～21.0cmと大きい。器外面は、ヘラ削りで仕上げられ2cm～1cmの稜を残す。器内面は、格子目タタキや平行タタキのちロクロによるナデ仕上げがみられる。415は、器外面の底部付近まで平行タタキのまま放置されている。

壺C (418～478) 口径10.5cm～20.5cm程度のもので焼けひずみも多いが焼成は精巧である。口縁部は大きく外反し短い。口縁端部のつくりに違いがみられる。口唇部を平坦におさめるもの(418、420など)、口唇部を丸味をもっておさめ口縁端部外側に凹線状の凹みをつけるもの(421、426など)、口縁端部の下端を下方に拡張させ稜をつくるもの(432、463など)などみられる。器外面は、口縁部はていねいなナデ仕上げがみられ、頸部以下胴部にかけては平行タタキのあとヘラ削りで仕上げている。器内面は、口縁部から頸部にかけてはナデのていねいな整形であるが、頸部以下胴部にかけては、格子目タタキが圧倒的に多いが、平行タタキもみられる。タタキのちロクロによるナデ仕上げをおこなっている。

壺D (479～527) 口径8.5cm～12.5cmの比較的小形のもので壺Bと同器形のものである。

口縁部は大きく外反し短い。口唇部は、平坦におさめるもの(488)、口唇部を丸味をもった平坦におさめ下端を下方に拡張させるもの(492)、丸味をもっておさめ口縁端部外側に1段の稜をつくるもの(479、480など)、口縁端部外側に2段の稜をつくり稜が下方に拡張するもの(491、493など)などがある。

器外面は、ていねいなナデ仕上げがみられ、頸部下から最大胴部上半に波状沈線文を飾る。器内面は、格子状のタタキや綾杉状のタタキのちロクロによるナデ仕上げをおこなっている。ナデ整形は、ていねいなものとあらいものがある。

波状沈線文は、波状沈線文だけを巡らすものと平行沈線文間に2条～4条の波状沈線文を巡らすものがある。この場合、先に平行沈線文を割り付けたのち波状沈線文を描くもの(493、496)が多いが、波状沈線文を描いたのち平行沈線文を割付けるもの(485、505)もある。波状沈線文は、小さい波(波頂間が0.5cm程度)の波状沈線文(488)から、大きい波(波頂間が2cm程度)のもの(511)などがある。小波の波状沈線文は比較的ていねいに描かれており大波のものは概してあらく描かれている。

493は、平行沈線文の直上で波状沈線文が終っており、波状沈線文が螺旋状に描かれたことを示す好例である。

鉢 鉢は、口径30cm～40cm程度の大鉢、口径20cm～25cm程度の中鉢、口径10cm程度の小鉢がある。

大鉢 (528, 529) 大鉢は、肩部が若干張り頸部が締り口縁部は頸部で屈曲して外反し短い。口唇部は、平坦におさめるもの (389)、丸味をもっておわるもの (390) がある。器外面は、口縁部付近はていねいなナデ仕上げがみられるが、肩部から胴部にかけてはヘラ削り仕上げである。器内面は、口縁部はていねいなナデ仕上げで頸部以下胴部にかけてはロクロニによるナデ整形がみられる。

中鉢 (530～533, 539～542) 中鉢は、肩がわずかに張り、頸部で締り屈曲して口縁部が外反し短い。口唇部は、2段に押え中央に稜をつくり上方に延びて細くおさめるもの (530, 539) や口唇部を丸くおさめるもの (540)、口唇部を平坦におさめるもの (542) などがある。器外面は、口縁部はナデによつていねいな仕上げがみられるが胴部外面はヘラ削りである。器内面は、口縁部はナデ仕上げで頸部以下胴部にかけてはロクロによるナデ仕上げがみられる。532は、ナデ仕上げの下に平行タタキが残っている。

小鉢 (534, 535, 543) 小鉢は、肩が強く屈曲し頸部が締り口縁部は外反して短い。口唇部は平坦におさめるが、下方に若干拡張させる。

器外面は、ヘラ削りの整形がみられるがていねいな仕上げである。器内面は、ナデのていねいな仕上げである。

塊 (536～538, 544～555) 塊は、焼けひずみのみられるものもあるが、口径12.5～17.3cm、器高6cm前後を測る。底部は、平底でヘラ切りのあとナデ仕上げがみられる。底部は、若干上げ底状になるが焼けひずみによる場合が多い。口縁先端は、わずかに内湾し玉縁をなす。器外面はヘラ削りで仕上げ、内面はタタキ(格子目)のあとロクロによる強いナデ整形がおこなわれている。

把手 (第63図-556～565) 灰(原)層出土の把手部分である。把手の付く器形は、1号窯の煙道開口部において完形品(6)が出土しており、把手は大形の壺の胴部中央に2ヶ所に対に着くことが判明している。把手は、胴部中央部のゆるやかな球形部に横位に付けられる。把手の取り付け部分の胴部壁は、内側に球形に凹められている。そのため横位の把手部分は、胴部壁の輪郭線の範囲内にあり、外へはみ出さないようにつくられている。

把手は、長さ7cm～10cm程度、幅2cm～3cm程度、厚さ1cm程度のもので断面は縦長の長方形になり中央部分がわずかに凹む。この断面の粘土棒が横位に付けられるが、取り付け部分はこの粘土棒の末端を円形に平たく延ばして接着している。

504～506の把手は、コ字形に整形されてつくられている。この例は、4号窯近くの灰3層出土の窯(65)に同類がみられ、胴部器壁を凹めずに把手部分を張り出して作られている。

500は、把手の表面に×印のヘラ記号が刻まれたものである。

注口 (第64図-566) 現存部の長さ約6.5cm、中心部で直径約2.3cmを測る。本体との接合部分は欠損して不明である。注口部は、先端は下向気味に湾曲する。器面は、ヘラナデ仕上げである。注口先端は、鋭利な工具で上・下方向から斜めに切断されて注口がくられている。焼成は、良好で青灰色を呈す。

表2 灰(原)層出土遺物一覽表

番号	灰層	器種	法量 cm	番号	灰層	器種	法量 cm	番号	灰層	器種	法量 cm
196	2・3混	大壺	口径35.5	237	2・3混	壺A	口径20.5	278	2	壺C	口径 9.0
197	"	"	" 34.3	238	"	"	" 17.0	279	3	"	" 13.5
198	"	"	" 32.5	239	"	"	" 12.5	280	2・3混	"	" 14.7
199	"	"	" 32.0	240	"	"	" 16.5	281	"	"	底径 9.5
200	"	"	" 26.5	241	"	"	" 15.0	282	"	"	" 11.0
201	"	"	" 33.5	242	"	"		283	"	長頸壺	口径11.0
202	"	"	" 29.0	243	"	"	底径20.0	284	"	"	" 11.0
203	"	"	" 30.0	244	"	"	" 19.5	285	"	短頸壺	" 6.0
204	"	"	" 24.5	245	"	"	" 17.0	286	"	"	" 9.0
205	2	壺A	" 17.5	246	"	"	" 23.5	287	"	"	" 8.5
206	"	"	" 17.0	247	"	"		288	"	"	" 8.0
207	2・3混	"	" 17.5	248	3	"	底径20.0	289	3	壺D	口径10.5
208	"	"	" 19.5	249	2・3混	"	" 18.0	290	2	"	" 11.5
209	"	"	高さ41.7 口径16.0	250	3	"	" 14.5	291	"	"	" 8.5
210	"	"	口径18.5	251	2・3混	"	" 17.5	292	3	"	" 10.5
211	"	"	" 14.5	252	"	壺B	口径24.5	293	2	"	" 9.5
212	"	"	" 17.0	253	2	"	" 22.0	294	2・3混	"	" 12.5
213	"	"	" 18.5	254	"	壺C	" 15.5	295	3	"	" 14.0
214	"	"	" 15.0	255	2・3混	"	" 14.0	296	"	"	" 10.5
215	"	"	" 18.5	256	2	"	" 18.0	297	"	"	" 11.0
216	"	"	" 13.5	257	3	"	" 14.0	298	2・3混	"	" 11.0
217	"	"	" 12.0	258	2	"	" 12.5	299	2	"	" 11.5
218	"	"	" 14.5	259	2・3混	"	" 16.0	300	2・3混	"	" 9.5
219	"	"	" 18.5	260	"	"	" 17.0	301	2	"	" 11.0
220	"	"	" 19.0	261	2	"	" 16.5	302	"	"	" 10.5
221	"	"	" 16.0	262	"	"	" 13.0	303	2・3混	"	" 13.0
222	"	"	" 15.0	263	3	"	" 13.5	304	2	"	" 11.0
223	"	"	" 20.0	264	2・3混	"	" 12.5	305	2・3混	"	" 14.5
224	"	"	" 20.0	265	2	"	" 10.5	306	"	"	" 8.5
225	"	"	" 18.0	266	3	"	" 16.0	307	"	"	" 15.5
226	"	"	" 20.0	267	2	"	" 15.5	308	"	"	" 13.0
227	"	"	" 17.0	268	3	"	" 14.5	309	2	"	
228	"	"	" 21.0	269	2	"	" 13.0	310	"	"	
229	"	"	" 17.5	270	2・3混	"	" 14.5	311	3	"	
230	"	"	" 15.5	271	"	"	" 14.0	312	2	"	
231	"	"	" 15.0	272	3	"	" 14.5	313	2・3混	"	
232	"	"	" 20.5	273	2・3混	"	" 15.0	314	"	"	
233	"	"	" 15.0	274	"	"	" 11.0	315	2	"	
234	"	"	" 17.0	275	3	"	" 13.5	316	"	"	
235	"	"	" 19.5	276	2・3混	"	" 15.0	317	2・3混	"	
236	"	"	" 17.0	277	3	"	" 15.0	318	"	"	

表3 灰(原)層出土遺物一覧表

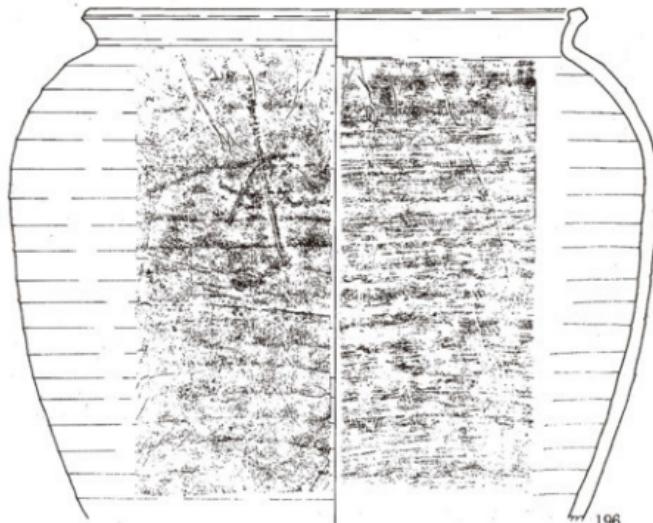
番号	灰層	器種	法量 cm	番号	灰層	器種	法量 cm	番号	灰層	器種	法量 cm
319	2	壺D		360	2-3混	大鉢	口径30.0	401	3	塊	高さ 5.6 口径14.3
320	3	"	底径10.0	361	表採	"	" 29.0	402	2	"	口径14.5
321	2-3混	"		362	2-3混	"	" 31.0	403	3	"	高さ 6.4 口径15.0
322	"	"		363	"	"	" 28.5	404	"	"	" 5.9 " 13.0
323	"	"		364	"	"	" 29.0	405	2	"	" 6.6 " 11.0
324	3	"		365	"	"	" 34.5	406	"	"	口径14.5
325	2-3混	"		366	表採	"	" 31.0	407	"	"	高さ 6.9 口径13.2
326	"	"		367	3	"	" 28.0	408	"	"	" 4.5 " 9.8
327	"	"		368	2-3混	"	" 30.5	409	4	壺A	底径21.0
328	2	"		369	2	"	" 27.0	410	4-5混	"	口径18.5
329	2-3混	"		370	2-3混	中鉢	高さ 9.0 口径20.5	411	4	"	
330	3	"		371	"	"	" 9.0 " 21.5	412	"	"	底径11.0
331	"	"		372	"	"	口径23.5	413	"	"	" 14.0
332	2-3混	"		373	"	"	高さ 8.0 口径26.0	414	4-5混	"	" 11.7
333	2	"		374	"	"	口径22.5	415	4	"	" 14.8
334	"	"		375	3	"	高さ 8.8 口径19.5	416	4-5混	"	" 11.0
335	"	"		376	2-3混	"	" 9.0 " 16.5	417	"	"	" 16.3
336	2-3混	"		377	"	すり鉢	口径18.5	418	4	壺B	口径11.5
337	"	"		378	"	"	高さ 7.8 口径20.0	419	"	"	" 12.5
338	"	"		379	"	中鉢	口径17.0	420	"	"	" 12.0
339	"	"		380	"	"	" 17.5	421	4-5混	"	" 15.5
340	"	"		381	2	"	" 12.5	422	"	"	" 16.0
341	"	"		382	2-3混	"	" 17.2	423	4	"	" 11.5
342	"	"		383	2	小鉢	" 11.5	424	4-5混	"	" 16.0
343	"	"		384	"	"	" 11.0	425	"	"	" 12.0
344	"	"		385	3	"	" 12.5	426	"	"	" 16.0
345	"	"		386	2	"	" 9.5	427	"	"	" 11.0
346	"	"		387	2-3混	"	" 13.0	428	4	"	" 13.5
347	"	"		388	2	"	" 14.5	429	"	"	" 14.0
348	"	"		389	"	"	" 9.5	430	4-5混	"	" 13.0
349	2	"		390	"	"	" 12.0	431	4	"	" 14.5
350	2-3混	"		391	2-3混	"	" 13.5	432	"	"	" 13.0
351	"	"		392	2	"	" 14.5	433	4-5混	"	" 11.0
352	"	"		393	"	"	" 14.5	434	5	"	" 17.0
353	2	"		394	3	塊	" 14.3	435	4	"	" 11.0
354	2-3混	"		395	"	"	" 12.5	436	"	"	" 12.5
355	2	"		396	"	"	" 14.2	437	4-5混	"	" 16.5
356	2-3混	"		397	2-3混	"	高さ 6.2 口径16.0	438	5	"	" 13.0
357	"	大鉢	高さ 14.7 口径30.0	398	"	"	高さ 8.0 口径15.2	439	4-5混	"	" 12.5
358	"	"	" 15.2 " 28.5	399	2	"	" 7.1 " 15.0	440	4	"	" 18.0
359	"	"	" 11.5 " 32.0	400	"	"	口径16.0	441	"	"	" 16.5

表4 灰(原)層出土遺物一覽表

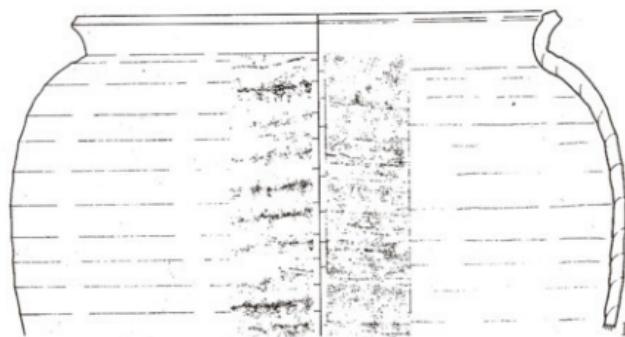
番号	灰層	器種	法量 cm	番号	灰層	器種	法量 cm	番号	灰層	器種	法量 cm
442	4	壺B	口径16.5	480	4-5混	壺C	口径 9.5	518	5	壺C	
443	"	"	" 17.0	481	"	"	" 10.0	519	4-5混	"	
444	"	"	" 14.5	482	"	"	" 11.0	520	"	"	
445	"	"	" 18.8	483	"	"	" 10.5	521	4	"	
446	"	"	" 10.5	484	4	"	" 11.0	522	"	"	
447	5	"	" 17.5	485	5	"	" 11.5	523	"	"	
448	4	"	" 18.0	486	4-5混	"	" 10.5	524	"	"	
449	4-5混	"	" 14.7	487	"	"	" 12.0	525	5	"	
450	4	"	" 15.5	488	4	"	" 8.5	526	4-5混	"	
451	5	"	" 16.0	489	"	"	" 10.5	527	4	"	
452	4	"	" 17.5	490	4-5混	"	" 10.0	528	5	大鉢	口径40.0
453	5	"	" 14.0	491	4	"	" 12.5	529	"	"	" 32.0
454	4-5混	"	" 20.5	492	4-5混	"	" 9.5	530	"	中鉢	" 23.0
455	5	"	" 15.0	493	4	"	" 12.0	531	4	"	" 26.0
456	"	"	" 15.0	494	4-5混	"	" 9.0	532	4-5混	"	" 25.0
457	4	"	" 17.0	495	"	"		533	"	"	" 24.0
458	5	"	" 15.5	496	"	"		534	"	小鉢	高さ 7.0 口径 9.5
459	4	"	" 15.5	497	"	"	口径10.0	535	"	"	口径 8.7
460	4-5混	"	" 13.0	498	"	"		536	4	塊	高さ 6.5 口径13.0
461	"	"	" 14.0	499	"	"		537	5	"	" 12.5
462	"	"	" 12.5	500	4	"		538	"	"	口径13.5
463	"	"	" 14.0	501	4-5混	"		539	4-5混	中鉢	" 23.5
464	5	"	" 13.0	502	"	"		540	"	"	" 18.0
465	"	"	" 13.5	503	"	"		541	"	"	" 18.5
466	4-5混	"	" 11.5	504	"	"		542	"	"	" 20.0
467	"	"	" 14.5	505	"	"		543	"	小鉢	" 12.5
468	5	"	" 12.5	506	"	"		544	"	塊	高さ 6.0 口径15.5
469	"	"	" 10.5	507	"	"		545	"	"	" 6.0 口径15.0
470	4-5混	"	" 15.0	508	5	"		546	"	"	" 6.1 口径14.8
471	"	"	" 14.5	509	4	"		547	4	"	口径15.5
472	"	"	" 14.5	510	4-5混	"		548	5	"	高さ 5.8 口径15.5
473	"	"	" 14.5	511	"	"		549	"	"	口径14.5
474	"	"	" 14.0	512	"	"		550	"	"	" 15.5
475	"	"	" 14.5	513	"	"		551	"	"	" 17.3
476	"	"	" 16.5	514	5	"		552	"	"	" 13.0
477	"	"	" 17.5	515	4-5混	"		553	4-5混	"	高さ 6.1 口径16.8
478	"	"	" 14.5	516	"	"		554	"	"	口径14.8
479	"	壺C	" 11.0	517	"	"		555	"	"	高さ 5.5 口径15.8

第34図 灰(原)層出土遺物器種一覧

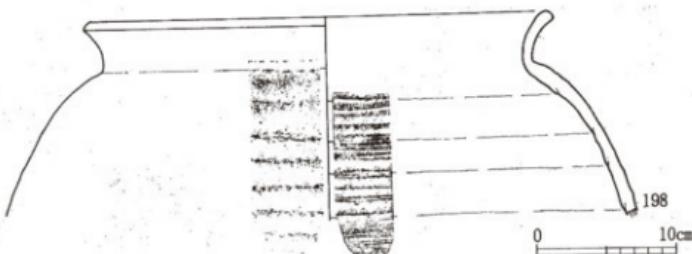
	類	器 A	器 B	器 C	器 D	鉢(大・中)	鉢(中・小)	壺	瓶
灰(原) 2層		206 288	253 282	258 291		389 393 392 396			403 404
灰(原) 3層				272 300	367	375			
灰(原) 2・3層解				276 278 280 282 284 285 286 288 290 291 293 294 295 296 297 298 299 300 301 302 303 304 305 306 307 308 309 310 311 312 313 314 315 316 317 318 319 320 321 322 323 324 325 326 327 328 329 330 331 332 333 334 335 336 337 338 339 340 341 342 343 344 345 346 347 348 349 350 351 352 353 354 355 356 357 358 359 360 361 362 363 364 365 366 367 368 369 370 371 372 373 374 375 376 377 378 379 380 381 382 383 384 385 386 387 388 389 390 391 392 393 394 395 396 397 398 399 400 401 402 403 404 405 406 407 408 409 410 411 412 413 414 415 416 417 418 419 420 421 422 423 424 425 426 427 428 429 430 431 432 433 434 435 436 437 438 439 440 441 442 443 444 445 446 447 448 449 450 451 452 453 454 455 456 457 458 459 460 461 462 463 464 465 466 467 468 469 470 471 472 473 474 475 476 477 478 479 480 481 482 483 484 485 486 487 488 489 490 491 492 493 494 495 496 497 498 499 500 501 502 503 504 505 506 507 508 509 510 511 512 513 514 515 516 517 518 519 520 521 522 523 524 525 526 527 528 529 530 531 532 533 534 535 536 537 538 539 540 541 542 543 544 545 546 547 548 549 550 551 552 553 554 555 556 557 558 559 560 561 562 563 564 565 566 567 568 569 570 571 572 573 574 575 576 577 578 579 580 581 582 583 584 585 586 587 588 589 590 591 592 593 594 595 596 597 598 599 600 601 602 603 604 605 606 607 608 609 610 611 612 613 614 615 616 617 618 619 620 621 622 623 624 625 626 627 628 629 630 631 632 633 634 635 636 637 638 639 640 641 642 643 644 645 646 647 648 649 650 651 652 653 654 655 656 657 658 659 660 661 662 663 664 665 666 667 668 669 670 671 672 673 674 675 676 677 678 679 680 681 682 683 684 685 686 687 688 689 690 691 692 693 694 695 696 697 698 699 700 701 702 703 704 705 706 707 708 709 710 711 712 713 714 715 716 717 718 719 720 721 722 723 724 725 726 727 728 729 730 731 732 733 734 735 736 737 738 739 740 741 742 743 744 745 746 747 748 749 750 751 752 753 754 755 756 757 758 759 760 761 762 763 764 765 766 767 768 769 770 771 772 773 774 775 776 777 778 779 780 781 782 783 784 785 786 787 788 789 790 791 792 793 794 795 796 797 798 799 800 801 802 803 804 805 806 807 808 809 810 811 812 813 814 815 816 817 818 819 820 821 822 823 824 825 826 827 828 829 830 831 832 833 834 835 836 837 838 839 840 841 842 843 844 845 846 847 848 849 850 851 852 853 854 855 856 857 858 859 860 861 862 863 864 865 866 867 868 869 870 871 872 873 874 875 876 877 878 879 880 881 882 883 884 885 886 887 888 889 890 891 892 893 894 895 896 897 898 899 900 901 902 903 904 905 906 907 908 909 910 911 912 913 914 915 916 917 918 919 920 921 922 923 924 925 926 927 928 929 930 931 932 933 934 935 936 937 938 939 940 941 942 943 944 945 946 947 948 949 950 951 952 953 954 955 956 957 958 959 960 961 962 963 964 965 966 967 968 969 970 971 972 973 974 975 976 977 978 979 980 981 982 983 984 985 986 987 988 989 990 991 992 993 994 995 996 997 998 999 1000 1001 1002 1003 1004 1005 1006 1007 1008 1009 10010 10011 10012 10013 10014 10015 10016 10017 10018 10019 10020 10021 10022 10023 10024 10025 10026 10027 10028 10029 10030 10031 10032 10033 10034 10035 10036 10037 10038 10039 10040 10041 10042 10043 10044 10045 10046 10047 10048 10049 10050 10051 10052 10053 10054 10055 10056 10057 10058 10059 10060 10061 10062 10063 10064 10065 10066 10067 10068 10069 10070 10071 10072 10073 10074 10075 10076 10077 10078 10079 10080 10081 10082 10083 10084 10085 10086 10087 10088 10089 10090 10091 10092 10093 10094 10095 10096 10097 10098 10099 100100 100101 100102 100103 100104 100105 100106 100107 100108 100109 100110 100111 100112 100113 100114 100115 100116 100117 100118 100119 100120 100121 100122 100123 100124 100125 100126 100127 100128 100129 100130 100131 100132 100133 100134 100135 100136 100137 100138 100139 100140 100141 100142 100143 100144 100145 100146 100147 100148 100149 100150 100151 100152 100153 100154 100155 100156 100157 100158 100159 100160 100161 100162 100163 100164 100165 100166 100167 100168 100169 100170 100171 100172 100173 100174 100175 100176 100177 100178 100179 100180 100181 100182 100183 100184 100185 100186 100187 100188 100189 100190 100191 100192 100193 100194 100195 100196 100197 100198 100199 100200 100201 100202 100203 100204 100205 100206 100207 100208 100209 100210 100211 100212 100213 100214 100215 100216 100217 100218 100219 100220 100221 100222 100223 100224 100225 100226 100227 100228 100229 100230 100231 100232 100233 100234 100235 100236 100237 100238 100239 100240 100241 100242 100243 100244 100245 100246 100247 100248 100249 100250 100251 100252 100253 100254 100255 100256 100257 100258 100259 100260 100261 100262 100263 100264 100265 100266 100267 100268 100269 100270 100271 100272 100273 100274 100275 100276 100277 100278 100279 100280 100281 100282 100283 100284 100285 100286 100287 100288 100289 100290 100291 100292 100293 100294 100295 100296 100297 100298 100299 100300 100301 100302 100303 100304 100305 100306 100307 100308 100309 100310 100311 100312 100313 100314 100315 100316 100317 100318 100319 100320 100321 100322 100323 100324 100325 100326 100327 100328 100329 100330 100331 100332 100333 100334 100335 100336 100337 100338 100339 100340 100341 100342 100343 100344 100345 100346 100347 100348 100349 100350 100351 100352 100353 100354 100355 100356 100357 100358 100359 100360 100361 100362 100363 100364 100365 100366 100367 100368 100369 100370 100371 100372 100373 100374 100375 100376 100377 100378 100379 100380 100381 100382 100383 100384 100385 100386 100387 100388 100389 100390 100391 100392 100393 100394 100395 100396 100397 100398 100399 100400 100401 100402 100403 100404 100405 100406 100407 100408 100409 100410 100411 100412 100413 100414 100415 100416 100417 100418 100419 100420 100421 100422 100423 100424 100425 100426 100427 100428 100429 100430 100431 100432 100433 100434 100435 100436 100437 100438 100439 100440 100441 100442 100443 100444 100445 100446 100447 100448 100449 100450 100451 100452 100453 100454 100455 100456 100457 100458 100459 100460 100461 100462 100463 100464 100465 100466 100467 100468 100469 100470 100471 100472 100473 100474 100475 100476 100477 100478 100479 100480 100481 100482 100483 100484 100485 100486 100487 100488 100489 100490 100491 100492 100493 100494 100495 100496 100497 100498 100499 100500 100501 100502 100503 100504 100505 100506 100507 100508 100509 100510 100511 100512 100513 100514 100515 100516 100517 100518 100519 100520 100521 100522 100523 100524 100525 100526 100527 100528 100529 100530 100531 100532 100533 100534 100535 100536 100537 100538 100539 100540 100541 100542 100543 100544 100545 100546 100547 100548 100549 100550 100551 100552 100553 100554 100555 100556 100557 100558 100559 100560 100561 100562 100563 100564 100565 100566 100567 100568 100569 100570 100571 100572 100573 100574 100575 100576 100577 100578 100579 100580 100581 100582 100583 100584 100585 100586 100587 100588 100589 100590 100591 100592 100593 100594 100595 100596 100597 100598 100599 100600 100601 100602 100603 100604 100605 100606 100607 100608 100609 100610 100611 100612 100613 100614 100615 100616 100617 100618 100619 100620 100621 100622 100623 100624 100625 100626 100627 100628 100629 100630 100631 100632 100633 100634 100635 100636 100637 100638 100639 100640 100641 100642 100643 100644 100645 100646 100647 100648 100649 100650 100651 100652 100653 100654 100655 100656 100657 100658 100659 100660 100661 100662 100663 100664 100665 100666 100667 100668 100669 100670 100671 100672 100673 100674 100675 100676 100677 100678 100679 100680 100681 100682 100683 100684 100685 100686 100687 100688 100689 100690 100691 100692 100693 100694 100695 100696 100697 100698 100699 100700 100701 100702 100703 100704 100705 100706 100707 100708 100709 100710 100711 100712 100713 100714 100715 100716 100717 100718 100719 100720 100721 100722 100723 100724 100725 100726 100727 100728 100729 100730 100731 100732 100733 100734 100735 100736 100737 100738 100739 100740 100741 100742 100743 100744 100745 100746 100747 100748 100749 100750 100751 100752 100753 100754 100755 100756 100757 100758 100759 100760 100761 100762 100763 100764 100765 100766 100767 100768 100769 100770 100771 100772 100773 100774 100775 100776 100777 100778 100779 100780 100781 100782 100783 100784 100785 100786 100787 100788 100789 100790 100791 100792 100793 100794 100795 100796 100797 100798 100799 100800 100801 100802 100803 100804 100805 100806 100807 100808 100809 100810 100811 100812 100813 100814 100815 100816 100817 100818 100819 100820 100821 100822 100823 100824 100825 100826 100827 100828 100829 100830 100831 100832 100833 100834 100835 100836 100837 100838 100839 100840 100841 100842 100843 100844 100845 100846 100847 100848 100849 100850 100851 100852 100853 100854 100855 100856 100857 100858 100859 100860 100861 100862 100863 100864 100865 100866 100867 100868 100869 100870 100871 100872 100873 100874 100875 100876 100877 100878 100879 100880 100881 100882 100883 100884 100885 100886 100887 100888 100889 100890 100891 100892 100893 100894 100895 100896 100897 100898 100899 100900 100901 100902 100903 100904 100905 100906 100907 100908 100909 100910 100911 100912 100913 100914 100915 100916 100917 100918 100919 100920 100921 100922 100923 100924 100925 100926 100927 100928 100929 100930 100931 100932 100933 100934 100935 100936 100937 100938 100939 100940 100941 100942 100943 100944 100945 100946 100947 100948 100949 100950 100951 100952 100953 100954 100955 100956 100957 100958 100959 100960 100961 100962 100963 100964 100965 100966 100967 100968 100969 100970 100971 100972 100973 100974 100975 100976 100977 100978 100979 100980 100981 100982 100983 100984 100985 100986 100987 100988 100989 100990 100991 100992 100993 100994 100995 100996 100997 100998 100999 1001000 1001001 1001002 1001003 1001004 1001005 1001006 1001007 1001008 1001009 1001010 1001011 1001012 1001013 1001014 1001015 1001016 1001017 1001018 1001019 1001020 1001021 1001022 1001023 1001024 1001025 1001026 1001027 1001028 1001029 1					



196

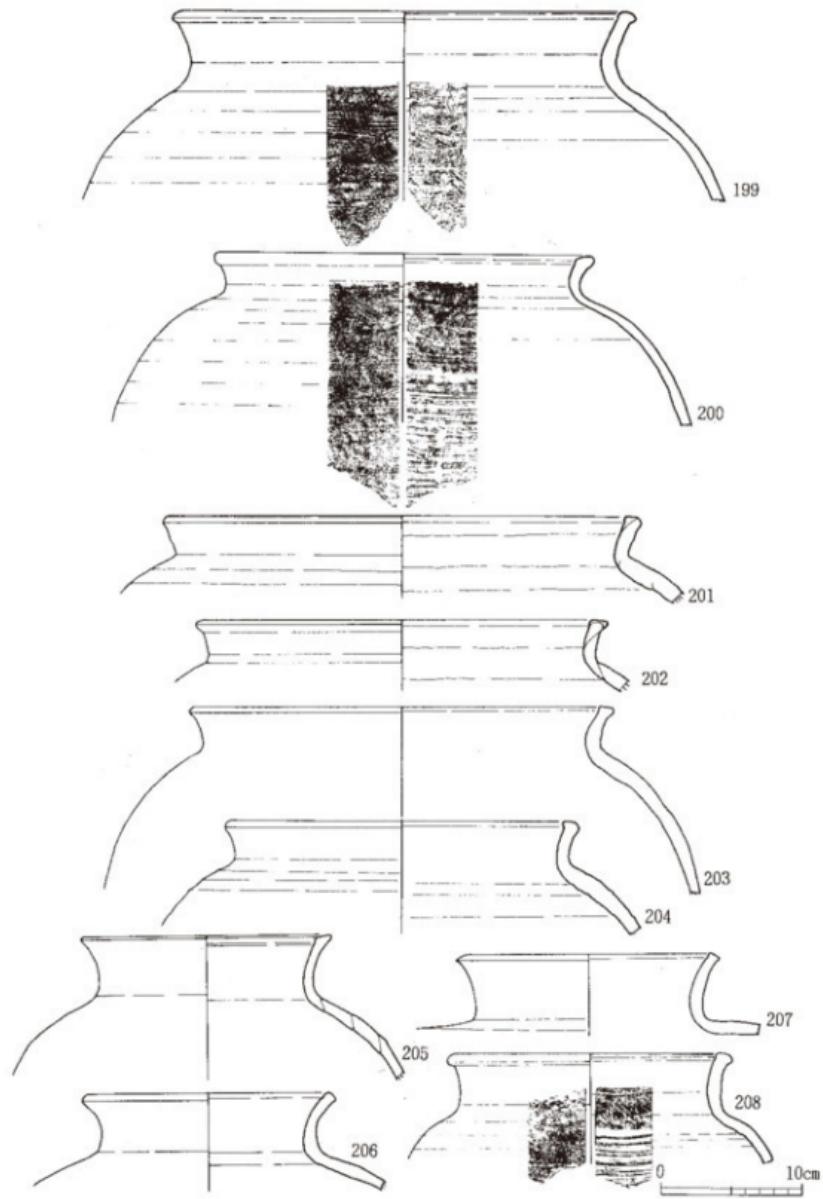


197

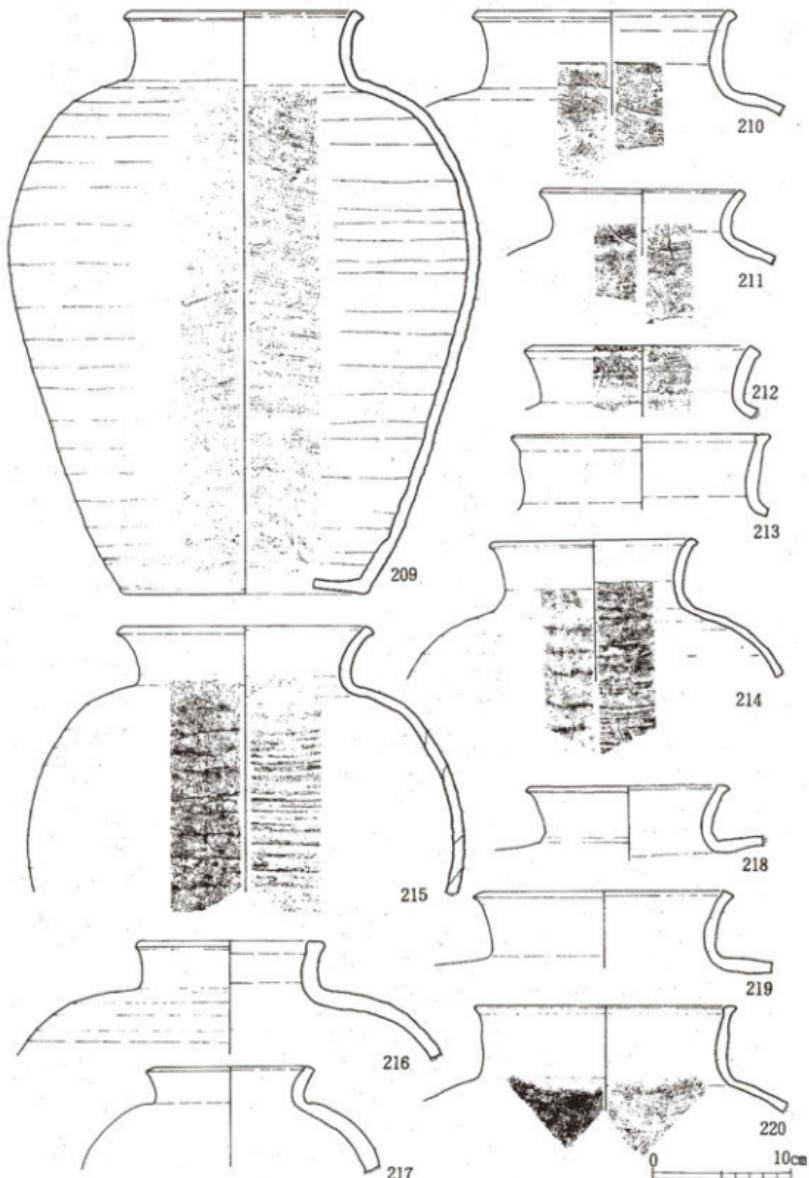


0 10cm

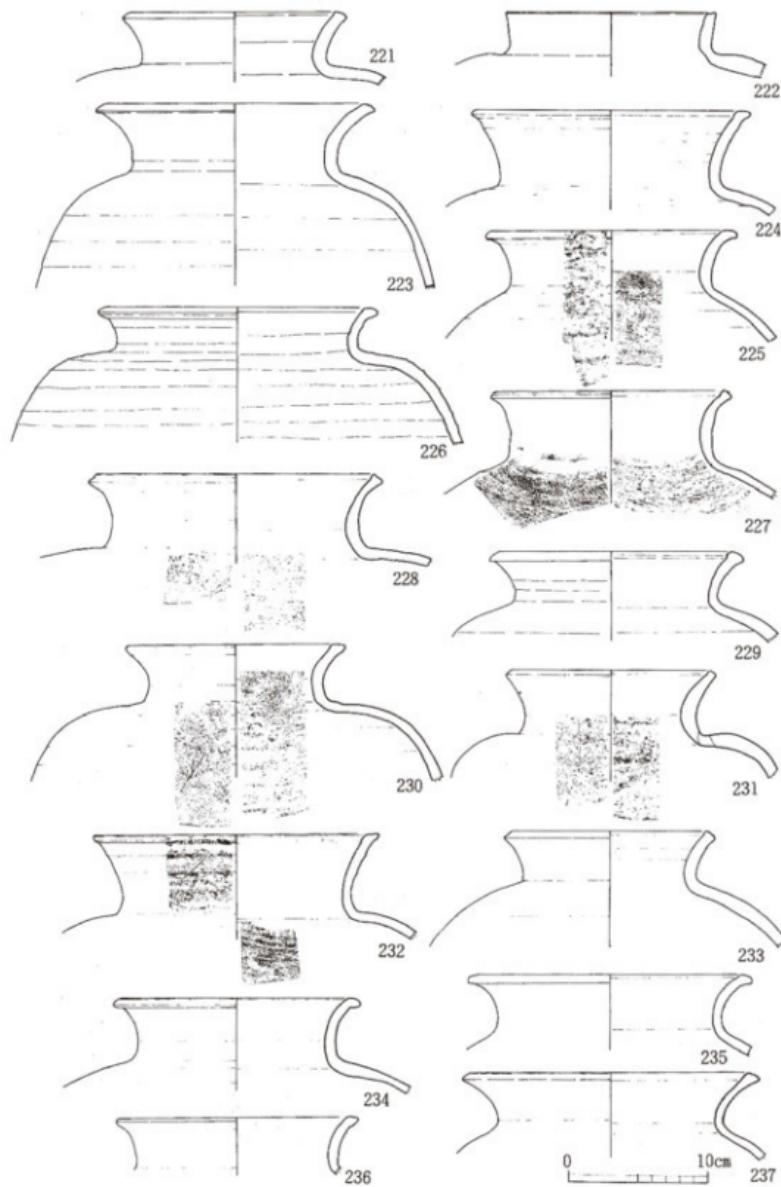
第35図 灰(原)層出土遺物実測図(1)



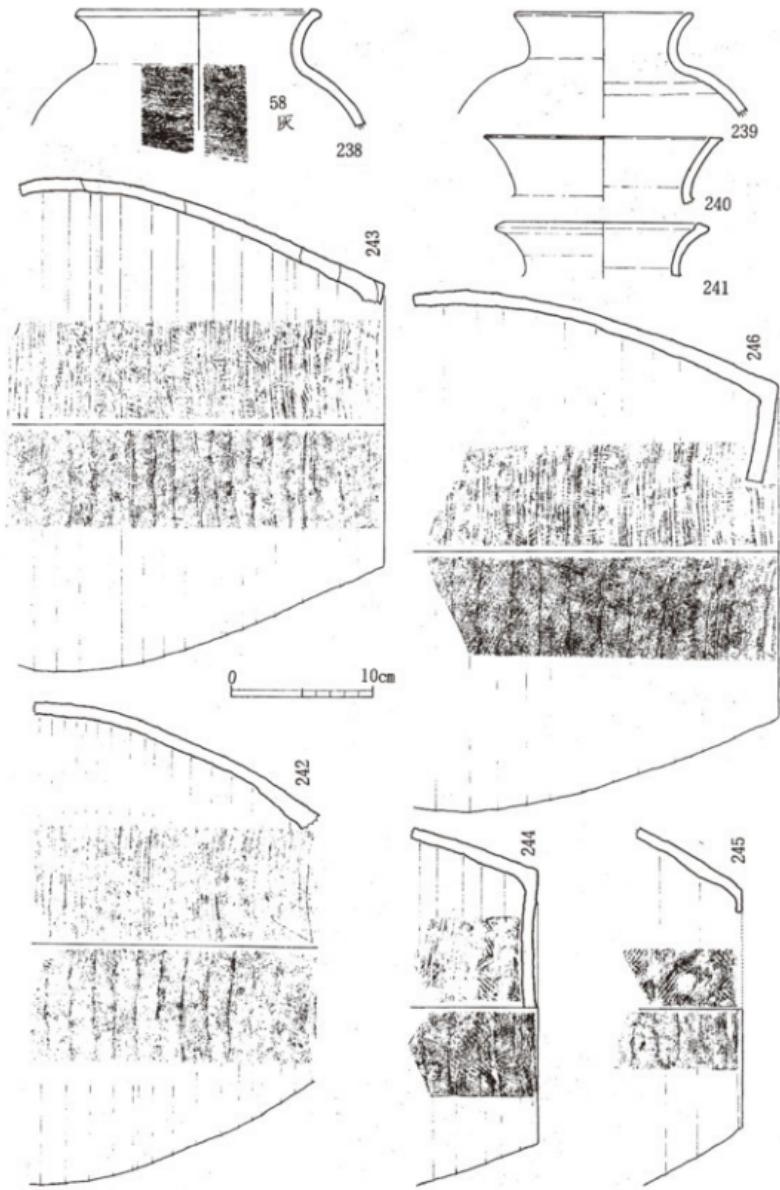
第36図 灰(原)層出土遺物実測図(2)



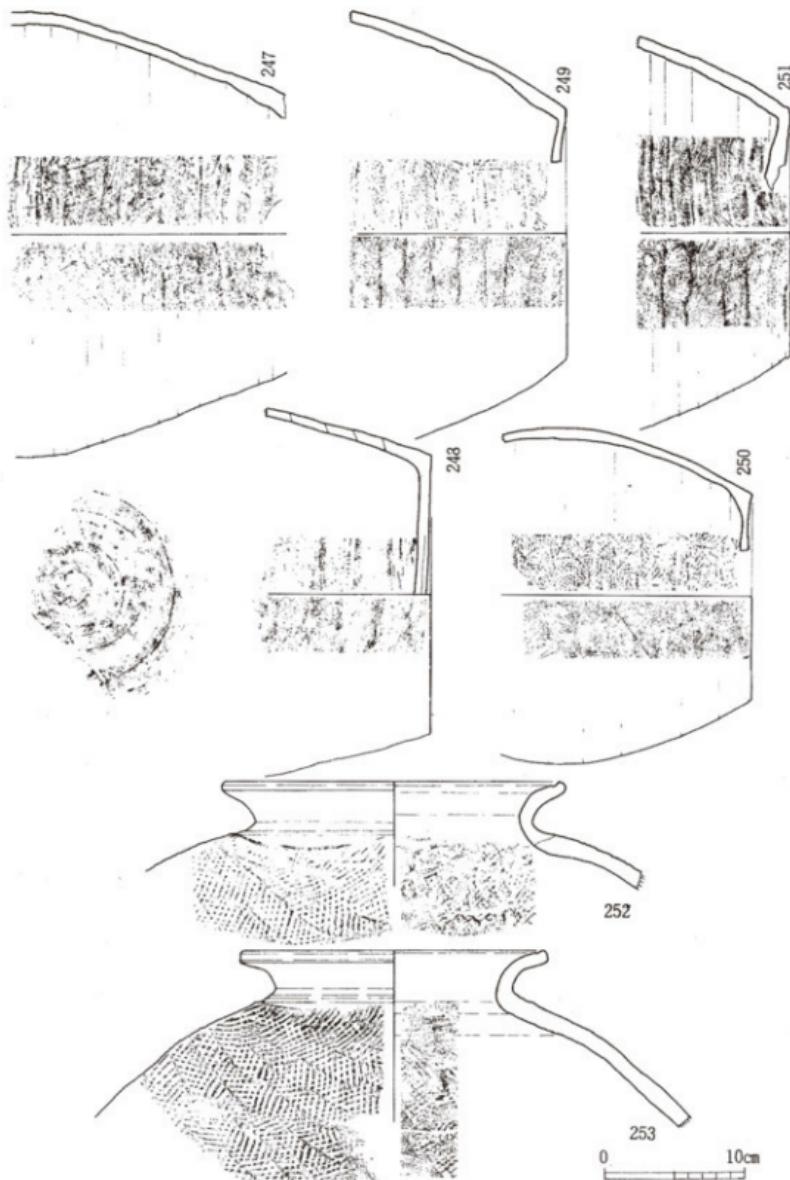
第37図 灰(原)層出土遺物実測図(3)



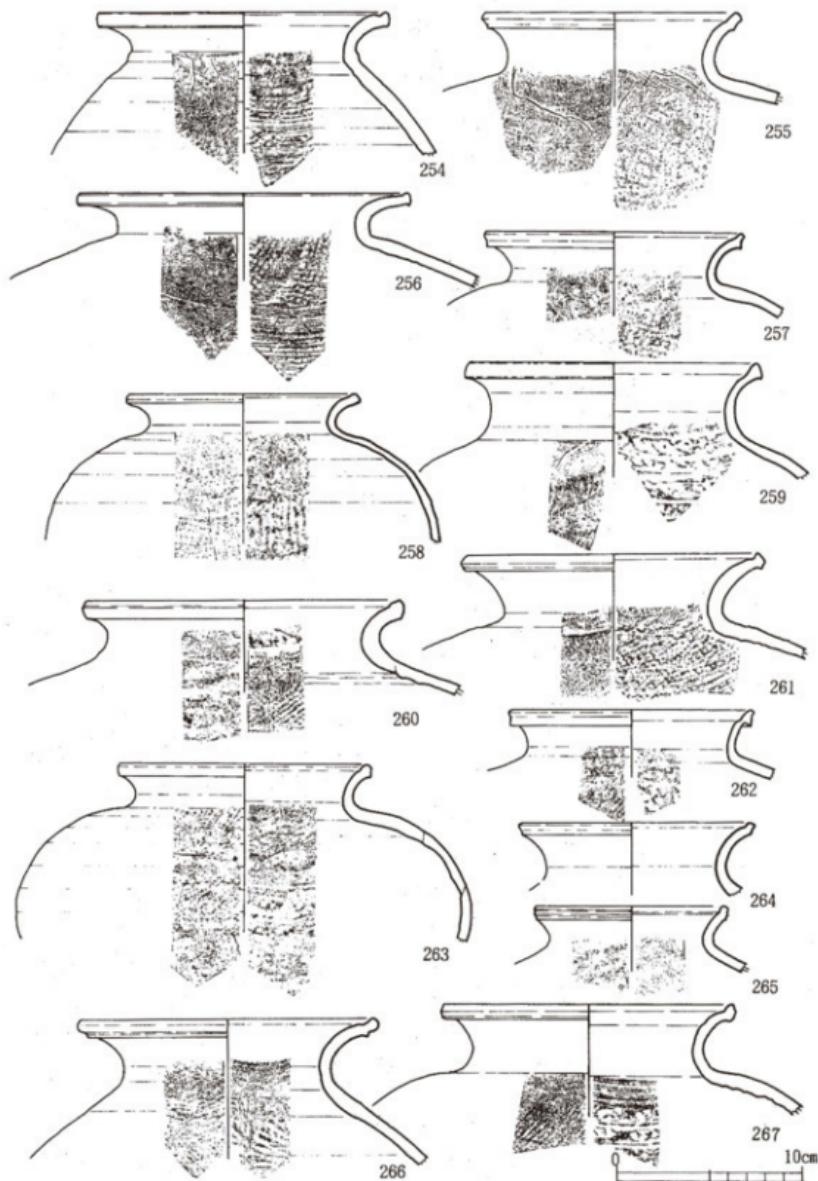
第38図 灰(原)層出土遺物実測図(4)



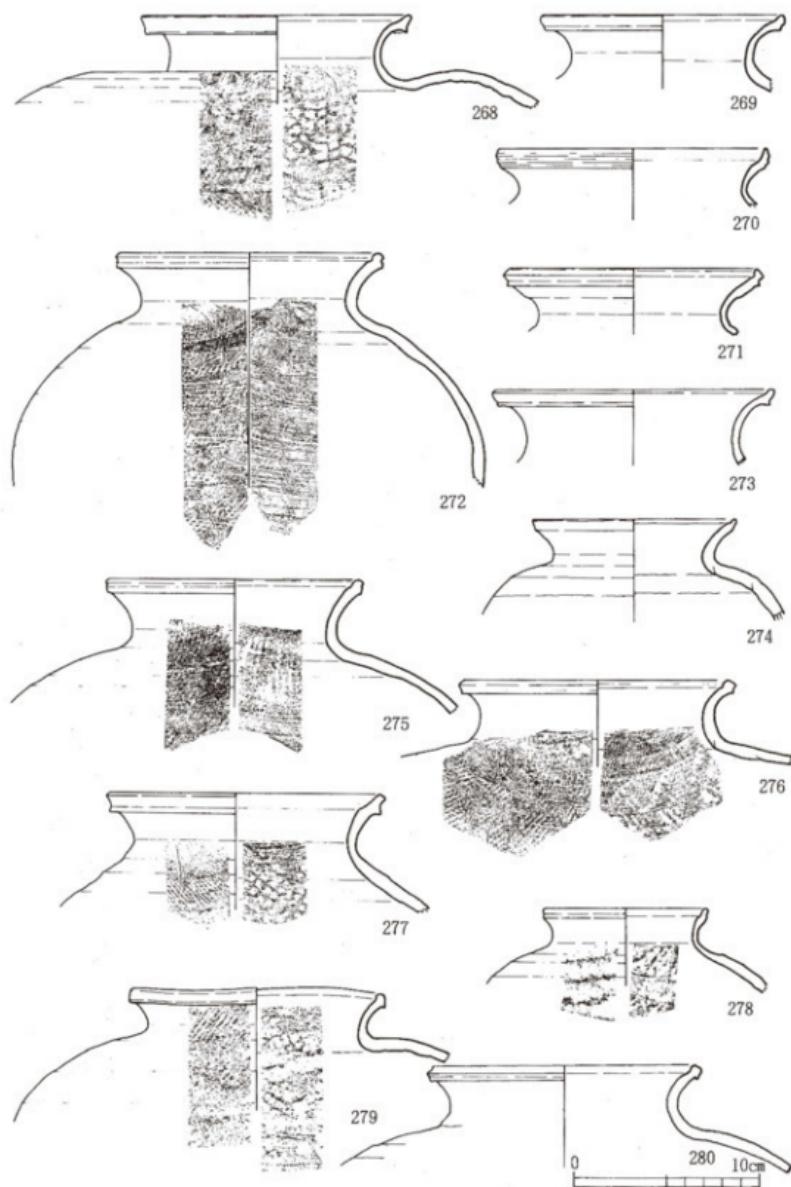
第39図 灰(原)層出土遺物実測図(5)



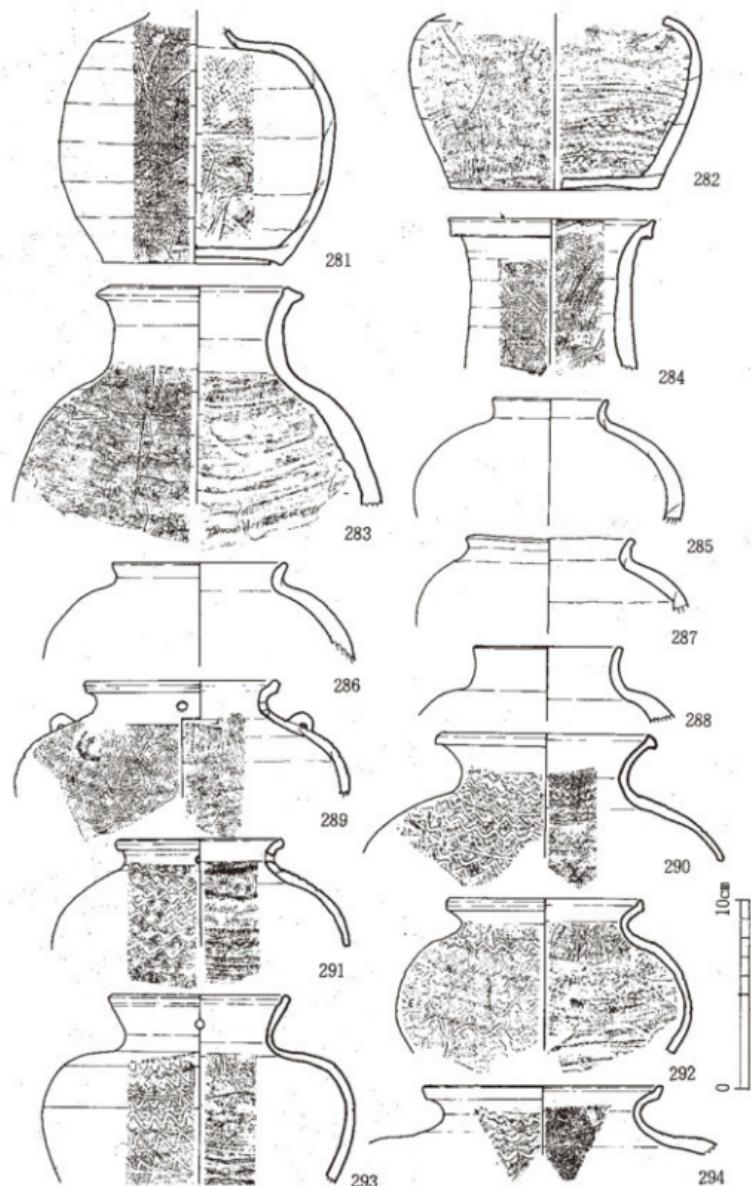
第40図 灰(原)層出土遺物実測図(6)



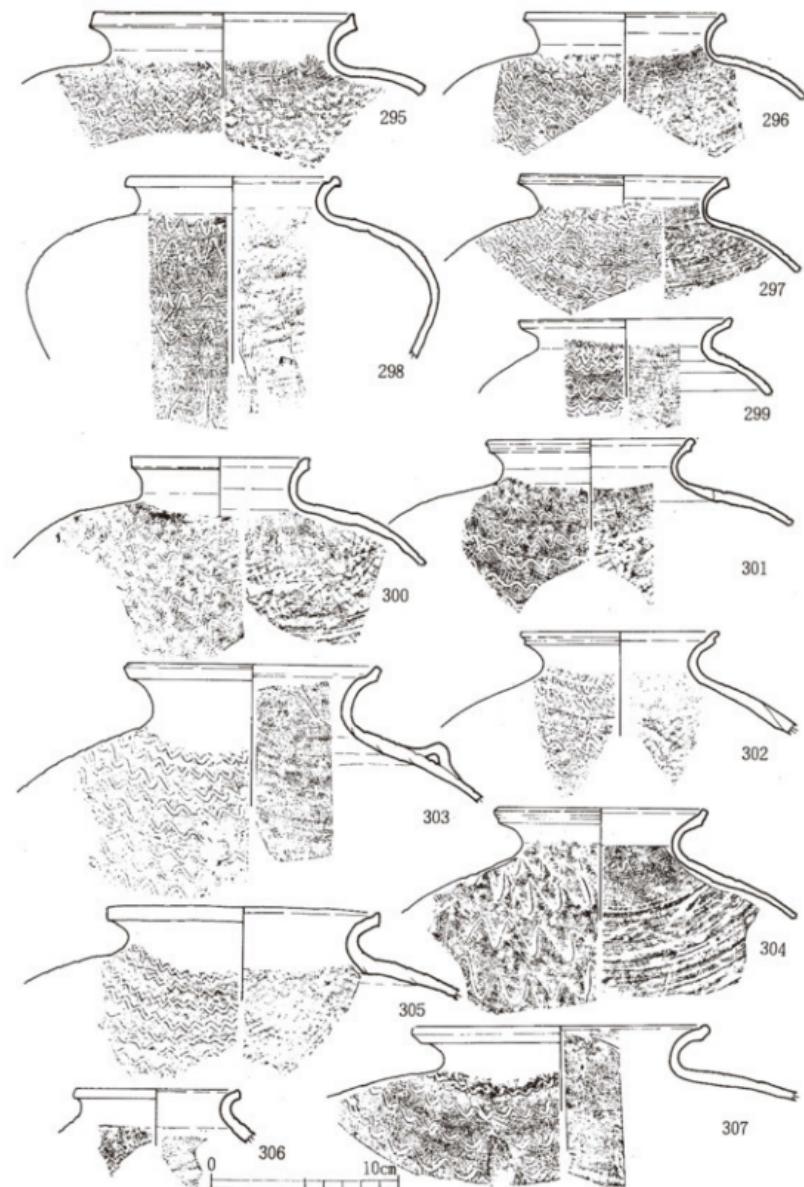
第41図 灰(原)層出土遺物実測図(7)



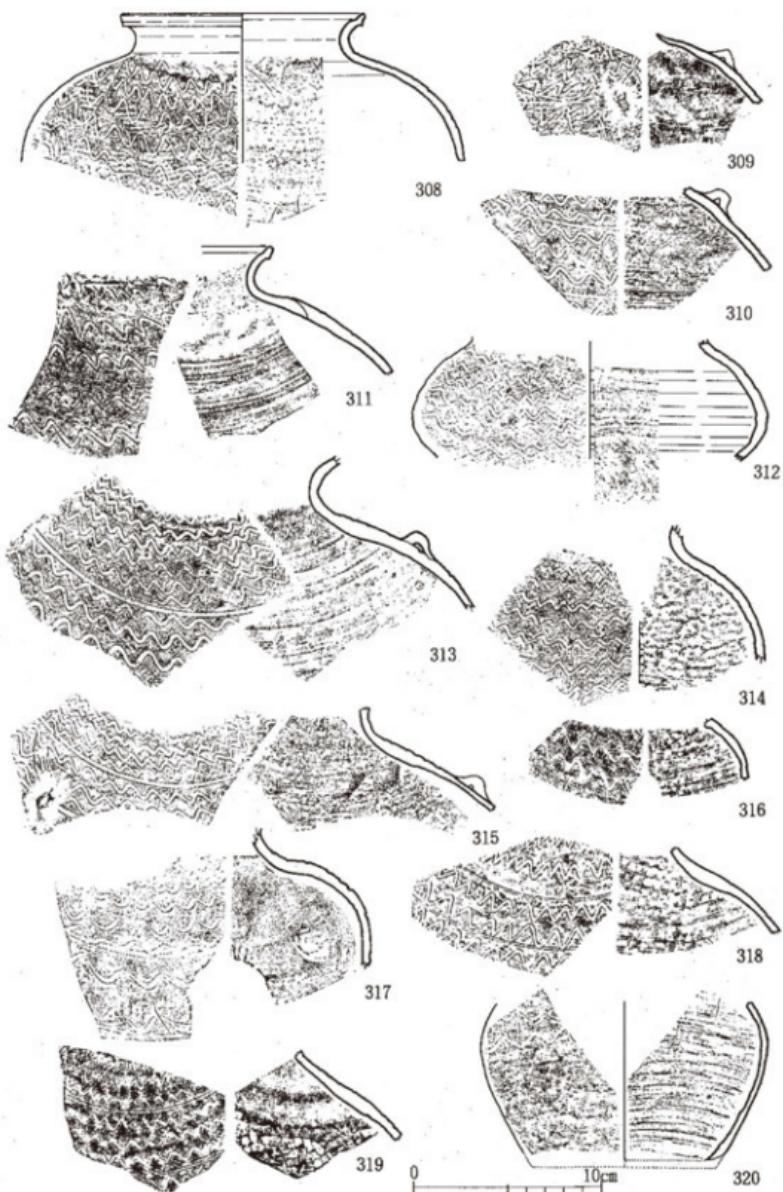
第42図 灰(原)層出土遺物実測図(8)



第43図 灰(原)層出土遺物実測図(9)



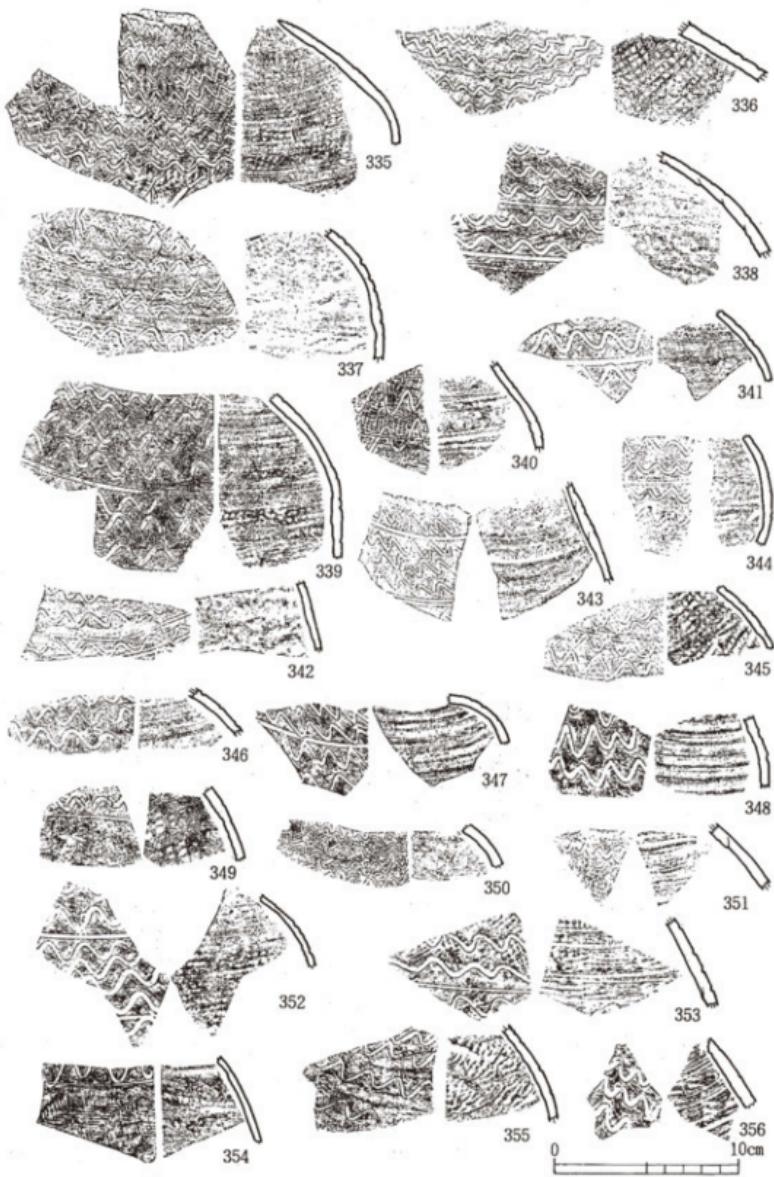
第44図 灰(原)層出土遺物実測図⑩



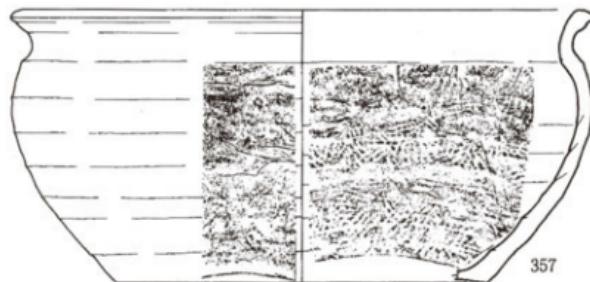
第45図 反(原)層出土遺物実測図10



第46図 灰(原)層出土遺物実測図②



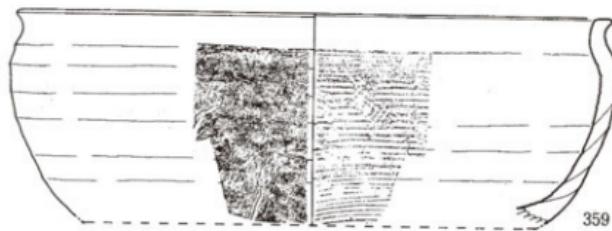
第47図 灰(原)層出土遺物実測図13



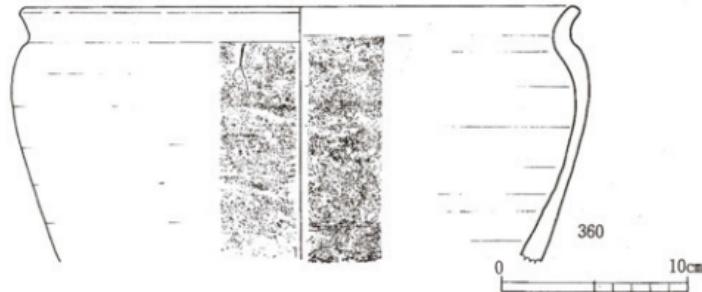
357



358



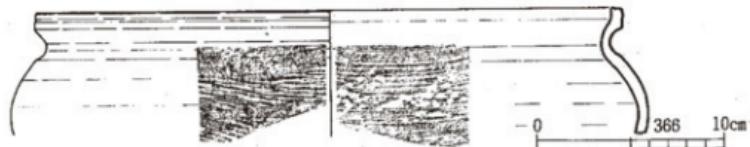
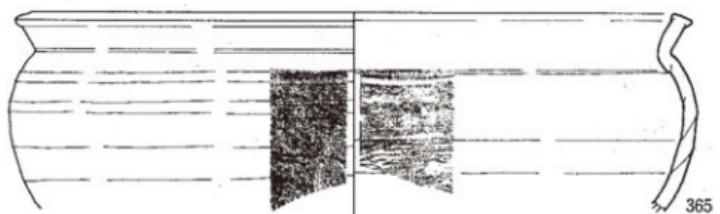
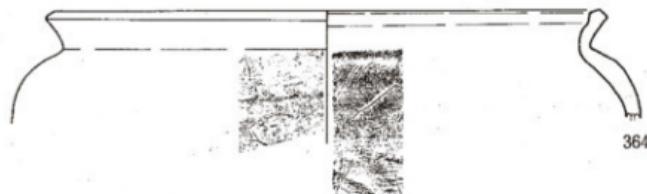
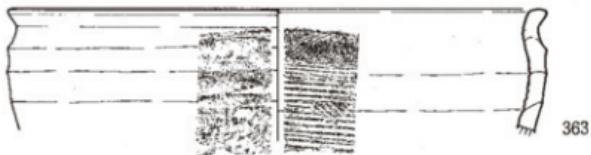
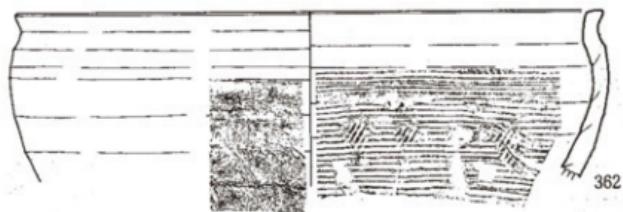
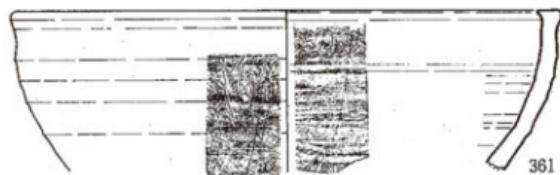
359



360

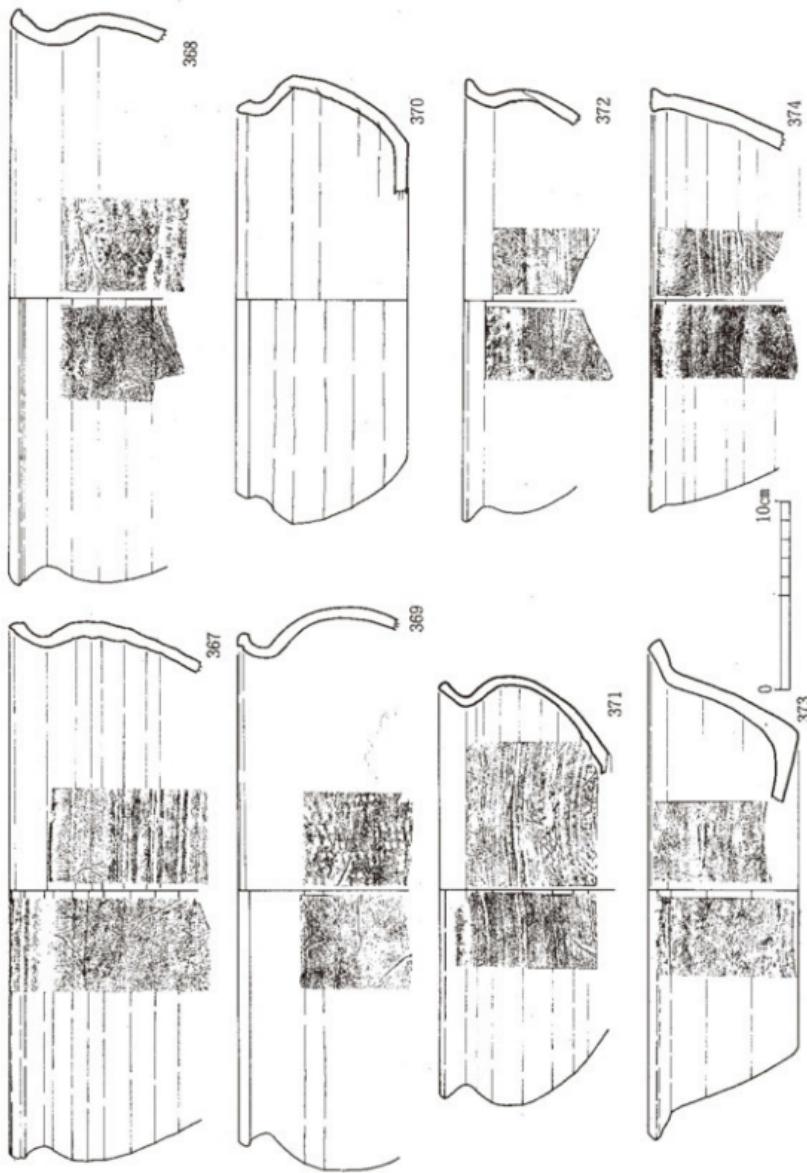
10cm

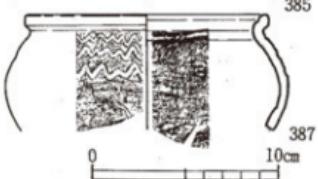
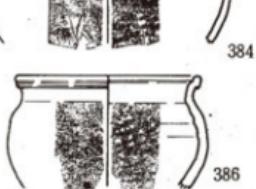
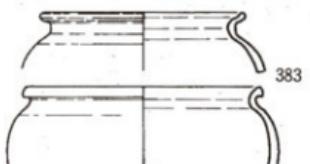
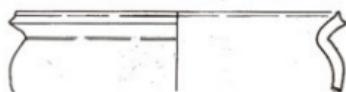
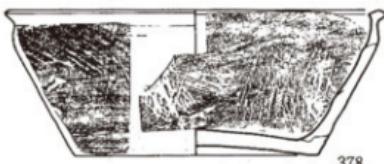
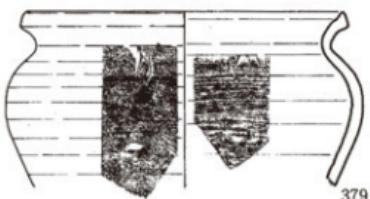
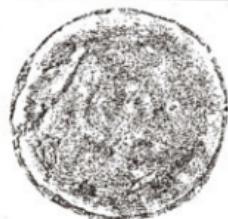
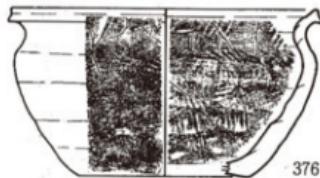
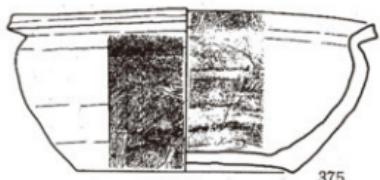
第48図 灰(原)層出土遺物実測図⑭



第49図 灰(原)層出土遺物実測図05

第50図 反(原)層出土遺物実測図(6)

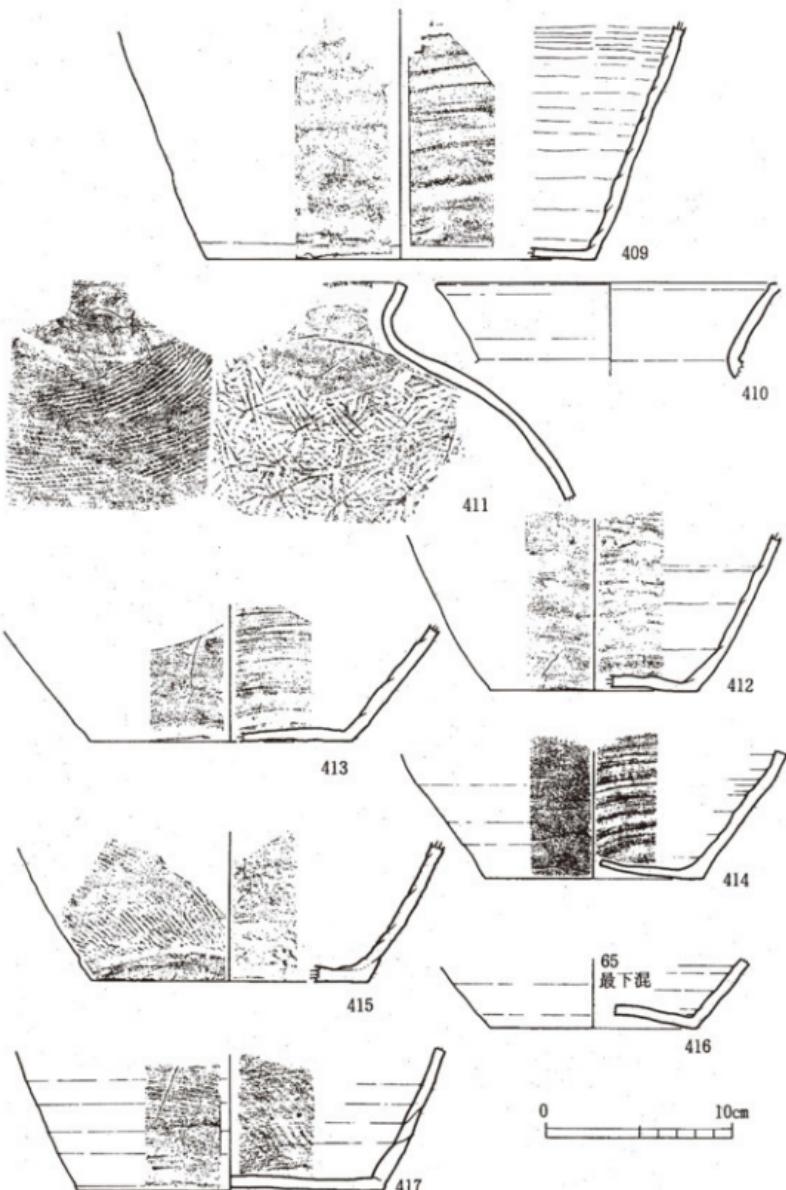




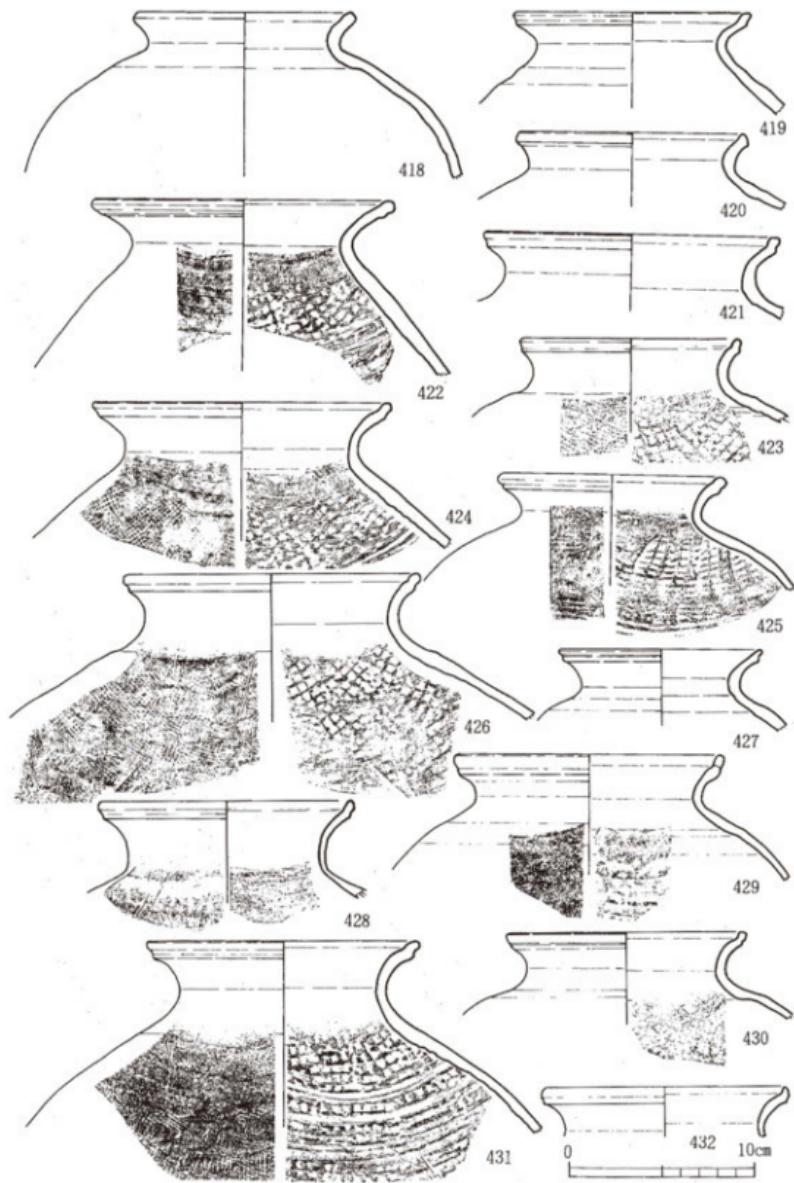
第51図 灰(原)層出土遺物実測図(1)



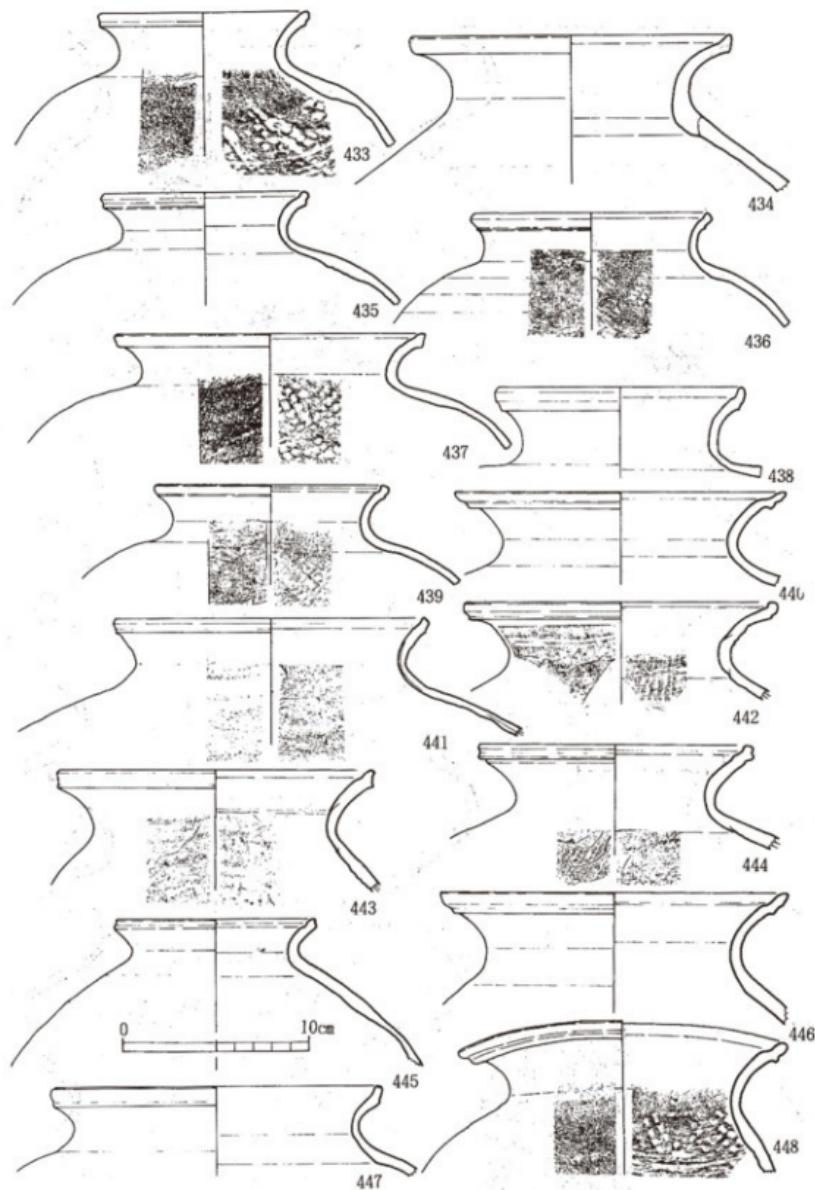
第52図 灰(原)層出土遺物実測図18



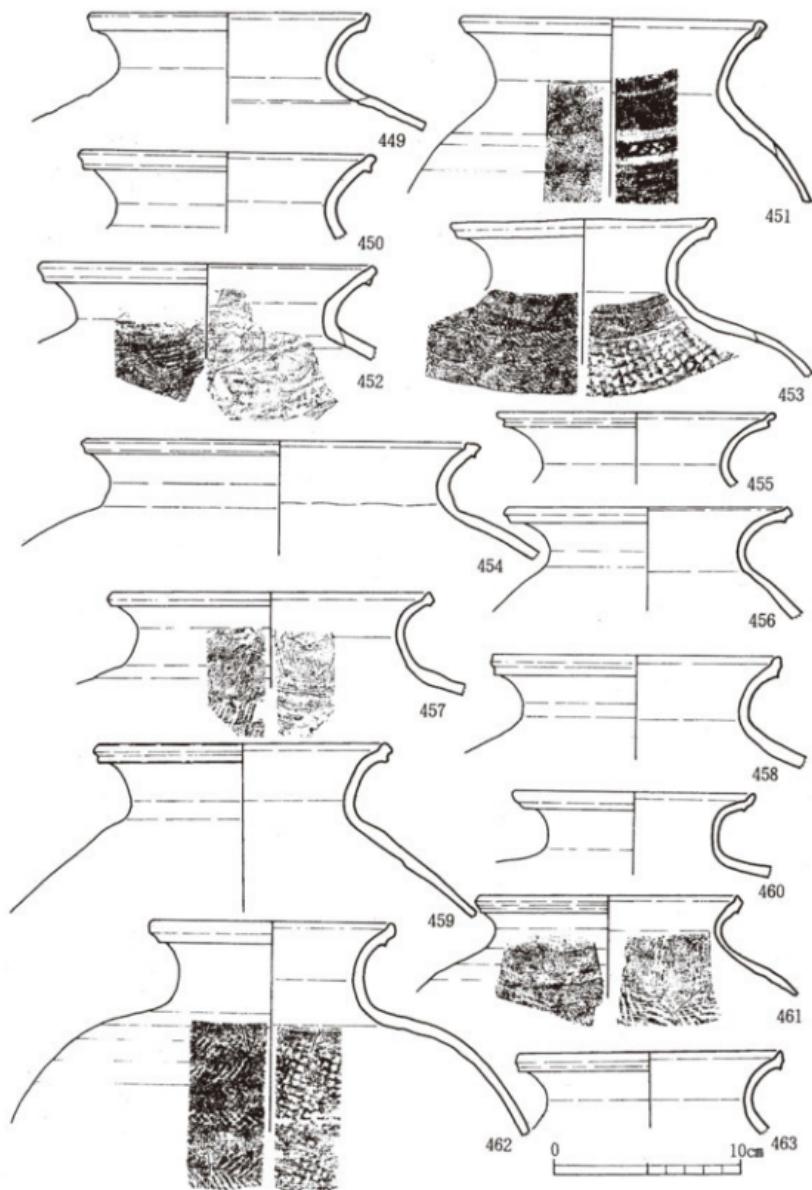
第53図 灰(原)層出土遺物実測図⑨



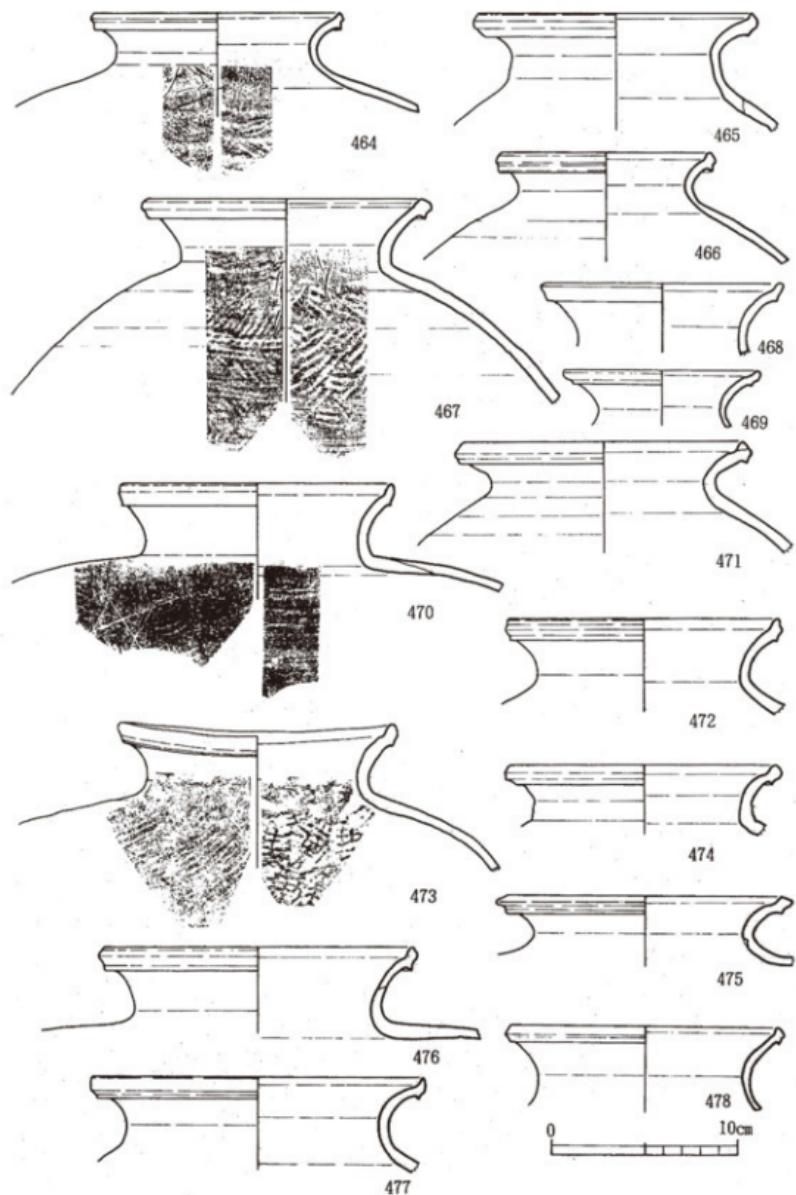
第54図 灰(原)層出土遺物実測図20



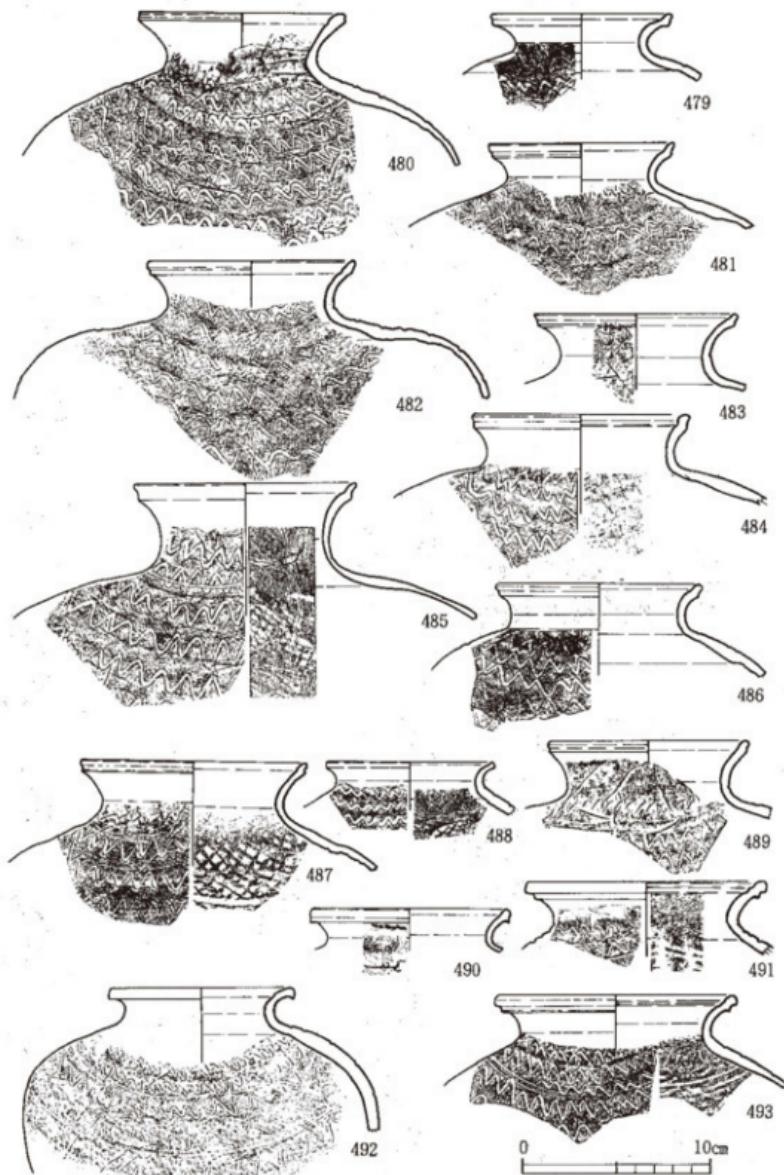
第55図 灰(原)層出土遺物実測図(2)



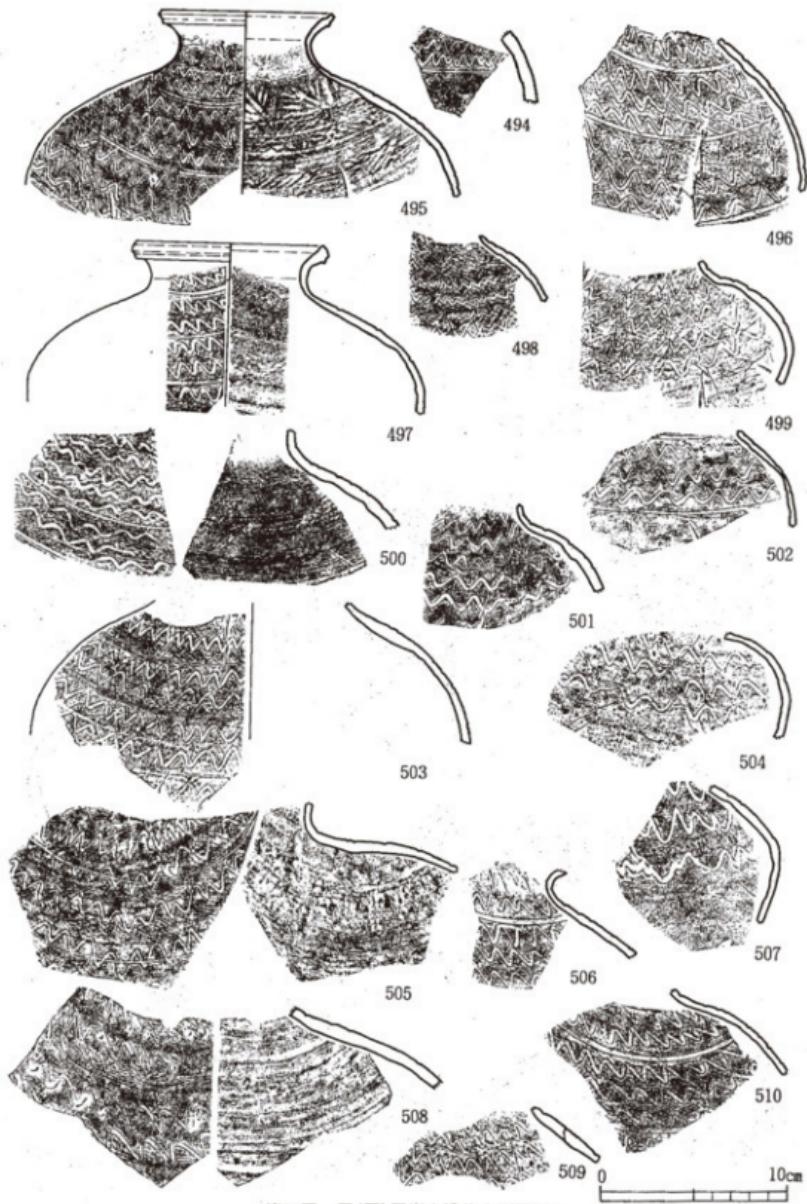
第56図 灰(原)層出土遺物実測図22



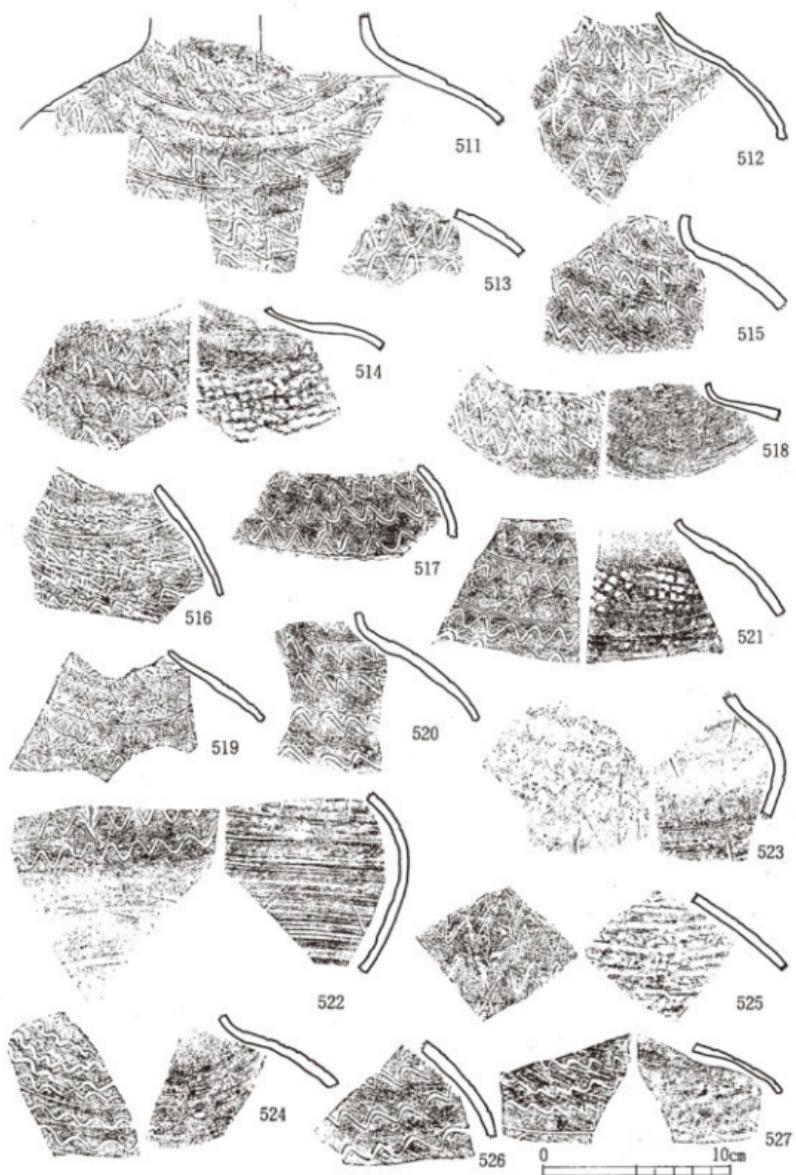
第57図 灰(原)層出土遺物実測図(2)



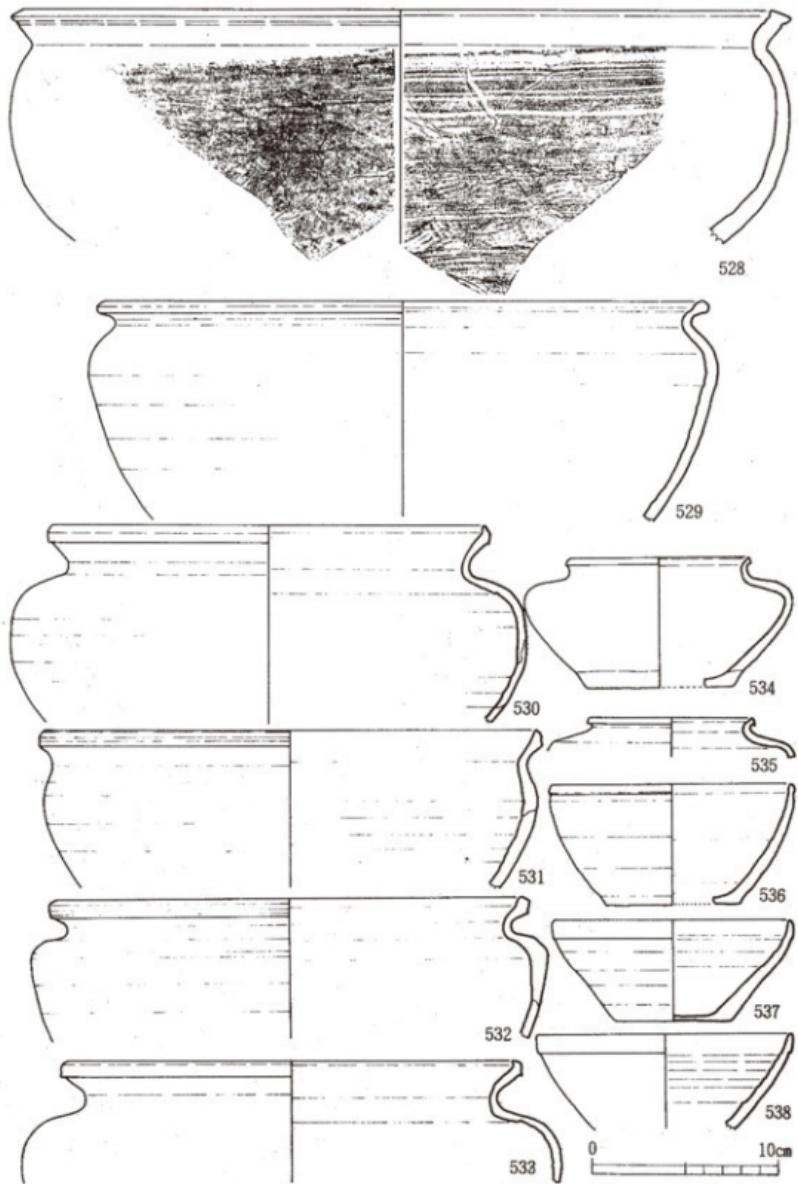
第58図 灰(原)層出土遺物実測図24



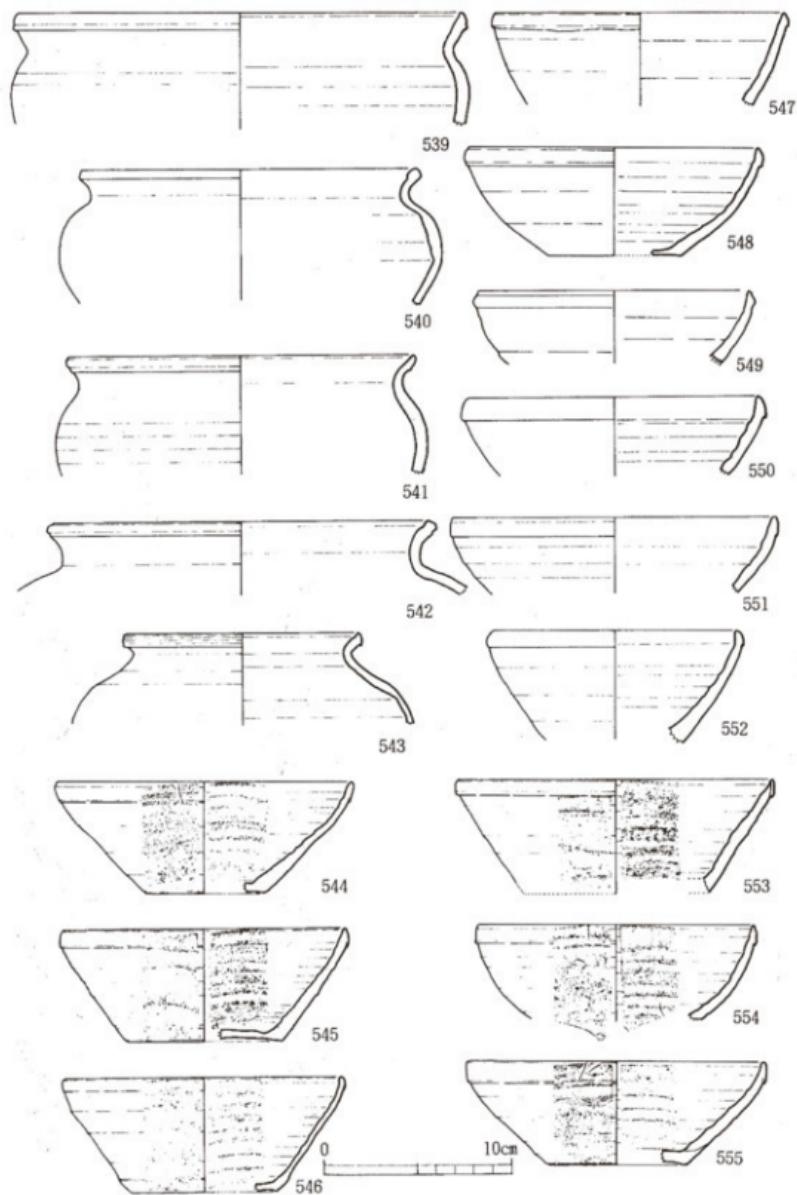
第59図 灰(原)層出土遺物実測図29



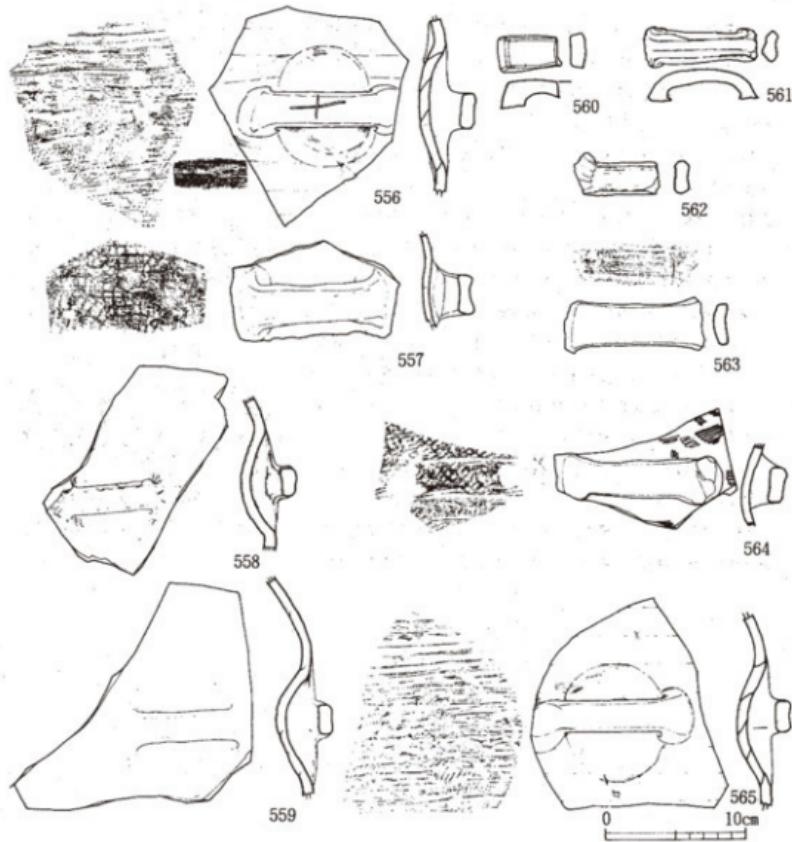
第60図 灰(原)層出土遺物実測図26



第61図 灰(原)層出土遺物実測図(2)



第62図 灰(原)層出土遺物実測図(2)



第63図 灰(原)層出土遺物実測図(2)

ヘラ記号(第65図-567~582) ヘラ記号は、特殊な記号が2例(567, 568)出土し、そのほかは×印と落書き様のヘラ描きである。

567は、大形壺(壺A類)の肩部に描かれたものであり、×印の各端部に9個づつの刺突文がそれぞれ施された特殊な記号である。568も大形壺(壺A類)の肩部に描かれたもので、×印の間にさらに刺突文の×印を重ね、印の端部を刺突文で円形に囲む特殊な記号である。

×印のヘラ記号は、2通りみられる。569のようにヘラで深く刻んだ小さな×印と、574や581のようにヘラで浅く大きく(雑に)描くものがある。前者は、569のように壺の口縁部内側に印されるものや灰3層の口縁部85のように壺の底部内面に印されるものもある。後者は、574は胴部外面に、575は胴部内面に、581は底部外面に印されている。

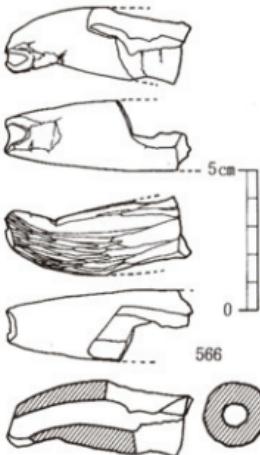
落書き様のヘラ書きには、570や571のような鋸歯状にヘラ書きするものや格子状にヘラ書きする意味不明な簡単なものと、582のように底部近くの胴部に梯子をおもわせる絵画様のヘラ書きがみられる。このような梯子状のヘラ書きは、灰（原）2・3混層出土の摺鉢（378）の底部下面にも描かれている。

焼台（第66図、第67図—583～600） 粘土塊を利用した焼台は、調査したすべての窯や各灰原から大量に出土している。平面は梢円形、断面は略台形を呈している。

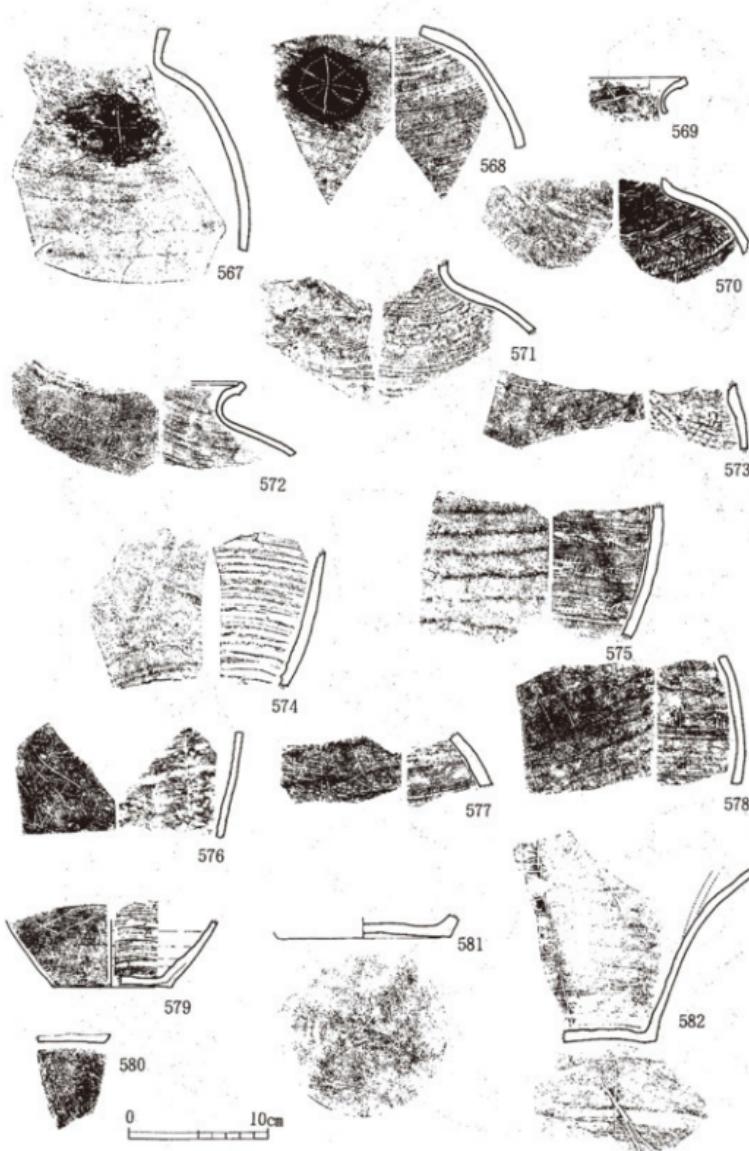
縦8.5cm～14cm程度、横幅10.5cm～18cm程度の一般的に横長につくられた粘土塊である。頂部にわずかな平坦面をつくり、下面（床面との接着面）は平坦で傾きがみられる。これは、窯の焼成部の床面が傾斜しているためである。下面の傾きは15°～45°までみられる。

590や591のように頂部平坦面の下端に受け部をつくるものもある。

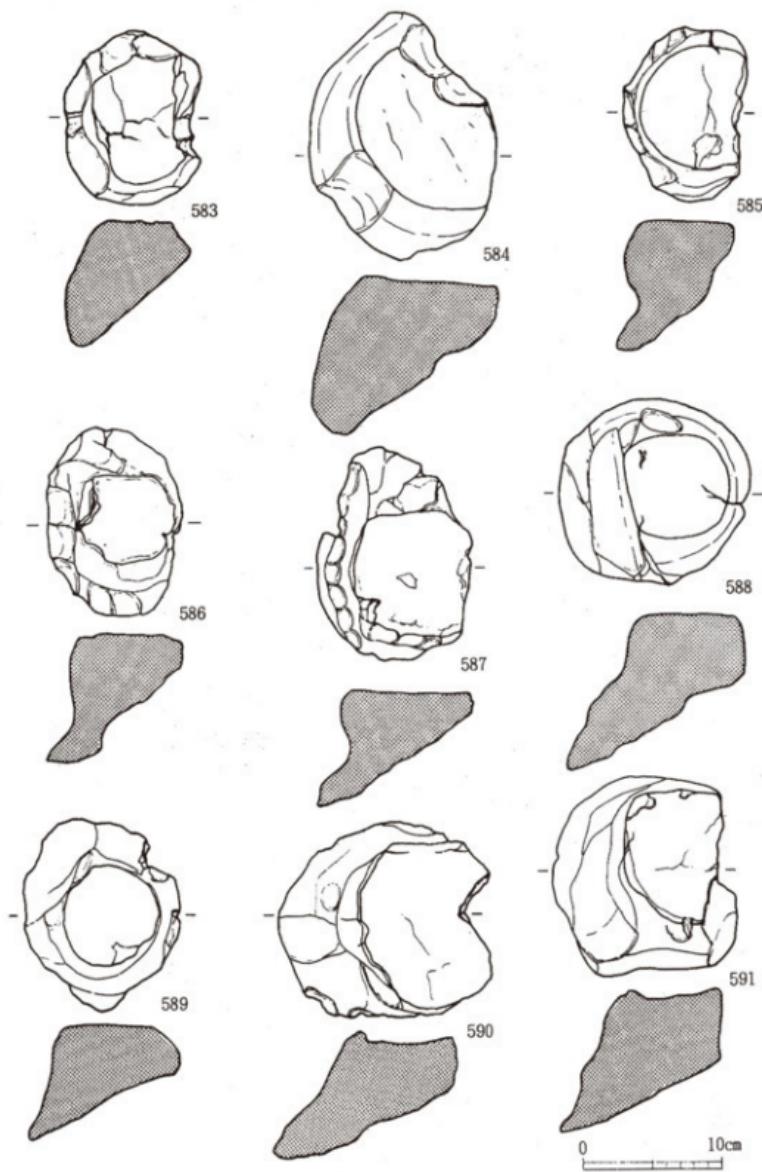
焼台の側面は指で整形され、あらく指圧痕が残されている。色調は、赤褐色を呈するものや灰褐色、黒褐色など種々みられるが、全体に加熱が低い。



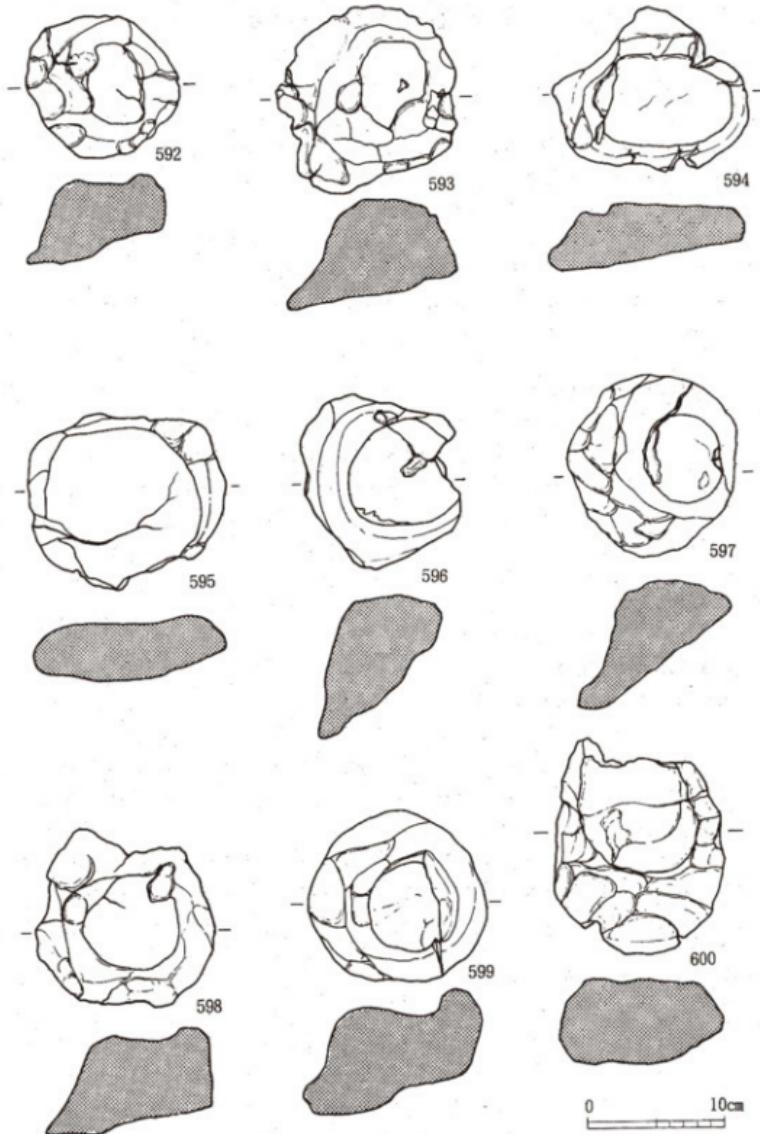
第64図 注口実測図



第65図 灰(原)層出土遺物実測図00



第66図 烧台実測図(1)



第67図 燐台実測図(2)

第Ⅳ章 まとめ

南西諸島に広く分布する「類須恵器」は、佐藤伸二氏や白木原和美氏らの精力的な調査研究^{b1}によって以来、南島の先史時代研究の重要な位置を占める陶質土器である。

この陶質土器の窯跡が発見され、その後の確認調査の結果、第Ⅰ支群^{b2}のため池掘削断面に窯跡3基と灰原6ヶ所程度が確認された。さらに、約50m離れた西方に延びる丘陵の南傾斜面の第Ⅱ支群^{b3}では、窯跡7基と各灰原が確認された。

今回の発掘調査は、この第Ⅰ支群のため池改修工事完了後の水没部分の限られた区域の調査であったが、南島の「類須恵器」と呼ばれる陶質土器の初めての窯跡調査であり、多くの新地見や今後の研究に新しい方向をみいだせる成果が得られた。以下、今回の発掘調査の成果と問題点を列記してまとめとしたい。

1. 窯跡の立地について

第Ⅰ支群および第Ⅱ支群の窯跡の立地は、ハツ手状に延びた隣接する丘陵の傾斜面に構築されている。第Ⅰ支群は東向きの傾斜面に構築され窯の主軸は西方向（1号窯はN-86°-W）で、第Ⅱ支群は南向きの傾斜面で窯の主軸はほぼ南方向（3号窯はN-7°-E）である。第Ⅰ支群と第Ⅱ支群の窯跡は、主軸の方向に約90°のズレがみられるが、いずれも丘陵の等高線に直角に構築されている。窯の構築部分は、いずれも例り抜きが容易な花崗岩の基礎層である。そして、表層には、いたるところに黄褐色の粘土層が存在しており、焼物の素材には充分恵まれた立地といえる。

2. 窯の構造について

各窯の構造についてはすでに説明したが、窯跡の各部の計測値をまとめると表5のとおりである。1号窯は焚口から煙道まで最も保存が良好な状態で検出されたが、3号窯・4号窯・5号窯についても燃焼部や焼成部などの各部は良く残存しており窯の構造を比較する良好な資料が得られている。これらの保存良好な窯の各部の構造を比較し、カミィヤキ窯の構造の傾向をみてみたい。

窯に付随する灰原については、3号窯で確認されている。3号窯では、焚口から約1.2mの前庭部の端から急な落ち込み状の傾斜がみられ灰原が始まっている。灰原は、急傾斜面のためさほど広くないが、幅約2m、長さ約3mの範囲である（第10図）。窯跡は、傾斜面の等高線に直角に構築されているが、灰原は傾斜下のため等高線が変化して窯主軸とは直角の方向に流れている。灰原の灰層は4枚に分かれている。

焚口および前庭部は、1号窯で2m、3号窯で1.2m残存する。1号窯は、末端が削平されており若干延びることが想定される。1号窯の前庭部の形状は、焚口から灰原に向かって扇状に広がっている（第4図）。

焚口の入口の構造は、1号窯と3号窯が良好な状態で検出された。1号窯は、焚口入口は約

表5 カムィヤキ窯計測一覧表〔第Ⅰ支群〕

	主軸方位	全長	燃焼部幅	焼成部幅	焼成部長	焼成部傾斜	備考
1号窯	N-86°-W	8.4	0.73	1.8	3.4	31°	焚口の一部欠損
2号窯	N-32°-W	(1.4)	—	(1.76)	—	(20°)	窯尻残存
3号窯	N-91°-W	4.7	0.84	2.12	3.1	36°	
4号窯	N-85°-W	(4.5)	0.85	(2.0)	2.8	36°	焼成部欠損
5号窯	N-87°-W	(4.0)	0.7	2.20	(2.2)	33°	窯尻欠損

〔第Ⅱ支群〕

3号窯	N-7°-W	3.6	1.3	2.0	1.4	42°	
-----	--------	-----	-----	-----	-----	-----	--

90cm程度の幅で、天井は約80cmの高さで残存している。窯口の入口の側壁には、珊瑚の柱状石が粘土によって埋め込まれ、焚口の天井にかけては粘土内に焼台として利用された粘土塊をレンガ積み状に埋め込まれた状態が観取される。2号窯でも同様な珊瑚の柱状石が検出されており、窯口の閉鎖部分は同様な作り方がおこなわれていたことが想定される。

燃焼部の幅は、70~85cmといずれも狭い。燃焼部の天井は、1号窯が約90cm、5号窯が約70cmの高さで残存している。燃焼部は、焚口付近が最も狭く焼成部に向かって広くなる。床面は、いずれも緩傾斜を呈し、急傾斜の焼成部から転落した焼台が集積した状態である。

焼成部は、1号窯と3号窯が現存し、3.4mと3.1mの長さを測る。最大幅は、1号窯が1.8m、3号窯が2.12mを測る胴張りのいわゆるイチジク形の形状を呈するものである。焼成部床の傾斜は、31°~36°の急傾斜をもつ。

煙道は、2号窯、3号窯は途中で削平されているが、1号窯はほぼ完全な状態で検出されており、窯の煙道構築を知る貴重な発見であった。まず、煙出し部は、1~3号窯の3基とも窯尻の焼成部床面から半円形の煙道が始まっている。煙出し部はこの位置がほとんどであるが、4号窯は窯尻の奥壁は高さ30cm程度残存しているが煙出し穴は検出されなかった。このことは、煙道は、窯尻から若干上がった天井寄りのところに位置したことが想定される。煙道の開口部は、幅約125cmの円形の掘り込みの中央に開口し、砂岩質の扁平な平石で閉鎖された状態で検出された。掘り込みの壁面や開口部周辺の床面や閉鎖蓋石は熱変して赤色を帯びている。還元焰焼成に伴う重要な発見であった。円形の掘り込みは窯体の南側の傾斜下へ溝状に続き煙道への登り道として利用されたことが考えられるが、円形の掘り込みの床面は壁に沿って周溝が巡っており排水溝としても利用されたことが判明している。

以上、今回調査の第Ⅰ支群の窯の構造を再述したが、燃焼部幅80cm程度、焼成部幅2m前後に焼成部長2.8~3.4m、焼成部傾斜角31°~36°の範囲内である。確認調査で検出した第Ⅱ支群3号窯(表5)を比較すると、焼成部長が若干短く焼成部床面傾斜角は42°と急傾斜であるが形状はほぼ類似している。

南島におけるいわゆる「頬須忠器」の窯跡の発見は、本窯が初見であり類例はみられないが、本土にこの時期の窯跡を求めるに熊本県球磨郡錦町の下り山窯跡があげられる。下り山1

号窯では、多量の壺・甕・鉢とともに玉縁口縁の塊の出土がみられ、これらの型態から11～12世紀として把え、その中で11世紀後半の可能性が強いことを指摘している。¹⁵ 窯の構造は、この下り山1号窯と3号窯に類似する形態である。1号窯は、焼成部幅が0.9～1m、焼成部最大幅が1.7m、焼成部長は2.3m程度を測り、床面の傾斜角は42°と急傾斜である。煙道は奥壁よりやや手前の天井から垂直に穿たれており、煙道の位置に違いがみられるが、本古窯群の第Ⅱ支群の3号窯に酷似する規模・型態である。

つぎに、第Ⅰ支群の各窯の構築位置については、1号窯、3～5号窯は主軸はほぼ平行に位置している。2号窯は主軸を異にするが、傾斜下に位置しているところから地形に合わせて構築されたことが考えられる。3号窯の灰原が2号窯を被っているところから、2号窯の廃棄後、傾斜面の上手に3号窯が構築されたことになる。4～6号窯についても重複がみられた。灰層の堆積状態から4号窯→6号窯→5号窯の順に構築されたことが判明した。また、構築にあたっては、狭い部分を効率よく使用している。特に、5号窯の構築が興味深い。5号窯は、廃棄された4号窯の焼成部を割り抜いて構築しており、そのため5号窯の焚口付近の天井は、極めて強固な状態の4号窯の窯尻部分を使用していることになる。

3. 出土遺物について

本窯跡の出土遺物の特徴についてみてみたい。器種は、甕・壺・鉢・塊の4種類がみられ、量的には壺が多数を占める。甕と壺の区分は困難であるが、本報告では第34図のように区分した。そのため、甕は小量で大形のものだけになっている。

甕は、口径24.5cm～35.5cm程度の広口の大甕がみられる。口縁部は短く立ち上がり頸部はわずかに縮り肩部で屈曲して胴部に続く。胴部はほとんど張らない。口縁部内外の整形は、ナデ状のていねいな仕上げである。胴部の外面は、ロクロを利用したヘラ削りで2cm程度の稜を残す。器内面は、あらい平行タタキののちロクロによるナデ整形で仕上げている。

壺は、大形のもの（壺A・B）と普通の大きさのもの（壺C・D）に分けられる。壺Aは、口縁部は直立し、胴部は肩部で急に湾曲して胴部は直線的に底部へ続くもので多量に出土している。器外面の整形は、ロクロを利用したヘラ削りで2cm程度の稜を残す。内面は、綾杉状のタタキのうえからあらいナデ整形がおこなわれている。壺Aは、口縁部の型態などから細分される可能性がある。壺Bは、全器形を知る資料はないが、短い口縁部を大きく外反させるもので、口唇部は丸味をもって平坦におさめる。整形は、口縁部は内外ともていねいなナデ仕上げがみられるが、器外面の頸部か肩部にかけて綾杉状の平行タタキを残す特徴的な仕上げである。内面は、格子状のタタキのあとでナデ仕上げをおこなっている。壺Bは、少量である。壺C・Dは、口径9～18cm程度の大きさで同器形を呈するものであるが、これまで「類須恵器」の特徴とされていたヘラ描きの波状沈線文をもつ一群を壺Dとして区分した。口縁部は比較的近く大きく外反するが、口唇部のつくりにバリエーションがみられる。口唇部を平坦におさめるもの、平坦におさめ下端に拡張するもの、口唇部を平坦におさめ内側に段をつくるもの、口唇部を2段におさえるもの、口唇部を細くおさめるもの、上方に延ばし丸くおさめるものなどが

ある。0.5～0.7cm程度の器厚で堅固で精微な焼きであり、薄手のためか焼けひずみのあるものが多い。壺Dのヘラ書きの波状沈線文は、波状沈線文だけを巡らすものと平行沈線間に2条～4条の波状沈線文を巡らすものとがある。さらに、平行沈線を施す場合に、先に割付けるものと、波状沈線のうちに平行沈線を割付けるものの両方がある。

そのほか、特徴的な壺に、大形の把手付壺がある。1号窯の煙道開口部から出土した完形に近い壺（6）でその形状を知ることができるが、把手は、同部中腹に対し2個横位に着けられるようである。着装に2通りの方法がみられる。1つは、6のように把手の着けられる胸部壁が内側に球形に凹められるもので、そのため横位の把手部分は胸部器壁の輪郭線の範囲内になり外へはみ出さないように着装されている。他方は、65のように胸部器壁を凹めずに把手部分を張り出して作られたものである。

鉢は、口径30cm前後の大鉢、口径20cm前後の中鉢、口径10cm前後の小鉢にわかれる。その他に、鉢の内面に摺目を施した摺鉢がある。鉢は、広い平底で胸部は張らず肩部で屈曲して頸部で締り、口縁部は短く外反するものである。口縁部の形に多少のバリエーションがみられるが、大鉢と中鉢には器形の大きな違いはみられない。小鉢には、壺状の胸部の張った器形もみられ、用途の異なるものも存在することが考えられる。

塊は、口径が9.8cmから17.3cmの範囲内で高さが6cm前後のものである。口縁部先端の仕上げは、わずかに内湾して丸くおさめるものもあるが殆どが粘土紐貼付による玉縁口縁をなすものである。底部は、平坦でヘラ切りのあとナデ仕上げがみられる。若干上げ底状であるが焼けひずみの場合が多いが、396や401のように基筒底状に仕上げるものもある。体部外面の整形はヘラ削りの仕上げがみられるが、内面は格子目タタキのうえからロクロによるナデ仕上げをおこなっているのが特徴である。

そのほか、特殊な遺物に注口がある。160と566の2例が出土したが、160は器体から剥離した状態であり、その形状から水注（あるいは土瓶）の注口部分と想定される。

4. 年代について

今回の調査では、時代を決める他の伴出遺物は認められず、窯の構造及びその生産遺物から時代を想定せざるを得ない。窯の構造においては、下り山1号窯・3号窯に類似型態が認められ、本窯の出土遺物では、塊など中国陶磁の器形の導入や摺鉢や大壺などの型態から中世陶の範ちゅうに属することが想定される。

窯の年代については、確認調査において熱残留磁気測定とC¹⁴年代測定を実施している。^{註6} 热残留磁気の測定は、第Ⅰ支群においては2号窯と3号窯の床面の測定をおこない、その結果、12世紀から13世紀の年代が得られている。C¹⁴年代測定値は、第Ⅰ支群1号窯焚口の木炭が1050±45Y.A.D (KSU992)、第Ⅱ支群6号窯の灰原木炭が1210±130Y.A.D (KSU993)、第Ⅱ支群3号窯の灰原木炭が1140±55Y.A.D (KSU994)と11世紀～13世紀の年代が得られた。

「類須恵器」は、ヘラ書き波状沈線文を巡らす壺の出土が多いことからこの器種に限定する傾向がみられたが、カミィヤキ窯の発見によってヘラ書き波状沈線文を巡らす壺とともに多器

種が生産されていることが判明した。これまで、沖縄を中心とする南島において「類須恵器」と共伴する遺物によって精力的な編年が試みられており^{注1}、さらに近年、沖縄においてはグスクを中心に大規模な発掘調査がおこなわれており、カムィヤキ窯タイプの陶質土器の層位的な発見が期待される。発掘調査から整理報告までの期間が短く、詳細にわたって内容を検討し、これまでの出土遺物との対比をおこなう充分な時間がなく、問題点を全て積み残したままである。そのようなわけで、この陶質土器の名称の問題についても、カムィヤキ窯タイプの陶質土器と集落遺跡などの共伴関係などの総体的な対比・研究によって解決されるものである。

(注)

- 注1. 佐藤 伸二 1970 「南島の須恵器」『東洋文化』 第48・49号 東京大学
白木原和美 1975 「類須恵器の出自について」『法文論叢』第36号 熊本大学法文学会
- 注2. 義 恵和 1984 「亀焼古窯」『鹿児島考古』第18号
四本 延宏
- 注3. 伊仙町教育委員会 1985 「カムィヤキ古窯跡群！」伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(3)
- 注4. 渋谷 敦他 1967 「下り山須恵器窯跡発掘調査報告書」熊本県立球磨工業高校郷土研究部
- 注5. 松本 健郎他 1980 「生産遺跡基本調査報告書Ⅱ」熊本県文化財調査報告 第48号
- 注6. 時枝 克安 1985 カムィヤキ古窯跡の熱残留磁気による年代測定「カムィヤキ古窯跡
伊藤 晴明 群！」伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(3)
山田 治 1985 C¹⁴年代測定値「カムィヤキ古窯跡群！」伊仙町埋蔵文化財発掘調
査報告書(3)
- 注7. 白木原和美 1975 「類須恵器の出自について」『法文論叢』第36号 熊本大学法文学会
- 注8. 佐藤 伸二 1970 「南島の須恵器」『東洋文化』第48・49号 東京大学
安里 進 1975 「グシク時代開始期の若干の問題について」『沖縄県立博物館紀要第
1号』沖縄県立博物館

(参考文献)

- 白木原和美 1971 「陶質の壺とガラス玉」『古代文化』第23巻 9・10号
白木原和美 1973 「類須恵器集成」『南日本文化』第6号
白木原和美 1976 「大島郡伊仙町の先史学的所見」『南日本文化』第9号
義 恵和